體裁その他は一に君の手腕に俟つ、
前田君の「陰影」が、もう出たころだが、見ましたか、正宗君とふたりで、だいぶ永い間凝つてゐたが、どんな表裝となつたらう、

序は、書きます、が、さう永いものは書きたくない、序といふより、本の終りに――「悲しき玩具」に土岐君のしたやうな――附けるやうなものを、多少かろくくだけたものをやゝ永く書きたいと思つてゐます、
これは、出來たら、すぐ送ります、

長い詩？　は駄目だ、あんなものを載せるのは、大によろしくないでせう、これから勉强して作るつもりだから、それのみ集めるやうな時期が來ないとも限らぬ、その時にたのみませう、
それに、手許にはその原稿もありませぬ、

出版屆、お送りします、若し僕の所の番地が必要なら君の手で書添へておいてくれたまへ、
坪谷村一番戸、です、

さうすると、いつごろ出來るでせう、
お手數恐縮ながら、初校でも再校でもいゝ、すぐそこにあるだけ、至急送つてくれませんか、何しろ、氣になつてしかたがない、序文を書くにも便宜がいい、どうぞ、

初め、非常に悲觀しましたが、いまでは、やゝおちつきました、どうせ、一度は來なくては濟まぬ今の境遇です、同じなら、早々それを濟ませておいた方がいゝのです、
そして、斯ういふ「故郷」といふものゝ味を、しみ〴〵味ふのも短い一生のうちに於ての重大な事業だらうとも思ひます、ゆつくり、四季それ〴〵の風味を味ふつもりです、
然し、さびしいのに何より閉口してゐます、讀むものも何もない、

古いのでいゝ、雜誌でも送つてくれたまへ、
東京の話、文壇の話、とき折りの御消息を待つてゐます、

校正濟のもの、どうぞ、至急お送り下さい、
以上

九月八日　若山生

西村君

二一

九月十八日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より、東京市、西村辰五郎樣宛（手紙）

少し改つたものを書かうと、數日間苦心したが、とう〴〵書けなかつた、とう〴〵しかたなしに、序とも何ともつかぬものを、いま認めて、お送りする、そのため、たいへん遲れたことをおわびする。
本文六號（四分アキか何か）で見出しを四號、名前を五號、などゝしたら、いゝかと思ふ、行數その他、よろしく。
八日あたりに出した手紙、もう御らんのことゝ思ふ。
本は、いつ出來るかしら。校正だけでも、早く見たい。

とりあへず、用事のみ、
十八日

西村君　牧水生

二二

十月十七日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より、下野國、高鑓背山樣宛（葉書）

お手紙、おなつかしく拜見しました、東京宛のおたよりをもみな身にしみて拜見したのでした、それに對して御返事もさしあげ得なかつた私の無禮をば、どうぞ、お許し下さい、私は充分に自身の心をば苦しめてゐるのでした、
父の病氣は、もう大方いゝのですけれど、何しろも

うずゐぶんの老年のことで、すつかり安心といふわけにゆきませぬ、かれこれで以て、すつかり抑留せられて、當分上京不能のあはれな身の上になつてゐます、でも、出るには出ます、

いつぞや、鮎のお誘ひをうけた時など、實際とび立つほどでした、とう〳〵お目にかゝる機會を失つたことを悲しみます、もつとも、さうした時がまた屹度來るでせうけれども、

お歌、「劇と詩」へ送つときましたが、一向面白味のない雜誌で、それに私の云ふやうにして、出しますかどうか、若しかすると投書並みに出してあるかも知れませぬ、その時は、どうぞお許し下さい、お歌には今までよりずつと心が出來て來たやうで、敬服しながら拜見しました、何なら青森縣北津輕郡松島村和田山蘭君などのやつてゐる雜誌にもお出しになつたらいかゞです、「東北」といつて、なか〳〵しつかりしたいゝ雜誌です、和田君らも喜びませう、

十月十七日　若山牧水

二三

十月十八日、日向、東臼杵郡坪谷より、東京市、西村辰五郎樣宛（葉書）

幸いにお天氣が續きます、

本はまだ出來ませんか、待つてゐます、

出來たら、その一部をすぐ青森縣北津輕郡松島村和田方東北詩社へあて送つておいて下さい、十一月にその增刊を出すとか云つてましたから、それで批評させたいと思ふのです、東京では、尾上さん、太田さん、綠葉君、挽歌君位ゐに送つて頂けばいゝでせう、たゞし、雜誌新聞社は別です、是は君のお考へで、出しといて下さい、

こちらあてに、十五部だけ、小包でおねがひします、それまでに、見本でも出來たら、先づそれだけでも見せて下さい、

文展や芝居や、いよ〳〵東京のシーズンになりましたネ、たゞ空しく思ふばかりです、

今年一ぱい、がまんして、それからまた出かけませう、

何か、おもしろいお話はありませんか、このまゝだと、化石でもしてしまひさうです、

十月十八日　若山牧水

二四

十月二十八日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より兵庫縣、小倉元次樣宛（葉書）

おたより、まことにおなつかしく拜見致しました、こまやかな靜かなおたよりの書きかたをみて、君のおこゝろもちを察することができるやうで、うれしく存じました、

大阪での御會合、話だけきいてもなにとなくほゝゑまれます、みんなの上に祝福あれと心より祈られます、そうですネ渡邊君の作を久しくみないやうだ、それからおついでがあつたら君から渡邊君にさういつてあげて呉れませんか、數日前、机のひきだしから渡邊君外三四人のひとの原稿を發見して驚いた、多分九月か十月の「劇と詩」に送るべきものであつたのを取りおとしておいたものと思ふ、まことに濟まぬことをした、時季がおくれてわるいけれど、こんどの號に出すやうにするからと、さう云つてあげて下さい、

白日社も何社もありはしませんよ、佳い歌を作るのがいちばんなのです、靜かに他を眺めて自分を愛育（はぐく）んで行つたらいゝぢアありませんか、さういふ間に却つて自己に忠實な、空虛でない作品が出來るものなのです、から騷ぎがもつともよくない、自分一人をあいてにしてゆつくりと詠んで御らんなさい、出來不出來のほかに氣になることはない筈です、いゝのが出來だしさへすれば、發表の方法など、どうにでも盡力してあげます、君の歌にこのごろ、だいぶ質實なおちついた所は出て來ましたネ、然し、まだ〳〵內容が乏しい、輕い、新鮮な濁らぬ血で全身をたえず養つてゐなくてはだめです、「死か藝術か」はまだ來ません、もう出來るころですがネ、私の方にはほんの二三部しか來ないだらうと思ひますが、來

たらばさうしてあげませう、さうですネ、上京の時には屹度おたづね致しませう、

十月二十八日　　若山牧水

二五

十月三十一日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より
東京市、西村辰五郎樣宛（手紙）

「死か藝術か」十册、「別離」一册、たしかに、難有う、君の葉書よりまる二日も遲れて届いたので、心配してゐた、

裝幀、まことによく出來てゐた、うれしかつた、表紙が少し枯れすぎてる傾きのあるのが氣になつたきり、あとはみなよかつた、なかをずつと開いて机の上においたところは實にいゝ、木下君にも君から吳々お禮を云つてくれたまへ、あの人のやはらかなすがたを思ひ出して、非常になつかしかつた、

別離の四版もいゝことだ、紙のなめらかになつたため、一層よくなつたぢアないか、

別離と死か…と相並んで届いたとき、ほんとに妙な氣がしてならなかつた、

あれを讀み、これを讀みして、いまもその妙な氣を續けてゐる、

死か藝術かには、別に九枚ほどの序文が出來てゐたのだ、併し、あまり仰山らしいかと思つて、それをば出さずにおいた、けれど、やつぱり出す方がよかつたとくやんでゐる、再版にでもなるときは、もとのはあのまゝで、本の終りにこれをくつつけたいと思つてゐる、さうしてくれたまへ、十二月か正月の雜誌にその序文をば發表するつもりだ、

死か藝術かを一册づつ左の二個所に是非届けてくれたまへ、ほんとうによ、

牛込區戸塚村下戸塚五九七、松楓館内、原田實
本郷區臺町十四、小林方岡本氣附、平賀財藏

桐の花はまだなの、遲いなア、出來てるのなら一册是非おねだりしたい、

君にもう一つおねがひがある、「死か…」の批評で、やゝ長いもの、短くとも注意すべきものが何かに出たら、それを送つて見せてくれませんか、君の方

でいる雜誌新聞であつたら、そのことを云つてくれると、見たあとを、おかへしする、讀賣新聞、「詩歌」「劇と詩」は毎號來て居る、文章世界も十二月、正月號は多分來ることになるだらうと思ふ、

アラ、ギ、人生と表現なんかには、君、送つておいたの、あすこらの批評はきゝたいと思つてゐる、

死か…には然し實をいふと非常に自分は不滿がある、まだ〳〵烈しい不純、不徹底が漲つてゐる、どうにかして、あれを洗ひ落さなくては、まだ〳〵僕の眞の藝術は出て來はしない、それだから、實にそれを思ふと、たまらない、

今日明日はまだいゝが、三四日たつて、どんなに憎惡怨恨の眼で僕は自分のこの新しい歌集を見ることかわからぬ、

忙しいでせうが、ときゝ〳〵おたより待つてゐます、

十月三十一日　　若山牧水

西村辰五郎樣

來年の初夏ごろに、上京する計畫をたてつゝあります、その間は、僕の藝術のために屹度尊い時間であらうと豫想されつゝあります、

「黑耀」とかには誰の批評がのりますか、雜誌、見度し、

二六

十一月四日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より、東
京市、平賀財藏樣宛（葉書）

册一日夜お出しの葉書、昨日涙の出るやうな氣持で、繰返して讀んだ。「死か…」の本を君に送ることについては本郷の岡本君氣附で葉書を出しておいた、多分、もう本を受取つて居ることゝ思ふ。君の忠告は、實にうれしかつた、無論、非常の苦痛を以てあれの出版を待つてゐたのであつた、僕の現今信じてゐる僕の藝術は、決してあんなものではない。けれど、あれはそれの芽生へのやうなところが

あるとは信じてゐる、あれにも何か或物がそのなかに含まれてゐるのは他のひとの眼にも見えはせぬだらうかと思つてゐるのだが、さうではなからうか。君の意見、並びに一般の批評などを店頭文學でゝも見附けたら、くはしく知らしてくんないか、待つてゐる。君のこんどのこの葉書で云つて居る不滿は、或は一首々々の區分的の不滿ではないだらうか、僕の思つてゐる不滿とは違ふ不滿ではなからうかと、思つたりした。△△君が「××」で僕の岬の歌に對して試みた批難は、僕にとつて、何でもないものであつた、アノ人はクロースのよしあしでも云つてる外に能のない人であらう。僕の不滿は、もつと根本的のものである。十二月の早稻田文學に三十首ほど出しといた、その後、八十首ばかり出來て居る。○○○○にも濟まない〳〵と思ひながら無さたしてゐた、お詫とよろしくをたのむ。

十一月四日、曇　　若山牧水

二七

十一月八日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より、兵庫縣、小倉元次樣宛（葉書）

お手紙、靜かな氣もちで讀みました、「死か藝術か」をば、いつでしたか、二日か三日のころ、小包から送つときましたが、屆いたでせう、歌を一首書きました、字が上手だもんだから、たいへんでした、おあしはいりませんでしたに、これでは、いゝ商賣をしたやうなものです。上京はせぬつもりでしたが、せねばならぬ事情もありましてネ、また上京することに思ひ返しました、行くもつらし行かぬも苦しい實にいやな境遇です。あなたのお身の上などは、たゞさうして居ればいゝ純潔な地位ですから、いゝぢアありませんか、上京々々とみな云ひますが、あれは一種の幻影です、夢遊病です、新しい雜誌の一つ二つも注意して見て居れば、決して人間の古くなる恐れはありませぬ。私の上京は、來年の二月か延びれば五月でせう。お逢ひするのを　たのしみにしてゐます。暮春のころ、明石の港を見たいものと思ひます。歌は、あなたがたのころは、あまりいろい

ろ考へずに、どし〳〵お作りなさい、强ひて作らず、芝居を歌にさせさへせねば、どんな風のを作つても屹度どこにか生命がこもつてゐるものです、考へてのみゐては、歌が硬くなつて暢びません。私も、昨今さかんに出來てゐます。十二月號は早稻田文學に五十首出しときました、劇と詩には短い詩を出しました、新年號には、一二百首もいろんなのに出しませう、いま手許に百首くらゐ出來てゐます。それぞれで私の昨今の朝夕を偲んで下さい。柿がなくなつて、私の家の園にはいま蜜柑と金柑のさかりです。今日は、阿蘇荒れの日とみえて、曇つてゐます。

十一月八日　　若山牧水

二八

十一月二十五日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より、東京市、原田實樣宛（手紙）

君の手紙と、
大島に居る福永挽歌君の手紙とは、
常に机の手近のところに置いてある、
そして、とき〴〵とり出して讀んでは心持を新たにしてゐる、

御返事として、
また、さうでなくとも、
ゆつくり手紙が書きたいけれど、まだ葬式のあと片附けすら充分に出來てゐないやうな有樣で、なにも出來ない、

さういふ陰暗な、不安ななかに在つて、
まがなすきがな靜かな自分の時間を見出しては、
自己の瞳のくもりを除かうと企ててゐる、

今日は、
お願ひだけ申しあげておきます、
本を買つて送つてくれませんか、古本にいゝのがあつたら尙ほ結構だと思ふのです、
二册、ほしい本があるのです、

一はルーソーの「ざんげ錄」です、たしか石川戲庵といふ人の譯であつたと思ひます、このごろの出版です、

一つは、ニーチエの「ツアラトウストラ」、これは新潮社出版で生田長江の譯、（南北社は大變やすかつたが、いまでもさうですかしら）

金は、よそから來た三圓の小爲替券があるので、これをそのままお送りします、これで右二册新しいのが買へたらと思ふけれど、もつと高かつたと記憶します、でしたら、めんだうでも神田か本郷か古本屋を探してみてくれませんか、ただ古本にはまゝ頁の拔けたやつがありがちで、それが恐いのですが、出來るならそれにも氣をつけて下さい、極端によごれてさへゐなければ古いのは構ひません、お忙しいだらうと思ふので、急にとは言ひません、然し、なんならどちらか一册新本を買つて送つて貰つておいて、あとを探して貰ふことにしませうか、

若し、金が餘るやうでしたら、神樂坂下の山田屋の原稿用紙を買つて送つて下さい、

小包料もありますから、それを忘れずに勘定してみて下さい、若し、少しの不足でしたら、すぐあとからお送りすることを固く約束します、

葬式のかたづけのためにと思つた金ですけれど、この位ゐでは全く役に立ちません、いつそのこと本にすればたいへんな出來ごとになるからと意を決めたのです、妙なことをするものです、

ニーチエのは、ツアラトウストラ以外に、邦譯がありますか知ら、これよりよりよきものがあつたら、それでもいゝ、御存じなら他のを知らして下さい、

ベルグソンのはまだ譯はありませんね、

譯でなくとも、この人のことを書いた雜誌か何かあつたとおもひますが、氣はつきませんでしたか、「六合雜誌」か「人生と表現」か帝文かの九、十、十一月號のうちでした、或はオイツケンであつたかとも、思ひます、それでもいい、

博文館の何とか紀念出版のうちに、何とか叢書といふのがあるでせう、第一編にクープリンの「決鬪」の出るのです、あの「決鬪」はもう出ましたか知ら、出てゐるならそれも是非見たいと思ひます、

右のうち、金の都合のいいやうに、入れ合せて、買つて下さい、これからあと、たび〳〵斯ういふめんだうなおたのみをするだらうと思ふのです、どうぞ、厄介でもきいてくれませんか、謹んでおたのみします、

僕は、いよ〳〵こちらにここ數年間引込むことになりませう、君のお手紙にあつたことを誠に心强く思ひつつ、右のやうに決心しつつあるのです、

そして、その間に出來るだけ讀書したいと思ふのです、實にはげしいなまけ者であつたため、今まで何一つ讀まなかつたので、みな新鮮な氣持で讀めるだらうと思ひます、山おくの溪の上にのぞんだ窓は讀書には實にいいのです、

何か、僕が讀んでよささうなものがあつたら、僕はさういふ方面では何も知らないのである故に、君からその都度に敎へて貰ひたいとも思ふのです、これもおたのみします、

別に手紙を書くつもりでゐるのですが、こちらにゐるとすると、どうも日本のすべての中心である東京とは離れがちにならうと苦痛に思ふのです、それで、それから避くるべく君及び他一二の友人から斷えまなくそのありさまを報導、刺戟していただき度い、そのことを改めておたのみしようと先日から思つてゐるのですが、どうかきいてくれませんか、

雜誌の一二種新聞の一二種はとるやうにするつもりですけれど、それでは直接の刺戟にはなりません、

斯ういふ地位に在る者のために、どうぞ、さうして下さい、切におねがひします、

けふは、このことは言はないつもりでしたが、ついで、筆が及びました、くはしくは、またに致します、

自分はあまりに子供であつた、とこのごろ、事ごとにつけてよく思ひます、そして、自己の現在を、大いに愛し度く思ひます、

これもみづから生む努力の一つでせう、自覺して自己の生活を營むために、まつたく私はあまりに怠惰でありました、實に實に濟まないと悔いてゐます、

新しい朝の夙く明けむことを、悲しく祈つてゐます、

君の健康は？　冬で、また鼻の痛む時季ではありませんか、

都會で、然し、苦しむのはその甲斐の多いのを思ひます、なまけて下さるな、またと再び逢ひ得ないその時の自己のためにです、

十一月二十五日　　若山牧水

原田實兄

早文の十一月號を借りることにしてあります、メーテルリンクの紀念號を見むために、

二九

十二月十八日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より

小川水明樣宛（手紙）

多少は、君の現在の心境を察し得られるかと思ひます、

けれど、了解に苦しむ所が、だいぶあります、

□

生命の流轉、といふことばを君は常に使ひます、流轉とは佛法で謂ふ無常がかつた意味か、それとも生命の推移、發見、洗濯の意味か、よくわかりませぬが、若しかすると、前者ではないかとも思はれる節がある、かと思ふと後者（この後者といふ方の右の言葉は私の私製語で、或はよく通じないかも知れ

ぬが）の方かとも思はれることがある。

どちらにしても、不鮮明で、徹底してゐませぬのを感じます、

若し、無常說でしたら、それは私の知らない境地で、何らの言說を有しませぬ、

後者でしたら、君は生命の流轉といひながら、常に頑なに生命の凝固をいとなむでゐるらしく見えます、

□

追はれるやうでも、腰が折れても、捉へられた樣でも、熱がついても狂的になつても、よくないといふお說には、大方贊成です、

そして、さういふ君自身の主義に裏切つてのみゐるのは、右の、君の皮相凝固です、

自分を見過ぎる、といつた口調もお手紙にありました、ところが、自分を見るのではない、自分で造つた自分の影を見て、自分を固くしておゐでるのではありませんか、それでしたら、今の君の努力は君自身の眞の生命と何の關係のないものなのです、

沒落といふ言葉もありました、どういふ意味だか、これにも不案内です、俗にいふ悟りといふのではありませんか、さうなれば、いよ〳〵君を遠く見ねばならぬ私の立場になります、所謂さとりでしたら、もう、日本（に特に多いが、元來は支那傳來でせう）の名物です、卽ち、皮ばかりで生きてゐる人種の謂です、濟まして山に入つたり、ひとの門から門に廻つたりした人々の話は耳にも眼にも、よく熟した現象です、みんな、自己をお留守にしての、のんきな所業です、のんきでない苦しいとおつしやるか、それは然し、眞の自分とはかけかもひのないことですから何とも致しかたがないのです、自分のうちのどの一片にか媚びおもねつてからの所業なのです、

□

自分の影を發見し得る人は、それを見得ない人に比べては、多分おもしろいかも知れませぬ、

眞の藝術は、然し、さういふことには頓着しないのです、

□

君のおつしやる脱落、光明等は、生涯お寺にでも入り終つたら、或は、求め得られるかも知れませぬ、藝術のなかには、ちよつと、落ちてゐさうに思はれない、

□

型に入りたくないといつて、どん〳〵自身で小さな型のなかに這ひ込むことを悦んでゐるのではありませぬか、人間には生れついて苦痛を——痛しがつてみたい本能があるらしい故、

□

藝術は、本然からしか出はしませぬ、純粹、絶對、虚無からしか出はしませぬ、

□

斯ういふ話は、然し、するだけ野暮なのです、ちよつと浮氣になつて、無駄口をたゝいたにすぎませぬ、

□

昨日、海岸から歸つてきました、今日が父の三十五日であつたゝめ、

海岸での、例のバケもの歌が三四十溜りました、二月號の何かに出すつもりです、さぞ、わるくち屋が繁昌するでせう、

□

君の歌、みな、なるほどゝは思はれます、なるほど、は然し、歌の能ではありません、

理屈の筋書をおよしなさい、さうした自分自身を卽ちに歌にお移しなさい、

□

斯うは云ひますが、「考へるといふことが乃公の仕事だ」と云つた主人公がロシアの小説にありました、その男の云つたこと、心にうかんでゐたことは、然し、君の歌より、ずつと眞實味に富んでゐたと記憶する、

要するに、ちからでせうか、手段ではないのかも知れぬ、

□

雪がふりますつてね、

昨日まで行つてゐた海岸の森のなかに入つてゐましたら、たくさん出て來て手や足をさすやつがゐます、それがみな黑い小さな蚊でした、ひとへものに羽織でゐても苦しくないのですからね、

十二月十八日夜、　　牧水生

小川兄

大正二年

一

二月十三日、日向國東郷村坪谷より、明石、小倉暮笛樣宛（手紙）

また、御ぶさた致しました、一月の二日から、四十日ちかく、裏九州の方から、南の端鹿兒島あたりまで旅行してゐましたので、ひとつは斯うなりました、人丸集、お手紙、うれしく拜見しました、

人丸の歌を讀んでゐますと、年代を離れて、今のわれらの心をしつとりとうるほすたとへばかすみがかつた山の山のおくの寂しさのやうなものがあります、獨歩のいはゆるヒューマニチイーがこれなのです、自分の歌と、人丸の歌とを讀みくらべて、私は、この間の夜、いひがたい哀愁に襲はれました、あゝいふ太古の詩人にくらべて、今のわれらの生命の、混亂と複雜とのあまりに烈しいのに思ひ及んで、一種云ひがたい涙をおぼえたのです、人丸の寂しさは、人類共有のさびしさです、ですから、それは今のわれらにも豐かに含まれてゐる、たゞ、それが、人丸のごとく、純粹であり得ないのです、

ゆつくり讀んで、何か感想でも書いてみたいと思つてゐます、

大阪の少い人たちの噂、いつもおもしろくきゝます、

君の短い言葉のなかに、その人それ〴〵の面目がよく表れてゐるやうで、いち〳〵微笑まれます、

雜誌の回覽、たいへんいゝことでせう、然し、見る心をいつも新鮮に保つ心がけを失つたら、いくら見てもおなじことですよ、うはのそらで見るのは、ダメです、白樺や、現代の洋畫などをおとりでしたら、その畫を、よく注意して御らんなさい、進んだ畫でやつてゐる手法で、短歌の方に用ゐ得べきもの、參考となるべきものは、許多あります、

歌は、さうです、むりに作らずともよろしい、けれども、止めて居れば、いつのまにか、すつかり止められ得る人がありますから、その仲間入りをしては、困りませう。強ひて作らずとも、少しの感興をも、空しくしない用心が肝要です、

私の近ごろの作は、あれは私だけの作で、君らはしばらくあれには關せず焉の態度をおとりになるがよろしいと思ふ、あゝいふ心の境地まで行かねば、ああいふ歌の心は解りません、また、作としても完備したものでは決してありません、自分にひそかな自信を抱いてゐるきりのことで、世間の評判は別な話です、

この三月から、九州で、小さな雜誌を私が編輯します、出來たら、お送りしませう、小さな、こぢんまりしたものを作るつもりです、

寫眞を、一枚さしあげます、妙な場所を、旅寫眞やにとらしたので、よくわかりません、このごろの私の朝夕をしのぶよすがにして下さい、

右の旅行のため、「劇と詩」二月號は、選を休んだのでした、三月號には出ます、何だか、新しい氣分が動きかけた樣でした、

では、左樣なら、君のために靜かな日の重なるやうにと祈ります、春が來たらば、明石はさぞいゝでせう、日向にも山ざくらが、來月はさきます、そうしたら、もとのやうな、ゆるやかな歌ができるかも知れませぬ、

二月十三日　若山牧水

小倉元次樣

二

二月二十四日、日向より、名古屋市、尾崎久彌樣宛（葉書）

まことに久しぶりで、寧ろ、あゝいふ手紙を貰つたりなどすることが、フシギな氣がする、なんだか、人間がよほどわるくなつた形を見るが、それだけ出世をしたのだらう、御申越の儀、承知した、題だけ「要するに解らない」と、今日考へついた、書上げるまでに今日から一週間ひまをくれたまへ、それまでに送つてゆかなかつたら、ダメだと思つてくれたまへ、

その代り、君に一つ大事な役目をたのまねばならぬ、

イサイ、アトヨリ、

二月二十四日　若山牧水

三

三月一日、日向東臼杵坪谷より、名古屋市、尾崎久彌樣宛（葉書）

こんな葉書（他人宛の文句抹消しあり）で、まことに失禮、一週間の約束がもう切れたかと思ふ、實は昨夜初めて筆をとつた、なんだか書けさうだが　もう三四日延ばして貰ふわけにはゆくまいか、さうしてもらひたいとおもふ、書かぬものだから筆が少しも動かないのだ、

三月一日　　若山牧水

四

三月八日、日向より、名古屋市、尾崎久彌樣宛（葉書）

つとめて、書きかけてみたが、――一度は八枚ほどのものを、かきあげまでしたのだが、どうも、おもはしくないので、まことにうそをついてすまないが、おことわりする、そのため、日にちをおくらしたりして、實にすまぬが、この上、おくらすのも心ぐるしいし、しつかり出來るといふ自信もないしするから、やむを得ず、この葉書を書く、實際、頭がわるい上にもつて來て、近來、よほど、へんな氣になつてゐるから、なか〳〵出來はしない、あしからず、お許し下されたし、

お願ひといふのは、くだらぬことなのだ、いつかまた折があつたらにしよう、それに五月上京の節に話してもいゝ、

大にフントウしたまへ、たいへんなお葉書、恐縮致しました、

八日　　牧水生

五

三月二十日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より、東京市、太田貞一樣宛（手紙）

拜啓、御無沙汰致しました。漸く春になりました。櫻が漸く咲きました、躑躅は既に二週間ほど前から咲いてゐます。

お願ひがあるのでございます。何だ彼だと延びてゐました小生等の婚姻届、あれを早く濟まさないと困ると思ひますので、届書を作りました。それで、双方に一人づつ證人がいるとかで、信州の方の申分では、あなたに女の方からの證人になつて頂きたいと言つて來たのです。私もそれを望みますので、甚だ突然ですが、届書を添へて、この儀をお願ひ致したいのでございます。恐入りますがお聞届け下さいませんか。

お聞届け下さいましたらば、證人とある方へ二通ともお所番地氏名生年月日御自署の上御捺印下さいませんか。そして、すぐそれを信州の方へお廻し下さいませんか。

こちらの方の證人は私の母かたの叔母の亭主で土地の寺の住職です。

なんでもこの數日中にお產があるらしいので、向ふでも大分この届出をせいてゐるやうなのです。恐入りますが、濟みましたらばすぐあちらへお送り下さいまし。

斯ういふ届出の何のが如何にも嫌ひ故今まで遲れ、とう〳〵自分ではよう書かずに六里ほどある村に村役場に出てゐる友人のゐる所へ行つてかいて貰つて來たのです。

右、用事のみとり急ぎおねがひ申します。

五月には出京するつもりです。

私の昨今の生活は、藍甕の腐りゆくやうな氣持です。重い〳〵、何とも言へぬ沈んだ痛苦です。

私の昨今の歌をどう御らん下さいますでせうか。

三月二十日　　若山牧水

太田貞一樣

先日おねだりした落語の本はだめでせうか、送つて下さい、母へ孝行の材料なのです。

（上欄外に横に）

あなたの場所以外の字のぬけてゐる所へは、あと

で書きこみます、私の印形はまだいま持つてゐないのです。こちらへ返つてきたとき捺します。

六

三月二十一日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より
信濃國、太田稻雄樣宛（手紙）

拜啓、小生方よりこそ早速お伺ひ致さねばならなかつたのですけれど、あまりの面目なさに、どうしてもようお伺ひしなかつたのでございます、どんなにか御立腹であらうと、ひたすらに恐縮してゐましたところへ、思ひもよらず御親切なお手紙を頂きましたので、まことに、ゆめかとばかりに打驚き打喜びました、そして、いろ〳〵のことを今更のやうにお耻しく、身を責められました、

まことに手前勝手の申分でございますけれど、これを機として、今までの不始末をばお許し下され、以後不束な弟を設けたと思召し、おつきあひ下さいましたならばどんなにか嬉しく、心强からうと存じます、申し兼ねますが折入つて、この儀お願ひ申します、尙ほ、恐入りますけれど御兩親樣初め御家族みな〳〵樣へ右同樣のお願ひをあなた樣から、代つて申上げて頂くことはできませんでせうか、あつかましいことでございますが、どうぞ、よろしくおねがひ申します、

戸籍屆出のこと、お許しを得て、夙くにも手續をも履むべきでございましたのを、昨夏歸郷以來、家事または自己の事業上等、いろ〳〵の紛亂に出會ひましたゝめ、殆ど喪心したも同樣の、とりとめのない心になつてゐまして、明日は〳〵で、とう〳〵今日にまで及んだのでございます、ためにいろ〳〵とお手數までかけまして、いよ〳〵恐入りました、屆書、當方分の捺印をば濟ませまして、昨日の便で小石川の太田氏宛送出しておきました、同氏よりあなた樣の方へ廻して頂くことになつて居ります、多分水穗氏も御承諾下さることゝ存じます、小生の印だけ、まだ落ちてゐましたが、小生目下手許に印形を持ちませんため、再度こちらにお送り下されたときまで

に作つておくことに致しまする、當方の證人は、小生母かたの緣の叔父に當るものでございます、少し離れますと、もつと近い親族などもありますけれど、この叔父が一番當村内に於ける近親なのでございます、

御兩親樣は、いつも御不快がちのやうに承つてをりますが、當時いかゞでございませうか、何卒、せい〳〵御養生下さいまするやう、申上げて下さいまし、小生も早く參上してお目にかゝりたいと存じますけれど、一寸、急に出來さうにありませんのを悲しみます、

お手紙など、當方母にも讀みきかせました、母もたいへんによろこんで、くれ〳〵よろしく申上げてくれとのことでございました、父のなくなりましたのちは母もたいへんに弱りました、いままで、自分の事業にのみ心をとられて、この老いたる人たちに苦勞のみさせて來たことを、まことにくやしく存じます、

當地方は早やすつかり春でございます、躑躅が眞盛りにて、櫻も咲きそめました、

早速御返事さしあぐべきでございましたのを、この十日あまり、他出中でございましたゝめ、相遲れ、まことに失禮致しました、亂筆にて、とりあへず、右のみ、申上げて筆を擱きます、この上とも何卒よろしくお願ひ申します、別しても只今のところ、姙娠中、尙ほお產の節など、いかばかりか御手數でございませうが、偏へに御情におすがり申しまする、盡すべきを盡しませぬのをまことに心苦しく存じますけれど、後日、今少し自由を得ました節、幾分かの御恩報じも致したく存じ居りまする、

先づは、とりあへず、右のみにて失禮致します、

三月二十一日　若山　繁

太田稻雄樣

七

四月七日、日向東臼杵郡坪谷より、岐阜縣、平賀財藏樣宛（手紙）

人生を迷信してるんぢやアないか、とは、痛快な言葉であつた、

僕も自身とき〴〵さう思ふことがあるのだ、

ところが、それに對する、人生に對する懷疑思想が、このごろ、よほど深く僕の頭に入つて來てゐる、懷疑といふのは不當かも知れぬ、つゞまり人生といふものを、寧ろ解剖的に考へて見んとする心の傾向なのだ、この一月末發表の僕の歌には、たしかにその陰翳が出て來てゐる筈だと思ふ、「別離」「路上」時代のと違ふのは、そこだと思ふのだ、

それもまだ極めて透徹せぬもので、斯う云ひ出したことが、實は耻しいのだ、然し、今ではもう拂ふことの出來ぬ陰を、それは僕の生命の上に投げてゐる、

人生を信ずる、といふこと、人生をきはむる、といふことに就いては、僕は飽くまでも積極的でありたい、（たいではない、あるのだ）執着的でありたい、かりそめにも誤間化し、遁避することを、しないつもりでゐる、

若し、それを迷信だと君が見たのなら、右に僕の云つたこととは、まるで違つた方面に話はそれて來るわけだ、いづれだらうか、

君のこんどの葉書は、然し、近來になく要領を得たものであつた、君が飛驒に於ける態度などもほゞうかゞはれると思つた、そして、まことにいゝことだと思つた、

こんど東京へ出たら、それこそ初めて東京といふ處へ出た氣になつて、最初から、大に勉強し直すつもりだ、今までの僕の態度は實に悔ゆべきものであつた、耻しくて仕樣がない・今後、若し、あちらで逢ふことがあつたら、君は必ず異つた牧水を見出すであらうと思ふ、

來月早々、是非出かくる、

學校も案外のんきで面白いものだらう、あまり生徒にもてゝ、却つて仲間などから睨まれぬ用心も必要だと思ふ、そんなことが、多少うるさからう、先日も一寸問合せておいたのだが、雜誌か何か出てゐるの、

ゆつくり、手紙をくれたまへ、

なんだか、こちらはもう夏だ、くるしくてしやうがない、

四月七日　　牧　水

春　郊　兄

八

五月十二日、日向坪谷より、伊豫國、三浦敏夫樣宛（葉書）

前略、多分十五日の寄港船で細島港を出ます、今治で一泊或は二泊（他より用事をたのまれました故）の上、あこがれぬいたその島へ參ります、今治から打電します、

とにかく參ります、大きな瀨の海、若葉の島靑葉の島、しきりと胸のそこが痛み始めました、

十二日　　若山牧水

九

五月十二日、日向坪谷より、兵庫縣明石町、小倉元次樣宛（葉書）

いろ〳〵のうるさいことで、たいへん御ぶさたしました、この十五日に立つことにきめました、瀨戸の、伊よの今治の沖の岩城島といふに三四日、都合ではそれから尾の道へわたり、君の方へ行くか、岩城島から汽船で神戸に出て、神戸から參るか、決定次第、お知らせします、それまでに、君の所氣附にて小生宛の郵便物が行くかも知れませんが、どうぞ、とつておいて下さい、何しろ、近々お目にかゝれるのが、たのしみです、寺島君をばよくおぼえてゐます、この人にもお目にかゝりませう、明石をどんな氣持で訪ふことでせう、へいたいさんに、なつては

たいへんです、

五月十二日　　若山牧水

一〇

五月二十一日、伊豫、岩城島より、兵庫縣明石町、小倉元次樣宛（葉書）

十八日當地に來ました、明朝出發、尾の道に渡ります、尾の道から、都合では二ケ所ほど寄つてゆきたいところもありますが、多分明後日、或はその次ぎの日あたり、明石に着くだらうと思ひます、いよいよ着く時間が解つたとき電報をうちます、右とりいそぎおしらせのみ、

五月二十一日　　若山牧水

一一

六月十三日、嵐山より、伊豫國、三浦敏夫樣宛（繪葉書）

いま、嵐山の大悲閣に登つてゐます、梅雨晴の濃い雲が、そこから、こゝからと湧き立つてゐます、酒に醉うた身體からは、汗が、しきりにしみ出ます、あたりの樹木の深いのが、誠に心うれしい、

六月十三日　　嵐山にて　牧水生

一二

六月三十日、小石川區大塚窪町二十より、伊豫國、三浦敏夫樣宛（葉書）

御ぶさた致します、去る十八日着京、昨日漸くカナシキ巢を定めました、なんといふあわたゞしいことだつたでせう、

お淋しいでせうね、でも、これからいよ〳〵そのあたりのよくなる季節に向ひます、よく、あの部屋や、あのお庭の柏の木などを思ひおこしますよ、

この八月一日から例の「創作」を復活發行することになりました、七月十日までに歌をたくさん送つて下さい、こんどはしつかりやりますよ、

三十日　　若山牧水

一三

七月七日、小石川區大塚窪町二十より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（葉書）

實にありがたうございました、實はよく〳〵困りぬいてゐるところだつたものですから、ほんとうに夢のやうに思はれました、おかげさまで葉書切手その他一切の機關にずつと油が廻りました、謹んで御禮申します、（雜誌には匿名か何かにしておきませう、極くかんたんに）原稿も拜見しました、あのころを想ひ起しました、太田方には封緘葉書が來てゐたのみですが「劇と詩」原稿は四種でしたか、雜誌の方も不充分ながらことが追々と運んでゐます、さう見つともない、あつてもなくてもいゝものなんか作りません、待つてゝ下さい、ゆつくり手紙が書きたいのだが、なか〳〵そのひまがありません、原稿もらひと、來客應接とで少し痩せました、つかれた夏の波の光る島で、うんと作つて下さい、待つてゐます、

若山牧水

一四

七月七日、東京小石川區大塚窪町二十創作社より、信濃、山崎斌樣宛（葉書）

山崎君！　斯う名を呼びかけたゞけで既に充分のやうな氣もするが、實に永らくぶさたしてゐた、葉書一枚書き得る氣分に出會はなかつたものと認めておいてくれたまへ、君はその後どうしてゐるの、矢張り健在なんだらうか、僕先月十八日漸く上京、數日前表記へカナシキ巢をかまへた、こゝでしばらくは睡つてゐるつもりだ、「創作」を八月一日から復興するよ、今度は石にかぢりついても、とにかく少しやつてみる氣だ、よろこんでくれたまへ、

とにかく僕の所在を明かにし、併せて君の消息を知らむと思ふ、御兩親樣には君から宜しく申上げてくれ玉へ、

七月七日　　若山牧水

一五

七月十日、小石川區大塚窪町二十より、牛込區小川茂辰樣宛（手紙）

前略

急ぎますので、當用のみ、

昨日は私一日出歩いてゐましたが、さき〳〵で二ケ所ほど兄の就職の方を話してみました、何か屹度あるだらうといふことです、無理にもこしらへて貰ひたいと申込みましたら、その運動をしてみよう、萬一それが駄目だつたとしても秋になつたら屹度出來るといふのです、

い〻仕事ではありませんが、先づ校正風のものです、

昨日のお手紙拜見しました、

御境遇お察し致します、私の宅においでてるのは、しばらくはい〻としましてもすぐ苦痛になられることゝ存じます、來客は多いし、子供はゐますし、それにこの通りの小さな家ですから、お互ひ心ぐるしい氣兼ねをしがちだらうと思ふのです、

で、斯うなすつちアいかゞです、私の近所に室だけお借りになつて、御飯をば私の方へたべにおいでになるとしては、

それか、私のツイ隣家にいま丁度貸間（食事つき）がありますから、一ケ月か二ケ月そこにおゐで〻、職業の方をお待ちになるとしたら、それでいやになられたら、西多摩の方へも行くといふ風にしておいでたら、一ケ月十圓位ゐのものだらうと思ひます、右の二つの何れかゞよくはないかと思ふのですが、いかゞでせう、

とにかく、おいでになりませんか、お手紙では一寸わかりかねたところもありました、雜誌の編輯をも手傳つて下さい、だいぶ忙しくなりました、

あまり、ものを深く考へ込まない心がけが肝心です、少し、のんきにおなりなさい、少しひとがわるくなる必要があります、

けふ、また一寸出かけます、留守中でも、上つてあそんでおいでなさい、家内にさう云つておきますから、讀む本もあります、

十日あさ八時　　牧　水

小川兄

一六

十月三十一日、伊豆下田沖神子元島燈臺より、岐阜縣、平賀財藏樣宛（繪葉書）

すつかり、手紙をかく時すらなかつた、この二十八日に島に渡つて、燈臺生活をやつてゐる、荒海のなかの岩礁、その上に燈臺は建てられてゐる、いろいろ驚くことが多い、牧　水、

三十一日

（古賀安治とのよせ書）

一七

十二月二日、東京小石川區大塚窪町二十より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（手紙）

御ぶさた、申しわけありません、いろ〳〵で、實に、そのことが不可能であつたのです、雉子の話、まことにうれしく承つてゐたのです。とれましたら、どうぞお送り下さいまし、近年其鳥を知らざること、もう何年だか知れません、

それから、誠に申しだしにくい話なのですが、若したいした御迷惑でありませんでしたら、金を十五圓ほど拜借できないでせうか、先月一杯、小生がずつと寢ついてゐたのに加へて子供まで同じく風邪で、二人一緒に醫者通ひのありさまでしたので、すつかり何も彼もあてが狂つてしまつたのです、それで、出來るだけの苦策を講じてとにかく今日までやつて來ましたが、それもいま全部盡きたありさまなのです、若しあまり御不都合でなかつたら、一時お立替を願へるか知らと思つて、この手紙を書く氣になつたのです、右の苦策の一として目下くだらない著述に頭を痛めてゐるのです、それが多分一月のな

かごろにはいくらかの金にならうと思ふのです、それでお返ししますから、それまでのところなのです、あまりぶしつけで、耻しく、用事のみにて筆をおきます、

然し、無理をしていたゞいては、一層苦痛を感じますから、それはおよし下さいまし、たゞ、よその話のやうに聞棄てにして下さい、早々

十二月二日　　牧　水　生

三浦敏夫様

すつかり舊來の生活を改革しようと、伊豆の旅行から息ごんで歸つて來ると、思はぬことのみ續いて起つて來て、(十二月なので、今月號を印刷させるべく、また大に苦しんだのです)うんざりしてゐます、一方から見れば實に滑稽で、苦笑です、

一八

十二月三日、小石川區大塚上町二十八、山名方より、牛込區、原田實様宛（手紙）

たいへん永く逢はずにゐる氣持がする、忙しいの、僕の方は、さんたんたるものだ、それでも歌がたくさん出來ました、みな新年號のものでした、自分の〻編輯をまだ少しもやつてゐない、この間おたのみしたものをば是非ものにして下さい、

それから、君自身及び君の知人で適當な人、(これもこの間一寸云つたと思ふけれど)に、たのんで、西洋の作家の特色ある人々の紹介、研究といふやうなものを毎號二つ位ゐづゝ出してゆきたいと思ふのですがネ、やつて貰へますまいか、先日十六日の會のとき、誰かゞ誰かの紹介をやつたやうですネ、そんなのです、心づきはありませんか、君の意見をきかしてくれたまへ、

もう一つ、佐藤君がこのころ譯して一冊にしたカーリン、ミヒヤエリス女史の「エルジエ・リントネル」といふものは、案外大きな本なんです、君の方に行きはしませんか、若し行かなかつたら、僕のを送りますから、その紹介を一寸書いてくれませんか、僕より君の方が適當だと思ふからおねがひするので

す、散歩がてら、それをとり、また諸雜誌今月號見にやつて來ませんか、この宿に直接來てみたまい、大塚のゴコク寺前の坂を上つて、つき當つて左に曲り、十間ばかり來て、床屋と文房具屋との間を這入つてつき當りの下宿屋です、

その時に、早稻田文學を持つて來て見せて下さい、まだ見ないのです、(それから、アノ、いつか見せて貰つたごく小さなうすい叢書（メエテルリンクのもの）を一二册持つて來てくれませんか、製本の參考に）來年から、僕はほんとに靜かな人になります、なれさうです、まことに悅しいことだと自分でもよろこんでゐます、祝して下さい、これから初めて僕にも作ができるだらうと思はれます、君にも大に生氣豐かになつてほしいと祈られます、とにかく、目下の我等は幸福だと信じます、

十二月三日午前　　牧　水

原　田　兄

フユーザン會を見ましたか、切符あげませう、(封筒裏面に)

一九

十二月七日、東京小石川より、岐阜縣、平賀財藏様宛（葉書）

今日は非常にいゝ氣持の日だ、實にいゝ氣持の日だ、「平賀君からたよりがありますか」と原田君が訊いた、考へてみると君もずゐぶん默つてゐる、どうしたの、――、然し、飛驒の冬はいゝだらうと思ふ、これは僕の空想がいはせる言葉ぢアない、本當にさう思つてるのだ、――、この葉書がついたらすぐ(少し遲れてもいゝが)その後の歌を送つてくれ給い、新年號のために、――、君はどういふ風に暮してるの、少しは消息をくれ給へ、牧　水、

十二月七日

(原田實とのよせ書)

二〇

十二月十四日、小石川區大塚上町二十八、山名方より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（手紙）

前略

先日は誠にありがたうございました、おかげさまで、一先づ急場をしのぐことができました、厚く感謝します、

すぐお禮をいふ筈でしたが、何かおちついて書いてみたく、とう〳〵今日になりました、そして、とてもゆつくり手紙も書けさうにないので、とりあへず遲れ走せながらこれだけかいてさしあげます、

借金取その他の來訪者が怖く、私はこの一二週間、自宅を出てひそかに下宿してゐます、すぐ隣が病院で、便利もいゝのです、まだ身體がわるく、すつかり閉ぢこもりです、裂けさうに熱したり、溝のやうに澱んだり、苦しい心です、實にこのまゝではさすがの私もやりきれさうにありません、

亂雜な悲觀話を、御めんなさい、このごろは親しい友にすら、逢ふのが苦しいほどになつてゐます、

溫き冬日の島を思ふことが、實に切です、

十二月十四日　牧水

三浦敏夫樣

正月もこの宿にこもりませう、都合では、どこぞ近い海濱へでも逃げようかなどゝ考へてゐます、わるいくせして、益々酒がやめられず、いんぐわな話です、

二一

十二月十八日、東京小石川區大塚窪町二十より飛驒國、平賀財藏樣宛（手紙）

君の歌を、まことに〳〵涙ぐましい心地で讀んでゐる、君の歌といふものが、いま漸く出來つゝあるといふことをしみ〴〵思はせられた、以前の歌を作つてゐた君から今日のこれらの歌を見せられやうとは、まつたく意外といつていゝかも知れぬ、この透明と熱と——人間味の豐かな歌を、僕はまことに尊まざるを得ない、そして、まことに限りなき喜悅を、涙のごとくに感じてゐる、漸く自分といふものを向

うに置いて靜かにそれに對してゐる君を、なつかしく悲しく思ふ、

なるなら、このまゝずつと續いて詠んでほしいものである、飛驒の冬は決して君に無意味ではないであらう、

正月號にはもう遲れた、二月號に出す、それまでにもつと〳〵送つて貰へまいか、三四頁ずつと續けて出さうぢやアないか、

廿五六日上京といふのが實際になつたら、その際ゆつくり話すことも出來るだらうが、僕の狀態も相變らずである、僕はいつになつたら斯う自分といふものを悲觀し呪詛することをやめるのだらう、眼前の斷片的のことより外には僕には終に滿足といふものが來ないで終るかも知れない、御存じの通り、僕は斷えず靜かなとき、おちついた時といふものを請ひ求めてゐる、そして、その時こそは自己に對して最も殘虐な眼を向くる時であるのだ、この心は然し自分以外には誰にも解りはしない、そして、至極樂觀者としてひとは僕を遇してゐる、僕はまだ〳〵行かなくてはならぬ、まだ眞實の自分といふものを知つてゐないのだと思ふ、僕はいまのやうなのんきな作品をのみ作つてゐることを酬いがたき負債だと苦しんでゐる、

三十歲になるといふことは、實に異常なよろこびである、僕は來年あたりから漸く自分といふものが少しづゝ解つて來るやうに思はれてならない、耻知らずであつた過去と別れて、新しい自分の時に早く〳〵入つて行きたい、けがれてゐぬ未來の尊とさなつかしさ、それを思ふだけでも、僕は馳けだしたいやうに思ふ、君にはさうした思ひはないであらうか、「時は過ぎゆく、時は過ぎゆく」といふ感じを身に觸れるやうに感じだしたことも、尊い一ッであらう、僕の斯うした傾向について、どうぞ喜んでくれ給へ、

廿五六日といふのは、然し、まだわからないのだらうネ、思はず君の顏を見るやうになることを、熱くひそかに請ひ望んでゐる、都合では僕は貧乏から逃れるため、年末にかけてよそへ旅行しよう

かと思つてゐるのだが、君の來るのがほんとになるのなら、待つてゐる、知らしてくれ玉へ、

細君も一緒だといふ話だが、ほんとかネ、ほんとならよろしく傳へてくれたまへ、久子さんも一緒？

平賀君　　牧水

僕はいま恐しき人種の來訪をさけるため、一月ほど前から獨りで近くの下宿へ來て泊つてゐる、

十二月十八日深夜、チヤンコロ下宿のあやしい一室にて、

雪がまだ解けず、ぽとり〳〵雫が軒に垂れてゐる、君は「みなかみ」を讀んでくれたか、僕はあの本の著者であることを、自分ながら非常な幸福に感じてゐる、僕はさうした過去に壓迫されてはならぬと不安をも感じてゐる、（封筒裏面に）

二二

十二月二十二日、小石川區大塚上町二十八山名方より、本所區、和田山蘭樣宛（手紙）

先日の夜はたいへん失禮しました、第一、夕方からやつてくると豫期してゐた君が一向やつて來ず、家内にも待たしておいた夕食をまづくすまして更に待つといふと雖もやつて來ず、そこへ氣早の郡山君と二人なんだからたまらない、いよ〳〵來やがらぬときめてしまつて、寄席やらサクラ屋やら活動寫眞やらに發展して行つたのです、

その翌朝、一寸お立寄下さるべきことゝも思はれたにその事なく、「和田君は憤つてゐたかね」と昨日原田君を訪ねて訊くと、さうでもなささうだつたといふ、要領を得ないが、一體いかゞの御樣子にや、お伺ひ申上候、

×

創作社文庫が歸つて來ました、なか〳〵面白い、早速第二號を出さなくちアなりませんが、君の方で一

切やつていたゞけませんか、文庫だけは速い方がいゝから、そのつもりでやつて下さい、僕はけふ書いて送ります、初めに綴ぢるときに綴ぢ込んでおいて下さい、雜誌をこの廿五日に私が持つて行きますから、それと一緒でもいゝでせう、さうしませうか、文庫の體裁その他、一に君の考案にまちます、綴ぢる絲を選みたいものですネ、表紙は二號も先づこんなものでせうか、紙數は二帖位ゐにするがいゝやうですネ、それから中山君の次に、次の二人を入れといて下さい、小川君（市内の分）にはどうしませうネ、文庫だけでも廻しますか、

日向國兒湯郡三納村　樋渡雅彌
日向國兒湯郡美々津町　小野岩治

廿四日には、行きます、君は矢張りあの時刻からでなくてはゐませんか、みなの集る前、文庫及び雜誌發送を終つておきたいのですけれど、

十二月二十二日　牧水

和田兄

大正三年

一

二月九日、小石川區大塚窪町二十より、信濃國小河原寛香樣宛（手紙）

ヤ、ヤ、と思ひながらお手紙を開きました、たまに斯ういふことがあると、ぢかに逢つたやうで、ほんとにうれしい、御元氣のやうだし、君の面目紙面に充溢してゐるのを感じて心強く思ひました、僕は不養生が祟つて、眞蒼な（内的また外的）つらをしてゐるが、のんきものんきだし、元氣も可なりあるやうです、まア、これがあたりまへなんでせう、三月の大會には是非出ていらつしやい、あてにして待つてゐる、すつかり準備が（といつても昨日、きまつたの）出來ました、可なり盛んであるらしい、何しろ、愉快に逢つて飲んで騒ぎませう、岩淵君からきいてはゐたけれど、君よりぢかにきいて、一層君を待つ心を固くした、三月廿八日の遠きを恨む心地です、若し、いゝ人があつたら誘つて來て下さい、信州からはだいぶ出て來るやうですよ、安曇の方が多いかも知れない、

山葵、實に素敵な好物なんです、なるほど誰やらからそこの名物ときいて、池田町の人にねだつてやつて、恥をかいてゐたところです、では一つお願ひします、さぞ、落涙ボーダとして悦ぶことでせう、

岩淵君も元氣です、同君兩人につくしてくれる君のありさまをいつでも僕は自分のことのやうにうれしく、そして、君を尊敬して、眺めてゐます、速く彼等の願望を叶へてやりたいものです、岩淵君には昨日逢ひました、珍しい大雪で、雪見酒と出かけて、二上り三下り、心細いなど同君お箱ものゝ總ざらへを承つて、大にいゝ氣持になりました、僕は健康に左右せられたかして、内心大にいま悄氣てゐるのです、何だか、むやみに世の中がはかなくて、目にみ、耳にきくものいづれか涙のたねならぬなき狀態なんです、然し、これは逢つてから話しませう、

二月九日、雪後快晴、哀愁濃、

牧水

小河原兄

二

二月九日、小石川區大塚窪町二十より、豐橋、尾崎久彌樣宛（手紙）

お便り、實にうれしかつた、恐らく君も正しく僕を想像してゐてくれることゝ思ふ、さう思ふことが、まことに一種の哀情を誘うて、うれしかつた、逢はぬことが可なり久しい、然し、昔の君であるやうにのみ思はれて、僕の心には些しの動搖もない、僕の疎懶は年と共に甚しくなり來つてゐる、單に世間なみのそれとは少しは異つてゐるのかも知れない、要するに自分を持て餘してゐるのだと僕は思ふ、それに比べれば、とゞめかねた君の不斷の緊張が美しい、君の歌のよしあし、それは言葉に出すほど、僕に、はつきりと解らない、雜誌に活字になつた上で、改めてもう一度讀んで見たい、僕はいま世間全般の歌といふものを實に下らぬ骨頂だと思ひ始めてゐる、僕は、もつと進まなくてはならぬ、君が依然として君を信ずるごとく、僕も相變らず僕を信じてゐる、これのみはお互ひ相顧みて微笑し得るところであらう、

出て來るなら春がいゝ、三月の廿八日から雜誌の會をやる、よかつたらその時にやつて來ないか、どうせそのころは僕は自他を辨ぜぬほど、まごついてゐるであらうが、とにかく逢へばいゝではないか、

二月九日　若山牧水

尾崎楓水樣

快晴雪光烈し（封筒裏面に）

三

三月六日、小石川區大塚窪町二十より、紀伊、下村悦夫樣宛（手紙）

紀伊の新宮の人として、またそこの山中の人として、君を知つてゐたのは可なり久しい以前からでした、それが昨年の秋の初めに下谷からおたよりを頂いて、驚いたのでした、それでも私の心には、矢張り紀伊の人としてのみ思はれてゐたのです、

いつも御ぶさたがちで相すみません、然し、默つてゐても何かしら心は通じてゐるやうで、さほどの苦痛をも感じないでゐます、君にもよくこの心持はお解りかとも思はれます、

歌に對する、尾山君に對する、色々の御意見は、悉く私の目下の心持と一致してゐます、何だか、一種の安心と心强さとを抱かせられたのを感じます、私が尾山君のを讃美した時は然し彼の最もいゝ時でした、當時に於ては少くも誰のより一番私の目に留つたものでした、昨今の彼は少々思ひあがりがすぎてゐます、それで、あんなひとりよがりのすました作を作つてゐるのです、尾山君のみならず、一體の歌がみんな私には緣無きものと今は見えてゐます、第一私自身の作すら、私の心の直ちではないので、一方ならぬ苦しさを感じてゐます、私はもつと自己に徹しなくてはなりませぬ、

君のお歌もまことに匂やかな鮮かなものではあるが、まだ幾枚かの薄皮がかぶさつてゐます、眞の匂ひ眞の光ではないらしく見受けます、なまなかの所での自己瞞着は忌むべきでありませう、(三月號はたいへん遲れました、そして君のお作をも來月に廻しました、今度お送りになるなら一緒にしませう)ほんとに御自愛を祈ります、

三月六日　　牧水生

下村兄

風烈しく街はうす赤く煙つてゐます、これでは私の待つてゐた飛行機もけふはとばないでせう、

(封筒裏面に)

四

四月十日、小石川大塚窪町二十より、信州、小河原寛香樣宛(手紙)

小河原君、君の無事だといふことをきいて、非常にうれしい、

六日の晩、送つてよう行かなかつたのが何としても氣になつて、まだ、何だか苦しくてならぬ、あの日はあれから京橋神田の本屋を歩き廻つて、不快極る

お辭儀を强ひられて、而かも豫想してゐた金高の半分をすらよう納め得なかつたのだ、そのため印刷所に出かけて行つて、どの位ゐ膏をとられ、汗をしぼられたか、想像してくれたまへ、それに、丁度、あの後だらう、さうした事がどれほどほんとに僕の頭に響いたらう、とにかく、あれから約五軒の店を廻り、どの店でも意外と屈辱と悲哀とを受けて、夕方(もう遲かつた、)漸く宅に歸つたのだ、よつぽど眞直ぐ大塚の終點まで行かうかと思つたが、さうするべくあまりに頭が、身體が勞れてゐた、とにかくと思つて自宅に一寸と思つて立寄つた、そして多少ヤケ的の冷いやつを四五杯引つかけたところ、とう〳〵そこにつぶれてしまつたのだ、十時々々といふことは頭から、のかなかつたが、とう〳〵駄目だつたのだ、その翌朝の眼ざめの惡さ!若しかするとまたもう一日位ゐ延ばしてゐはせぬかと、それでも、だいぶ心待ちに待つたのだつた、

篠の井からの葉書を見ると、僕はほんとにほろりとした、あゝとう〳〵彼も歸つたかと思つた、

僕は暫く沈默する、とあつた、いゝことだと思つた、美しい位ゐに思つた、

我等「寂しき人々」の群に、絕えざる交渉のあらむことを、心から祈られてならぬ、

今夜はいゝ月夜だ、また、午後中あの日の通り本屋廻りをして、その頭を淨めに夕方から二時間ばかり郊外を歩いて來た、麥酒を一木飲まうと思つてゐるところだ、歩いてゐながら、矢鱈に君のことが思はれたから、歸るとすぐこれを書いた、君の、例の沈み込んだ顏をあり〳〵と目の前に描きながら。

四月十日夜十時　　牧水

素山兄

五

八月十五日、小石川區大塚窪町二十より、信州宮坂常子樣宛(手紙)

その後御無沙汰、例年にない今年の暑さにすつかり當てられて、がらにもなく寢込むなどゝいふ慘劇を演じ、弱りました、

會員の申込も可なりありました、今日までで百二十人位あです、でも、これらの人は前かた金を拂ひ込んでゐた人なので、此際一向役に立たぬのです、矢張り君等の方のを力にしてゐます、(それに先月の十二三日に送つて頂いた五圓は六月號分のではなかつたでせうか、すると七月號分がこの際浮いてくるわけだがと考へてゐますが、如何でしたでせう、)

雜誌は思ひ切つて、ぢみなものにします、九月からまた新たに歌の雜誌が内藤と尾山とによつて二つも出るといふのです、ます〳〵世間一般の所謂「歌の雜誌」なるものがいやになりました、もとの「アララギ」の様な「人生と表現」の様なものにしたいと思つてゐます、一時失望を買ふかとも思ひますけれど、すぐその心が解ると思ひます、

ビラ(八月號)も金がないために、土屋君の忠告のやうにやるわけに行かず、いまだに殘念に思つてゐます、

小さいなりにも、極く堅實にはやつてゆけさうなので、矢張り會員組織はよかつたと思つてゐます、

佐久支部には、みな一人づゝに送りませうね、その方が君たちの手數を省き得ませう、金もそれ〴〵に送る様にさせた方がよくはありませんか、(そんな人が支部の中にも可なりありますがその人々をば御存じですか、でないと不便でせう、)とにかく、改めて支部員としての名前を今度書き直して送つて下さい、

實際いろ〳〵めんどうな手數ばかりかけて、恐縮します、先日井部君から、そのため十八日にわざ〳〵上田まで行つてから云々とあつたのを見たときなどもひどく感動したのでした、謹んで御禮申します、

土屋君井部君佐藤君山浦君伊藤君その他にどうぞ君からくれ〴〵よろしく傳へて下さい、

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

まだ、たしか、先日滯在中のお禮も云はなかつた様に思ふ、とんだ話です、遲ればせながら令閨によろしくおつしやつて下さい、千代三君はどうなりました、

茨木君先日來訪、昨日の「よみうり」でみたらまた信州に出かけた由、君逢ひましたか、

寫眞もありがたう、少々色男すぎて僕などはどれが自分やら少々不明の體であつた、然し背景はたいしたものでしたネ、

ア、君の所に「世界の一人」を忘れておきました、あれを至急送つて下さい、まだ批評紹介をやらなかつたのですから、

小諸はいよ〳〵忘れられぬ所になりました、今度はまたそこに現在ゐたときより歸つてから考へることに於て一層なつかしくたび〳〵思ひ浮べられます、以前は天然としての小諸をよろこび、今はそこに住む人間味に對して云ひ難いなつかしみを感ずるのだと思ひます、出來得べくんば酒を廢して、靜かに苦茗を啜る様な心持で諸君と數日間相對したかつたと思ひます、アクトウも形骸的のそれでは飽足りませぬではありませんか、

僕はこのごろ、非常に靜かになりたがつてゐます、そして、むやみと身邊の諸事萬端が心ぼそく悲しくて、しきりに過去を呪ふ心が燃えてゐます、笑つてはいけません、斯うしてだん〳〵人間といふものゝ深みへ進んでゆくのだと考へます、

そして、僕は自身の知つてゐる限りの人をさうさしたい、さうあつてほしいと思つてゐます、實際まご〳〵してゐると、しんじつ自分といふものを知ること無しに一生を徒費してしまふ様な結果にならぬとも限らないでせう、

今夜はたいへん忙しい、それに斯んなことを永々と書かずにはゐられないのをみて、僕の現境を察して下さい、若しいま僕が考へてゐる通りに自分を處置し得たらば僕のために悅んで下さい、そこに僕は今まで永い間求めてゐた僕といふものを初めて見出すのです、

八月十五日夜十二時半　　牧　水

古　梁　兄

井部君土屋君新津君その他へよろしく、

六

八月十九日、小石川區大塚窪町二十より、大阪市、三浦敏夫様宛（手紙）

御立腹のお葉書只今拜見、いかにも辨解の言葉もありません、單に君の方へのみならず、どつこへも、急な用事の走りがき以外は、一枚の葉書もようかゝぬほど、自分の生活に自信がないのです、永い間よくもそれに耐へられると自分で呆れてゐます、が、サテ如何といつて此處から動くことも出來ないでゐるのです、無暗に絶望的な氣持のみ起つてゐます、御病氣、それは意外でした、一體いつからなのです、そして、どこが病いのです、ひどくわるいのですか、ぶら〳〵遊ぶ位ゐの程度なのですか、おなじことなら、東京まで來てしまへばよかつたぢアありませんか、

雜誌は八月は休みました、借金ばかり溜つていよいよやり切れなくなつたのです、いつそよしてしまはうかと思ひましたけれど、他にとゞめる人もあり、とにかくまた九月からやることになりました、委細の報告書みた様な印刷物をお送りしたつもりでしたが、屆きませんでしたか、こちらで書き落したのかも知れません、別封お送りします、九月から出すのはホンの小さな印刷物で雜誌とは名のみの總六號十六頁位ゐのものにしようと思つてゐます、實は經費の點はとにかくとしても、私はいまのいはゆる「歌の雜誌」につく〴〵いや氣がさしてゐるのです、會員も強ひて求めず、集まつたゞけの人と金とでやれるだけのことをやつてゆくつもりです、うまくゆけば異色ある雜誌が出來ないとも限りません、

君の方に迷惑をかけてゐる例の一件に對しても實に面目ないことのみで、どうにかしてそれをつぐのひたいと思ひながら、自分の身一つをもてあましてゐるところで、ホントに手の出しやうがないのです、

とにかく何かの機會を待つてゝ呉れませんか、忘れる時なく氣になつてゐるのですけれど、どうかあしからず御推量下さい、

東京も實につまらない、私はつく〴〵昨年出て來たことを悲しみます、いまになつては歸らうにも歸られないし、右いふ如く雜誌の方が小さくまとまつたならばどこか近くの田舍に引込みたいものと考へてゐます、

大阪も暑い所とおぼえてゐますが、どうでした今年の夏は、

曾て夏を厭つたことのない私も今年ばかりはやられました、病氣になつて寢込んだりなどしました、君の病床をお察しします、

とりあへず御返事のみ申しあげます、病氣のことを一寸知らして下さい、

八月十九日　　牧　水

敏夫兄

今ころのあの島の家を思ひます、さぞいゝでせうねえ、

七

八月廿七日、小石川區大塚窪町二十より、大阪市、三浦敏夫様宛（手紙）

病氣がそんなではお困りでせう、然し何だか早晩君の上に惠まれる種類のものではあつたのだらうと微笑まれました、心配するほどのことはないのでせうが、早くさつぱりした氣分になられる様にいのります、そんな時は別しても頭が重くなるものですからネ、短氣を起してあせらないで下さい、

阿母さんのお話、ありさうな話だと何だか身にしみました、うはべだけでも（わるいことをいふ様だが）いゝのだから、氣をもませない様に、孝行しておあげなさい、靜かな氣持のときの寢ざめをわるくしないためにもその必要があります、

先日のお手紙にあつた様に、お言葉に甘えさしてい

たゞきます、實に、面目ありません、
印刷物、一緒に出したのでしたが、途中でなくなつたのでせう、九月の二三日には雜誌が出來ますが、とにかくもう一枚送つてみます、これにかいてあるのとも實際はよほど變りました、入會者は二百位ゐありましたが、そのうち百餘りは既に前の誌代拂込者であつたので、此際金の方には役立たない部分だつたのです、然し小さくさへやつて行けば行けないことはないと思つてゐます、體裁があまり見つともなくては困ると氣をもんでゐます、君をば無斷で社友にしておきました、歌は八月號分のを廻しました、然し、要するにこんなことは無意味ではないのでせうか、どうもそんな氣がしてなりません、現在やつてゐながらそんなことをいふのはバカな話ですけれど、でも少くとも、前よりは多少甲斐のある仕事になるだらうとは思つてゐるのです、
秋になりましたねえ、いかに暑くともうたしかに秋ですよ、空がずつと高くなつて、木の葉も固く色づきました、こんなときになると仕事がいやで、何處ぞへ出かけたくて困ります、十月ころに東北地方へ出かけようかと考へてゐますが、わかりません、せめてかういふ時だけでも氣まゝな自由な朝夕を持ちたいと思はれます、
大阪のきたない堀々にも矢張り秋が來たでせう、考へ出すと、行きたくてたまりません、折よくめぐり合せたさういふ運命を甘受して心ゆくばかり大阪の秋をお味はひなさい、

二十七日あさ　　牧　水

敏　夫　兄

八

九月十日、小石川區大塚窪町二十より、下野國高鹽背山樣宛（手紙）

秋になりました、御壯健ですか、私も先づ丈夫といふのでせう、でも近來たいへん厭世家になつてゐます、貧乏のせゐかも知れません、

秋らしい風が吹く樣になつてから、殆ど毎日のやうに貴兄をおもひ起します、何といふ故もありませんが、どうかしてこつそり訪ねてゆきたいものだなど、よく思ひ續けてゐます、
昨今、一緒に逢つてしみ〴〵酒でも飲みたいと思ふ人は、小河原素山君、中村柊花君、それに貴兄です、
山はことに秋らしくなつたでせう、朝夕のおつとめにも變りはありませんか、
私のこのころの仕事は、たゞ、散歩と空想と自己悲觀とだけです、
和田君もひどく元氣がありません、いたましい樣です、東京に出て來る人でないのではなかつたかとよく考へます、玉のやうな人にいさゝかのくもりをも帶びさせたくないものです、轉居しました、御存じですか、本所區向島須崎町二二〇です、小さな一軒をかりたのです、先日の洪水のときに見舞ひましたら、水の上に（私のスネ以上深いのを渡つて行つたのでした）赤くなつてゐましたつけ、
貴兄に逢ひたいと云ひますと、同君も必ずさう云ひます、
越前君はお役所の用で一ケ月ばかり福島に行つてゐます、兄を訪ねるとか云つてましたが、行きませんか、
春光君はどうしてゐます、あの人の歌を見て、あの人の姿をよく思ひうかべます、
歌といへば、九月號の貴兄のを私はたいへんに悅んで讀んでゐます、加藤君、中村君、貴兄のなどは最もいゝものだと思つてゐます、いつぞや三木露風君も切りにあなたのに感心してゐました、うはべには表れずとも人間のまことの心まことの光といふものは、どうしても埋り終る事のできぬものと思ひます、今の態度をすてずに詠んで下さい、強い心を失はずに下さい、田舍にゐる人に對してはそれのみ多少心にかゝります、
十月號のは十六七日ころまでゝようございます、たくさん送つて下さい、

十月號はもつと歌をげんせんします、不評判も高いが、心ある人はみなあの體裁に同感してゐます、さうだらうと思つてゐました、あれで、退く人は退くし、殘るものだけ殘るといふことになり、漸く本當のものになるのでせう、

お酒はいかゞです、私も相變らずこればかりはすてません、このころはいつも獨りです、夜ふけにたつた獨り起きてゐてやることもあり、小さな酒場のすみであまたのいろ〳〵の人の顏を見ながら、泣くやうな心で飲んでゐることもあります、泥醉といふことを忘れてしまひました、

この秋に、都合では加藤君が來るといひます、この人をとり圍んで我等はほんとにどんなに靜かないゝ氣持になることでせう、

このころ、芭蕉の句をとりだして讀んでゐます、漸くこの人の深い心を窺ふことができそめたのかとも思はれます、

○鐘あけて月さし入れよ浮御堂
　朝顏にわれは飯食ふ男かな
　十六夜はわづかに闇のはじめかな
　明月や池をめぐりて夜もすがら
　小蝶にもならで秋ふる菜虫かな
○道のべの木槿は馬にくはれけり
　痩せながらわりなき菊のつぼみ哉
○よもすがら秋風きくや裏の山
○あか〳〵と日はつれなくも秋の風

貴兄にも同感せらるゝことゝ思ひます、

見も知らぬ山の秋を背景に靜かに動いておゐでる貴兄を想ふことによつて自分の心を靜めたいものと思つてゐます、

綾雄さんによろしく、

九月十日あさ　　牧水

高鹽背山兄

曇つて冷い風が吹いてゐます、けふは穴だらけの障子を張らうと思ひます、（封筒裏面に）

九

九月十五日、小石川區大塚窪町二十より、新潟市、平賀財藏樣宛（手紙）

さびしいと君のよくいふのと、僕のいふのと、どつちが一體深刻だらう、僕も實際やりきれない、自分の身に入つて來てはまた、永劫に脫れてゆく「時」といふものを、實際まざ〳〵見てゐる樣な氣持だ、その場合「時」のすがたといふのは、まざりけのない「人生」の底なのかも知れない、正視するに忍びない、そして、見てゐなくてはならないのだ、

一兩日中に半切なるものを送らう、一緒に尾山の「異端」をも、

尾上さんの短冊は急には手に入らぬものと思つてくれたまへ、

この三四日、福永君や北原君と飲み續けた、飲み始めれば底の底まで飲みたいし、底まで飲めばもとの姿に立ち歸るのが死ぬほどつらい、酒もたゞ味のために飲むうちでなくてはだめぢアないか、あゝ、さういふうちにも飲みたい〳〵、

十六七日、といつても二三日うちだが、歌を送らないか、君の歌を心から待つてゐる人が可なりあるのだから、すこし身を入れて作つたらいゝぢアないか、空しくあせつてゐたつてつまるまいと思ふ、

旅に出たいとまたしみ〴〵思ふ、

自分で、妙な、厭アな深みへだん〳〵はまつて行く樣で、怖くてたまらない、

要するに、なぜ斯う意氣地がないんだらう、

けふは昨日からかけて大變な雨だ、酒がのみたい、さうして、飲めさうにもない、

和田君越前君の方はまた水に浸されてゐることだらう、

北國の秋もいゝだらう、東京のすみ〳〵にもさうらしい氣がみちてきた、カミヤバアの朝の氣分などまたなくなつかしいものだ、

君の平安と靜謐とを祈つておく、

九月十五日　　牧　水

春　郊　兄

令閨によろしく

一〇

九月二十五日、小石川區大塚窪町二十より、本所區、和田山蘭樣宛（手紙）

和田君、

イヤな日ぢアないか、

けふ君はどうして暮らしました、

實は、印刷所に行つたので、微雨のなかを傘もさゝずに吾妻まで行つたが、あれから引き返してきたところです、さうしたら　君の手紙、原稿が來てゐた、

×

手のおできといふのは直つたの、

あの話をきいたとき、ぞつとするほどいやだつた、ほんとうに、願ふから君の身に、君の靈にけがれを帶びさしてくれたまふな、

我等は我等の前に來る、あらゆる境遇といふものをずつと瞰下する習慣を作りたいものと思ふ、さうすることは、一面人間の色や匂ひやあぶらやらをぬいてゆくことで、厭ふべきことだと思ふけれど、境遇にまけて、一生にたつた一つしか持たぬ信實心や靈魂やらをむごたらしくも荒らしてゆくには優つてると思ふ、そして、君やら僕やらはその心がけの最も必要な地位に在るものと云つていゝだらう、

あらゆる境遇、運命といふものをすべて靈魂のよき糧とすることが出來れば、もう無上の幸だ、そして、それを努めるのは人間の最も偉大な事業ではないだらうか、

×

僕は斯ういふ事を、いつともなく信ずる癖がついてゐる、今年の自分は少くとも昨年の自分よりよりよく、より豐富な者になつてゐねばならぬと、

僕は道などを歩きながら、よくこの癖を出す、そしてそのたびごとに、いつもぞつとせざるをえぬ、僕のこのころのおちつかぬいら〳〵してゐるのにはいろ〳〵原因もあらうが、斯うして、非常に心のあせるために生ずることも決して少くない、然し、あせらずに濟まされる問題ではないと思ふ、どうかして空しくあせることなしに、着々と徐ろに急ぎたいものではないか、さきの見えすいた樣な行程を辿りたくないものである、そして、それも自分の心がけ一つでどうともなることではないかと思はれる、

以上、廿四日

君のこんどの歌は、あまりよくないと見た、「蜻蛉追ふ子らの……」「ひつそりと秋日這ひをり……」の二首は秀れてるが、あとのものは淺いか、或はいやしい歌である樣だ、いやしいとは、何か〳〵と歌になるやうなたねをきよろ〳〵探し廻つてゐる樣な處のあるのをいふのだ、從つてその姿におちつきがなく、いやしく見える、

貴意如何、

僕のは十月號に二三十出しておいた、出た上で御批評を願ひたい、

×

加藤君の來るといふのは、實にうれしいことだ、いかやうにして我等は彼を迎へたらいゝだらう、今から考案しておかうではないか、

×

越前君に聞くと、千駄木（千駄ケ谷の誤りならむ）の向ふの角筈とやらへい、口があり相だとのことであつたが、事實なの、

角筈ならたいへんいゝ所だ、學校といふのも何だか見當のつく氣がするが、つまり新宿の向ふ、甲州街道の近所になる、さうなれば結構だと思ふが、どういふ都合になつてるのだらうか、

×

今日もいやな日だ、けふも印刷所へ行かねばならぬので、都合では君の方へ行くかも知れない、頭がいぢわるく痛む、風邪らしくもないのに、いやな氣持だ、

×

要するに、もつと靜かな日をお互ひに送りませうよ、自分の本性に適つた生活を送りませう、かけがへのない貴重な一日々々をむざ〳〵すてゝゆくのが苦しくてたまらないではありませんか、

また、君自身では、君の上京をして無意味ならしめない心がけをも持つてゐてくれたまへ、この機會に一寸書き添へておく、

九月二十五日午前十時　牧　水

山蘭兄

一一

十月二日、小石川區大塚窪町二十より、信濃、小河原寛香樣宛（手紙）

お手紙、ありがたう、

可なり熱烈な勿體がついてゐたが、何しろ松茸はありがたいネ、實はこの四五日、細君や友人とこそ〳〵おねだりの意を交換してゐたところであつた、二三日前の晩越前君と神田の肉屋で飯を食ふとき、その初物（驚く勿れ、厚さ一分長さ一寸位ゐにさいたのが一枚二錢位ゐに當つてゐた）をしみ〴〵珍重しつゝ二人連署の上、おねだりの手紙をかいたのだが、醉がさめるときまりがわるくなつて、出さずにおいたといふ有樣であつたのだ、今夜か明日はこちらに着くだらう、早速彼及び山蘭翁などをよんで一杯やらんとぞ力んでゐる、東京にもよほど大きな八百屋でなくては、まだ出てゐない、今年は何處にも少いのださうだ、感謝々々、

君の戀物語を、いつか君と同じく眞劍になつて讀

んだ、いかにも君らしい態度だと心で思ひつゝ讀了した、僕はそれに對して今暫く批評がましい言葉を慎まうと思ふ、また、批評などなし得ない、君の擧げた三つの條件のうち、僕の最も同感したのは、結婚していゝか惡いかわからぬといふ一つだ、僕自身の經驗からも他の人のを見ても、僕は實際結婚といふものを疑つてゐる、周圍の人たちに對しては必ずの樣にそれを否定してゐる、けれど君に向つてはそれがどういふものか、迷はざるを得ない、實はこの間或る友人のうちに酒を飲んだとき、その妹がお給仕に出た、友人が、此奴ももういゝ年だがどこかおよめにやらなくてはならぬ、君に心當りはないかと云つたのをきいて、僕は心中ひそかに、小河原素山老を思ひ浮べてゐたのであつた、怒つたり笑つたりしては困る、眞面目でさう考へたのだから、この柄にない老婆心を、とがめずにおいてくれ、そんな有樣なので、君の結婚といふことに絶對に反對出來ぬところもあるのだ、然し、空しく心をすさませる（といふことになる樣なら）よりは、結婚した方がいゝと思ふ、僕は實際君の性を汚したくない、今日の手紙を讀んでゐても、ます〳〵君を美しく貴く感じて、たまらなかつたのだ、君の生（ライフ）がそのために少しでも豐かになり、美しくなると思ふなら進んで結婚したまい、どうもその方がよくはないかと思ふよ、世間がどうだとか、前言に對してどうだとかいふ樣なことは、失敬だが、愚の極だと思ふ、そんなことで自分の信じることを曲げるのは「自然」に對して非常な罪惡ぢアないか、そんな骨董的な意地なんか、實に無價値だ、よしまた前には心からそれを打消すことに力めたにせよ、生きた人間は枯れた天秤棒ぢアあるまいし、心の變化をどうして止めることが出來るだらう、少しでも氣になるならその事を公然と辯明してから着手したらいゝぢアないか、そんなことで、折角萌えそめた心の芽を自ら枯らすなどはどう考へても罪惡だと思ふ、

しかし、斯ういふ事は、要するに當局者でなくては解るものぢアない、僕はたゞ普通の「世間の人」「路傍の人」として、かく云つたにすぎない、けれど友人

の生活の豐と貧とは決して遠い火事ではないのだ、

行きたいネ、ほんとにこつそりと行つて、じいつとしてゐて、こつそり歸つて來たい、行くかも知れないよ、目の前に君やら君の背景やらがちら〳〵して仕樣がない、

辰雄君との一件、失敬々々、あゝいふことは近來よく〳〵いやになつてゐるのだけれど、その場の境遇に負け易い身は、すぐあんなことになつてしまふ、

一昨日の晩も越前君とツイ脱線して、實にまづい思ひをしてゐる、ひとつは秋がなす戯れかも知れない、

〇〇は悲哀ださうだネ、まだ見舞にもゆかないが、多少氣の毒な感がする、猪食つたむくいで、止むを得ぬ事ではあるよ、

東籬君のときには、ほんとに一晩泊りでいゝから出かけて來ないか、そして、一緒に歌舞伎でも見ようぢアないか、それもこつそり出て來る事だネ、

〇〇〇も悲哀ださうだ、その因は細君にある樣だ、書間暴威を振ふのみならず、夜更け人定つてのちも彼の細君偉大なる暴君となるらしいのだよ、可哀相に、老人顏色黃然としてゐるよ、老人だけに悲哀ぢアないか、

東京も寒くなつた、一昨日の晩雨の中を奮闘して廻つたバチで風邪を引いてけふなど妙に惡感がする、

いゝ季節だ、大に勉强せむとぞ（笑ふな）思つてゐる、イヤ實際少しかせがなくちアやりきれないよ、

貧乏のために身を枯すのは勿體ない、

松茸のお禮に美人をとのことだが、さういふものに近來縁がないので、とりあへず僕の手持ちにしてゐた「秋風の歌」を送る、別に製本させたのだが、これも餘り氣持がよくない、君の氣に入るかどうか危いが、旅行案内をも添へておく、僕は山や川の寫眞を見るのが實に好きでネ、これをば机から離さずにおいたのだ、先日同じ樣なのが手に入つたから古いのを送る、せめてこれでも眺めて雲水心を慰めようとしてゐるこの本の舊主人を憫れんでくれ、君があまり好きでなかつたら誰にでも廻してくれ、他に

何かと見廻しても貧弱な書齋に、物も無い、

何か讀みたいと思はないか、僕は切りに讀みたい、

飜譯もの〻大きなのを片つぱしから讀んで行かうと考へてゐる、圖書館通ひだ、

そして、妙に、書いてみたい、書くよ、不朽のケツ作たらむことを欲しようぢアないか、

雜誌は五六日になるだらう、金がないので遲れるのだ、歌、送つてくれ玉い、君の九月號のが可なり評判になつた樣だ、九月號で一番いゝと云つた人が二人ある、一人は守屋其翠、一人は樋渡花明、

僕の歌はヒアイ〳〵、どうもいかんネ、どうも心とびつたり合はなくなつた、

今年は繪の展覽會が澤山ある樣だ、見に來ないか、

ハ、、誘惑々々、

百舌が啼いてゐる、あゝ、またしても君の近所がまぼろしに浮んでくる、

頭が痛んでたまらない、郊外にでも出たくなつた、

然し、けふ借金取が來る筈だ、それを威カクしておく必要がある、

牛鍋でも一緒につゝきたいネ、それこそ松茸でも入れて。中村君はどうしてゐるだらう、相變らず昂奮して、考へ深い樣な目をして何處かを歩いてるだらうナ、あゝ、皆に逢ひたい、

十月の末、行くよ、どうかして行く、

十月二日午前十時　　牧　水

素　山　兄

わさび、ありがたう、今少したてば酒のかす賣りが出るから、そのときお願ひしよう、

一二

十月十三日、小石川區大塚窪町二十より、市外世田ヶ谷、源豐秋樣宛（手紙）

先日から重ね〴〵失禮のみしてゐます、あの夜など、歸つてきてから實に心苦しうございました。

めづらしいおみやげ、何ともありがたうございました、兼てあの茸の話などしてゐた所でしたので一層うれしうございました、越前小川君等をもよんで、一緒に頂きました。

このつぎの日曜か土曜にいらつしやいませんか、おいでる時を一寸知らしておいて下さいまし、地圖を出して駒澤村をしらべてみましたら、なかなか遠いんですね、こゝから出て來てるすぢアたまらないと云ひ合つたことでした、然しさぞいゝでせうね、もう秋も更けたでせう、身體がよかつたら私からお訪ねするのですけれど、殘念至極です、お歌の批評は、おいでたときにゆづりませう、

遲ればせながら、お詫やらお禮やら、申しあげます、

十月十三日　　牧水

豐秋様

一三

十二月二十三日、小石川區大塚窪町二十より、下野國、高鹽背山様宛（手紙）

御無沙汰致しました、今日も用事のみとり急ぎ認めます、

「創造」と合併といふのはたゞ假りの名で、こちらは舊社友の作品發表の舞臺を借るため、向ふは雜誌を多く賣るための謂はゞ利益交換から出たことでした、「創作」はなくなつても創作社はあります、そしてほんとうのきりつめた社友同志は矢張りそれとなく合同して行くことになるだらうと思ひます、作品はどうにかして發表し續けて行けるだけの處置をばとるつもりです、内藤君から云つて行つたといふことも要するにそれと同じ程度の利益交換なのです、いち〳〵御知らせしなくてはならないのですけれど、色々とり込んでゐるものですから、ツイ失禮してしまひます、

雜誌をやめたについて、貴兄にもいろ〳〵御迷惑をかけ、まことに濟みません、强ひてやつて行けば行けないこともないのですけれど、よく〳〵歌壇とか歌の雜誌とかいふことがいやになつたから思ひ切つてよしたのでした、そんなくだらぬ渦中にごちや〳〵になつてゐることは（ならなくともすみ相なものですけれど、私の樣な意氣地なしは不知不識それにまき込まれがちです）到底こころが許しません、

止せばいろ〳〵困ることの多くなるのを覺悟の上でよしました、或はこの心を御推定下さることゝ存じます、そして我々はいま誠に自由な、すが〳〵しい新天地に立つてゐるのです、何だか靜かな愉快さを感ぜずには居られません、君にもそのおつもりで、今一層心を新たにしてやつて下さい、他の仲間もみなさう云つて欣んでゐます、

先日お送りになつたお歌は、實にいゝと思ひました、正月號の「創造」に出しておいた中で、君のと松岡君のとが最も心に殘つてゐます、今までにない鋭い力のあるのに驚きました、君の生活の今までにない潑溂さを感ぜさせられました、沈滯と安堵とをかりそめにも知らない人であつて下さい、そして昨今の和田君のやうに混濁した動搖をも、

私もこれから作りませう、何だか出來さうです、和田君の「落日」が來ましたネ、あのころの同君のには矢張りなか〳〵いゝ處がある、

先日、齋藤君と綾雄君とからたいへん元氣のいゝお手紙を頂きました、君から兩君にお禮をいつておいて下さい、右の雜誌や何かのことも傳へておいて下さい、

今年は何といふ惡年であつたか、いよ〳〵切りつまつた今月の初めになつて、とう〳〵細君にまで寢つかれてしまひました、この十五六日には一寸危篤に見えましたが、今日ではよほどよさ相です、全く弱りました、私が既にふら〳〵してゐた處なのに、揃つてこの有樣になつたのですから、今では私が子守であり看護人であり、おさんどんであり金つくりであらねばなりません、何だか滑稽な樣です、

今日、菊池君から手紙が來ました、雜誌のことをかいて、そして矢張り同じ樣な事を云つてあります、君等のこともいろ〳〵かいてあります、

お忙しいでせう、御達者ですか、

二十三日　　牧水生

高鹽背山兄

「創造」は社友でなくともいゝのです、本屋からお求めなさい、（原稿紙欄外に）

大正四年

一

一月十四日、小石川區雜司ヶ谷、永樂病院隔離室三號より、日本橋區、西村陽吉樣宛（葉書）

その後暫く、お變りなく御活動のことでせう、
先日來、細君のお伴で、病院に寐起してゐます、しかも隔離室に、
すみませんが「別離」の新しいのを一册送つて下さいませんか、歌ずきと稱する醫學士氏に呈上しておく必要を感じてゐますから、どうぞ願ひます、

十四日　若山牧水

二

三月二十四日、相模三浦郡北下浦村長澤より、東京市、西村陽吉樣宛（手紙）

西村君、先日は失禮、僕にとつては近來にない面白さであつた、
色々めんだうを見て貰ふのさへたいへんなのに、先日はまた土岐君を通じてお願ひしたことを早速聞屆けて頂いて、ほんとに難有う、おかげさまであの翌日小石川を引拂つてこちらへ移りました、あつく御禮申します、あゝして貰はなかつたらひどく厄介になつて到底あそこを出られなかつたかも知れない、（その後、君の方に或る所（辯護士）から何か云つて行きはしなかつたか知ら、例の短册會のことをきき知つて何か云つてゐたから若しやと思ふ、その時は全然若山に關係ないことだと云つてはねつけてくれたまへ）
下浦をば君は知つてゐるのか知ら、實にあつけないさびしい所だネ、愈々こゝに住むのだと思ふと、何とも云へぬ豫期しなかつた心細さが身にしみる、來てからまる五日になるのだが、まだ何も手につきません、でも病人は喜んでゐます、實際彼女のためにも僕のためにもいゝことには相違ないでせう、
短册は今日土岐君に屆いてゐる筈です、今後とも萬事よろしくお願ひ申します、
時々、おたより下さい、

三月二十四日朝　若山牧水

西村陽吉樣
妻からくれ〴〵よろしく申しました、

三

四月三日、北下浦より、東京市、西村陽吉樣宛（葉書）

けふは四月三日、例の展覽會のひらかるゝ日とおぼえます、すみませんが誰々がかいてくれたか、その人々を知らして下さいませんか、手紙を出したいと思ひます、地方からの註文も少しはありましたらうか、
いくらかおちついた樣です、けれどまだ何に手を出していゝかまごついてゐます、靜かな日に御來遊如何、久しぶりに三崎にでも行つてみたいと思ひます、土岐君にお逢ひでしたら宜しく、

三日　若山牧水

四

四月十四日、相模國三浦郡北下浦村創作社より信濃國、重田彌次郎樣宛（手紙）

お手紙を見てゐると、まぢかに君を見てゐるやうな氣がします、
みな、誘はれて讀みました、けれど自ら求めて身をやぶることだけは愼んで下さい、それは決して自己に忠實なことではありません、あらゆることに當るに足るだけの精力を身に湛へておくことは何にも代へ難いありがたさです、徒らにみづから感傷し、みづからさま〴〵に感情を作爲することは決して眞實の戀でないと思ひます、
けれど、これらの言葉が、君に當らないのでしたら、失言をお許し下さい、
君や、君を中心にした佐久のたひらが、まざ〳〵目に見えるやうで、私も一種の哀愁に浸つてゐます、秋のことをいふと、またから約束のうそつきになるかも知れませんが、とにかく參りたいと思つてゐます、それまでに、こちらにやつて來ませんか、いま忙しいのですか、ひまでしたら一寸でもやつていらつしやい、神經衰弱なんかこの海の風を吸へばすぐ

直ります、禁酒は心細いが、少し位ゐはいゝでせう、海からあがりたての魚をさいて久しぶりで一杯やりませう、東京から五時間(船賃は競爭のため十九錢)で來られます、船がいやなら汽車でも來られます、若し來られるやうならくはしく知らせます、いらつしやい、「創造」へ送りませう、「椎の木」はあとになさい、あまりいゝ雜誌でもなささうです、病人も私も、まだ普通の元氣にはかへりません、けれど、とにかく昨今私は多少とも幸福だと思ひます、いろ〳〵の意味で、

この半島はすつかり青葉になりました、山吹ももう散つて今のところ何の花もありません、椿のころはそれは〳〵よかつた、麥畑には青い穗がそろつて、晝も夜も蛙の聲ばかりです、海とそらの光はまるで目のあてられぬ時があります、岫を出かねてゐる雲のかたちなど、もう何とも云へぬ哀情をそゝります、あゝ夏、夏、私は夏が初夏が大好きなんです、速く健康が歸つて來ればいゝとそれのみ待たれます、繰返して君の健康をいのります、まつたく眞つぱだかになつたら光り出すやうな身になつて下さい、私もなります、

海はまだ寒いでせうに、もう男女の子供が素裸體で浪の上にとびこんでゐます、じいつと眺めてゐると涙が浸みます、燒けた砂の上にねころんで眼の眩むまで大空を仰いでゐますと、涙が浸みます、

四月十四日　　牧水生

彌次郎兄

君の歌を一二首、「新公論」の五月號へ出しておきました、書物か何か送つてゆくかも知れません、とつておいていゝのです、

雨が上つて、雲光り海光り、靑葉の匂ひ、寧ろ耐へ難し、(封筒裏面に)

五

四月十四日、相模國三浦郡北下浦村、創作社より、信濃國、小河原寛香樣宛(手紙)

酒屋の番頭さん、適材適所の感もあり、おいたはしい氣もします、何しろさうした心になられたことを先づ世間なみにおよろこび申さなくてはならぬ、實際、何だかいゝ氣持で居られるやうな想像だが、さうでもないか知ら、何かひとつの目的を認めてうん〳〵力んでゐることはさうわるい氣持ぢアないと思ふ、

ひとごとぢアない、とにかくしつかり踏張つてほしいものだ、さう見す〳〵振り捨てる金があつたら須く何とか他に方法があるべきだと思ふ、まつたくだよ、ひとごとぢア決してない、そして、今度の君の手紙が何となく今までのと氣分を異にしてゐるところをみると、どうもうまく行けさうに思ふ、是非さうあつてほしいものだ、

海岸の日もまづ無事につゞきます、景色なんて全然無いところだが、それでも海や空や向ふの房州路が晴れたり霞んだりするのをぼんやりして眺めてゐるのはわるい氣持ぢアない、第一訪問者と借金とりの來ないといふ一事だけでも命はのびる筈だ、春はもう夙うにすぎていま靑葉のさかりだ、何ともいへぬ新鮮なはげしい日の光海の光のなかにぼかーんとしてゐることは寧ろ一種の苦痛でもある、

靜かになればなるで、いろんな過去のことなど、自づとまた頭にうかんで來るので、安らかな時とては、やつぱり無いと思ひたまへ、それに、色々のつかれが自然と出て來るものか、何だか昨今半病人の形だ、こちらに來れば少くとも僕だけは無類の頑健を確かに獲得するものと信じてゐたのが可笑しいほどだ、病人もとにかく元氣だ、まだ藥をよすわけに行かず、食事なども別にやつてゐるがひどく衰弱したものだ、何だか可哀さうに思はれてきたよ、

けふ、君の手紙をみて、たいへんに喜んでゐた。獨り大元氣なのは、例のタベチコ大人(註、長男旅人)のみだ、そろ〳〵手がつけられなくなつてきた、僕は一年か二年、こちらにじつとしてゐようかなどと考へてゐる、

君、一度やつて來ないか、君の方からなら八王子、東神奈川、大船で乘換へて横須賀まで來れば、そこから五里（うち三里浦賀までは自動車がある）しかない、君は海は先づ珍しい方だらう、それに君などてんで見たこともない種々雜多な小魚が前の海から上る、酒も東京と同じだ、一緒に三崎港にでもあそびに行きたいものだ、若し來て呉れたらそれこそ二人はどれだけよろこぶか知れない、百姓家を二間かりてゐるのだが、割にひろいから寐起に不自由はさせぬ、東京でよりかよつぽどゆつくりとあそべると思ふ、

飲むのと食ふのとより外、（まだ讀書もようしない）仕事も樂しみもないだらう、だからそれにはずゐぶん努力するよ、さかなだけは君を驚かすと思ふ、もつとも沖がしけたときたら東京よりもひどい、何ひとつ食ふものがなくなるのだからネ、魚かひ酒かひ豆腐かひ酢かひ、味噌かひ、みんな乃公御自身出馬の圖だが、なか〳〵珍だよ、

まだ誰も來ない、先日越前君が一晩泊りでやつてきたきりだ、

すきをこさへて、三四日がけで是非やつて來たまい、金も往復賃だけで、他にいらないよ、東京よりかよつぽど安全だ、細君もその位ゐの日數なら手離すだらう、

六月ころに來い、とのこと、ありがたい、いつもから約束ばかりだから何ともよう返事しないが、そのころになつたら少しは人間らしい元氣も出るだらうし、動き出したくもなると思ふ、行くことに思ひ定めておく、その歸りに高鹽君を訪ねたいものだ、（「椎の木」といふのを送つてみる、僕の關係してるといふのは名だけ）

誌友會當時は、思へばゆめだネ、さうかねえ君の方の人々もみなしよげてるのかネ、東京の人たちもさん〳〵らしいよ、ちの君小川君などは惚れたはれたで一時氣ちがひのやうだつたし、（見てゐるのがいやだつた）さんらん君は職業離れで苦しむし、第一

僕はあんな風だつたし、考へ出してもいやだ、あきらの岡山行はどんなわけだネ、異樣に聞えたよ、樣子を知つてるなら知らしてくれたまへ、

〇〇君は細君が來てから、朝夕一二度も來てゐた僕のうちにすら三四ケ月に二三度來たか來ぬかだつた、他の友だちもみな怖れをなして自づと足を遠くしたやうだつた、以ていかに膠着力獰猛であつたか察したまへ、まだ持續してるかも知れぬ、（もつとも細君がまた君の方へ行くやうにも云つてゐた）

僕は、とにかくいま幸福なのだらうと思ふ、これから初めから立て直して第一歩から踏み出さうと思つてゐる、斯う思ふだけでも、珍らしいことゝよろこんでくれたまへ、いろ〳〵考へ出せば哀愁漫々だ、くどく云はぬことにする、

僕はいま漢詩を讀んでゐる、淺酌低唱の、かろいい氣持だ、

登　高

風急天高猿嘯哀
渚清沙白鳥飛廻
無邊落木蕭々下
不盡長江袞々來
萬里悲秋常作客
百年多病獨登臺
艱難苦恨繁霜鬢
潦倒新停濁酒杯。

曾山送別

凄々遊子苦飄蓬
明月清樽秖暫同
南望千山如黛色
愁君客路在其中

などを先刻から讀んでゐた、松原の砂の中にねこんでこれらのものを低く唱つてゐると何かしら涙がうかぶことがある、

突然だが、君は章魚を好むか、さうしてそれは君の

地方ではやゝ珍しきものに屬するか、若しさうなら一疋買つて送らう、大きいのはとれぬが、味は近海第一ださうだ、

いまはシコ（鰯に似て小き奴）の漁期で、他のものは何もとれぬ、河豚はとれるが、これを食ふ勇氣は少くとも今の君にはあるまい、

まだ逢はないが、細君に、こんな男がゐるといふことを寐物語にでも紹介しておいてくれたまへ、

病人氏は、まだ手紙がかけないさうだ、たゞよろしく〳〵云つてくれとのこと、

とにかく、どうにかしてひよつくら思ひ立つてやつて來給い、しきりに逢ひたくなつた、

中村君からも折々手紙が來たけれど、このごろ斷えてゐる、逢つて、飲みたいものだ、

いま、毎晩やるくせがついたが、三合やるとぐでんのづだ、なさけない話さネ、徹宵痛飲つてやつをやつてみたくてたまらない、今夜君と逢つた氣でおきまりに二合ほども附加の議を細君に提出せむとぞ思ふ、

四月十四日　　牧　水

素山老兄

これで紙がなくなりにけり

雨が上つて、青葉の匂ひが身ぢかにする、沖も凪いでると見え小波の聲もせぬ、何だかいやに淋しい、（封筒裏面に）

六

五月二十七日、相模國三浦郡北下浦村創作社より、廣島縣、渡邊麻吉樣宛（手紙）

いつぞや別府からお手紙をいたゞき、それ以來心にかゝつてゐたおたよりをけふ漸く認めます、

雜誌がなくなつて以來、近く親しく思ふ人々の消息もわからぬがちでまことにさびしく思ひます、何

となく御病身のやうにも想像されますがさうではありませんか、失禮ですけれど、お歌を見るたびにさういふ氣がしてなりません、朝夕の御消息をくはしく聞かして下さいまし、小生等はいま極めて生氣のないくらしをしてゐます、けれど、それをいまのところ何となく幸福に思つてゐます、

お歌、初めから變つたところのある詠みぶりでしたが、今度のはことに變つてゐるやうです、目の前にあなたの見えるやうなところのあるのはまことになつかしいことですけれど、言葉の調子などに多少無理に、强ひて云つてあるやうなところの見えて來たのを慊ず思ひます、どこまでも自然で、まつ直ぐなものであつてほしいと思ひます、

今度のお作をばわざとどこへも出しませんでした、一般の雜誌に出す歌ではなささうに思はれたからでした、これはわるい意味でさういふのではありません、間違はずに下さい、

斯ういふ場合にほんとに氣もちのいゝ雜誌がひとつほしいと思ひます、勿論私のいま關係してゐるのにろくなものはありませんし、この七月から創作のあとのつもりで太田水穗さんがまた雜誌を出すさうですがこれとても思ふやうにはゆきますまい、親しい間の人たちだけ三十人ばかりを限つて極く〳〵小さなものをこしらへようかなどとも思つてゐます、五六十部きり刷らないで非賣品にしたいと思ひます、あなたは賛成しませんか、

お宅は海岸ですか山ですか、近くにおとりの寫眞があつたら一枚送つて下さいませんか、

けふは風がひどくて、海は浪だらけになつてうなつてゐます、

五月二十七日　　若山牧水

渡邊麻吉樣

この風のいたくし吹けばふしぶしのゆるみ痛みて沖あをく曇る（封筒裏面に）

七

五月二十八日、相州三浦郡北下浦村より、東京

府、和田直衛樣宛（手紙）

和田君、また久しく逢はないでゐる氣がしますネ、健在でそして大に元氣ですか、さうあつてほしいと祈られます、

とにかく用事から先に書きますがネ、君のいま出てゐる學校は代用でですか、正教員としてですか、實はこの村にいまいゝ口があいたから若し代用だつたらすぐこちらに移つて來てはどうか、月給は二十一圓、一度來た以上決して他へ動かすやうなことはさせぬから、と例の藤里から昨日わざ〳〵言つて來てくれたのです、（二十一圓はそちらの二十五六圓以上に當るでせう）

いづれとも君のお考へですが、御返事お待ち申します、そちらがあまりわるくないやうだつたら動かずにゐる方がいゝでせうが、少しでもいやなところがあつたらやつて來ては如何です、あとでまたまご〳〵するやうなことでもあつては難澁でせう、右の藤里の言葉は、確かに信用していゝと思ひます、然し、そのため、氣の毒がることはありません、自由に君の心次第にきめて下さい、そして、急いで返事を聞して下さい、

先日の君の歌稿をば「創造」にはやりませんでした、博文館の西村君に送つときました、文章か太陽かに賴む旨を附記しておきましたが、それにしても六月號のにはもう遲れてゐました、

加藤君にはとう〳〵よう送りませんでした、これから（今日でも）歌を送つて見ませう、

大禮の歌はとても出來さうにありませんネ、今日明日でせう、或は御親切を無にすることになるかもわかりません、

×

ほんとにどうしておゐでです、平安ですか、不安ですか、それとも大に活氣に滿ちてゐますか、何だか妙に氣にかゝります、つまり身に引きくらべる（甚だ失禮ながら）わけなんでせうネ、私は相變らずぼんやりしやげてゐます、仕事もせず、おちつきもせず、いら〳〵して自ら求めて苦しんでゐる形です、越前君は大分景氣がよささうですネ、先日も御嶽に

登つたやうです、行つて大に飲んでおやりなさい、太田さんが七月から雜誌を出すさうです、何とか言つて行きましたか（いまその用ででせう、信州の小諸に行つて大會を開いてるらしい）うまく行けばいいがと案ぜられます、「椎の木」はもう早や枯れたさうです、

和田君、私はいまこんなことを考へてゐる、ひとつお互ひに手紙のやりとりに代へるやうな、つまりいつぞやの回覽雜誌の印刷したやうなものを出してはどうかと、でないとあまりに淋しいではありませんか、菊版の十六頁位ゐのもので、百部位ゐ刷つて全員を三十人位ゐに限つて、非賣品にしたら、一人二三十錢の會費で出來るかと思はれるのです、通信と研究とを主にしたもので、發表も出來るだけしませうが、これは寧ろ他の雜誌を利用した方がいゝかとも考へられます、賛成しませんか、とにかく印刷のことを松井白花君に訊いてやるつもりです、そして同君の意氣込みひとつでは同君に雜務一切を見て貰はう（編輯だけこちらで）かとも思つてゐます、高鹽君、菊池君、加藤君等さへ、次第に遠々しくなつてゆくやうで寂寞に耐へません、

×

海岸に次第に夏がふけてゆきます、私のゐる家から表の往來（それをこえて海）に出るまで一丁がほど麥畑の中に細い砂の路がついてゐるのです、そこを毎夕德利さげて通ふのですが、それが今日はもう刈り始めました、じいつと見つめてゐて何とも言へぬさびしさを感じました、

二日續けば尙ほよし、日がへりでもいゝから一度やつて來ませんか、私も來月の五日、例の秀英舍から訴へられて裁判所に出ねばなりません、そのときお目にかゝれたらかゝりたいと思つてゐます、

二十八日あさ　　牧　水

和田兄

細君によろしく、體の工合は平安にや、

八

六月六日、板橋より、東京府、和田山蘭樣宛
（手紙）

柘榴の花の眞赤な、いかにも夏木立らしいうるほひと暗さとの漂つてゐる前栽が、先づ門口を入ると我等の前に表れました、源一郎さんは此處々々、此處で飲まうと云ひました、

オヤ〳〵、まだ大體の所と時とをいふ必要があつたのです、中仙道の古驛、ソレ例の板橋、時は六月六日午前八時、まア何といふ空の蒼さ深さでせう、でも下階（シタ）ではちよつと變（ヘン）だつたものですから、とにかく二階にあがりました、そして、障子をあけました、

どうでせう、古畫に見る龍のやうな幹の柿の老木、それには白い花が重いほど咲いてゐるのです、思はず三人はをどり上つて、ステキ〳〵と叫びました、そして、座敷に坐るのをよして、冷い〳〵、金屬性のやうに古くなつてゐる緣がはにべたりと坐りました、

白い〳〵、光るやうな鳥がしきりに空をよぎります、白鷺です、雲が遠い地平線に夏のたましひを宿して渦をまいてゐます、

さかなは柳川、古い家だけに酒は本ものです、

ね――、和田さん、ほんとに私たちはいまどうしたらこのこぼれるやうな泣きたいやうな心持をあなたに通ずることができるでせう、

酒、々、々、もう全くこの外はありません、そして、今日はどうぞ思ふ存分私を泣かして下さい、もう〳〵、たまらない、涙が涙が零れます、正三郎さんの酒を飲まないといふことすら、泣きたい心をそゝります、

山老机下　　牧老

（翠村、あづまとのよせ書）

九

八月三日、信州北佐久郡春日村湯澤、十二館より、東京、和田山蘭樣宛（手紙）

和田君、お手紙ありがたう、今日もそれを取出してみんなして讀んだのでした、御元氣何よりです、僕

はまだ赤ちやんのお祝をも云はなかつたと思ふ、遲れ走せながら茲に申しあげます、そして大に丈夫ですか、親爺のあととりになれさうですか、蛇は寸にして人を飲む、赤ちやん既に一斗位ゐはやれさうですか、

東京に出たとき、大に足下を驚かさむと企てたのだけれど、まご〳〵すると旅が流れさうになつたので、うらみを飲んで失禮してしまひました、歸りみちには必ずお目にかゝります、都合によると高鹽君とも東京で落合ふやうになるかも知れませんよ、さうしたら三人一緒に下浦に出かけませう、

高鹽君とは大に語り大に飲みました、そして、いつも足下のお噂が出ました、別れるときが、ホンにいやでした、だからまた逢はうといふわけなんです、君からも出懸ることをすゝめてやつて下さい、

山の溫泉、やはり惡くはありません、歌も七八十出來ました、百五十になつたら下山するつもりです、何しろ涼しい、この汗かきさんが終日片肌だつてようぬぎませんからネ、窓の下に溪が流れてゐます、顏を洗ふにはだしで入つて、顏を洗ひ終へないうちに足の痛みに耐へかねてとび出します、嘘ではない、そんなに冷いのです、山など散歩して來て一本それに冷します、それをキウーツとやります、強ち惡くありません、

けれど、淋しい、ホントに淋しい、泣きたくなる時がある、昨日など、ハラ〳〵と通り雨はするし、ゐても立つてもゐられませんでした、折よくそこに重田君が土地の敎員さんたちを三四人連れてやつて來てくれて、全く甦りました、早速やり始めて夕方から例により夜半まで、それこそどんちやんてれつくをやりました、今朝少々頭上らず、（先生たちも一緒に昨夜ねてしまつたのでした、そして今朝歸りました）度々湯に入つても尙ほよろしからず、重田君と今一人（この君は臺灣の小學校に出てゐる人）と三人して、これからまたゆつくりやり直さうといふ次第なのです、いま鯉の鹽燒が出來て來ます、さうしたら手紙をやめます、

淺間山に切りに雲が上りつゝあります、いまに晴れ

るのでせう、何といふ靜かな溪の聲でせう、やつぱり足下を思ひ出します、例の濡手拭を肩にまいて大アグラをかいた樣が拜みたい、但し、此處で例の角力をやられてはたいへんです、何しろ、二階の下が溪なんですからネ、

君を、戰鬪力のない君を威嚇するのはもう止しませう、今度逢つた時が氣にかゝりますから、

三人して、アサクサ十二階、下でハイカラがチヨイト〳〵をけいこし、やゝ體をなして來ました、それにより僅かにわが山蘭老を偲んでゐるところです、

「潮音」のを讀んでくれましたか、

八月三日午前十時　　牧　水

アト一週間もしたら歸ります、

（重田彌次郎よりの數行あり）

雲ます〳〵光りわが身ます〳〵光る、たゞ溪の音一すぢに流るゝのみ、

晝の酒の味は靜にあり、山青く水寒し、豈んぞ酒のうまからざらんや、改めて玆に山蘭を威嚇す、牧　水

一〇

八月三日、北佐久郡春日村湯澤、十二館より、東筑摩、小河原寛香樣宛（手紙）

「長くゐるやうならば出かけてもよし」

一語千金、直ぐやつて來ないか、とにかく君の來るまで待つてゐるが、一日も早きを尊まうではないか、

田中驛で汽車を降り、望月町を經て春日の湯に來れば、ホンの一汗なり、重田君と打合する必要もある故、至急返事たのむ、（實は今日も重田君と飲んでゐる所へお葉書到着）

實は、お訪ねしたかりしも、さうすればいろ〳〵悲哀なり、此處で君に逢ひ、そのまゝまた碓氷を越えむとぞ思ふ、暑くともやつて來てくれ、しきりに待つ、

中村君はどうしてゐるだらう、便り無しか。早く直ぐ、來たまへ、待つてゐる、

八月三日　　牧　水

小河原素山樣

（重田彌次郎とのよせ書）

一一

十月三日、相模三浦郡北下浦村より、下野國、高鹽背山樣宛（手紙）

高鹽君

御無沙汰してゐます、兄のことを思ひ出すごとにその人のみならず今はその人の住む土地のさまゝですぐ浮び出て來ますので、一層おなつかしく思ひ込まれます、そして、何彼につけて始終思ひ浮べてゐるのです、お變りありませんか、

お病いのは妹さんの方ですか、いつぞやお便りを頂いた時、そのことをきゝましたけれど、もう程なくおよろしいことゝ思つてゐましたに、先刻着いた潮音をみましたらあれらのお歌がありましたので、まだお病いのかと二人して驚きました、どうおありなのです、

どうもアノお妹さんのやうな氣がしますが、しきりにいまその面影が心に浮びます、ほんとにお可哀さうに思ひます、兄もでせうが阿母さんは一層お悲りのこと御心配のことゝ思ひます、どうか兄等のお心づくしですぐにも御全快のやうに禱ります、

夏にお弱い人ではありませんか、さうしたらもうおよろしいでせう、

その他のかたはお達者ですか、

例により網うちが盛んのやうですネ、いろいろ思ひ出されてほゝゑまれます、遲く歸つて一杯やりましたつけネー、胸の底がうづきます、

そして、みんなあの時の人たちも元氣ですか、よろしくおつしやつて下さい、ツイ御無沙汰します、ことに齋藤大村君たちからの山よりのおたよりにはいつも〳〵何か御返事したいと思つてゐて、やつぱり默つてゐました、

秋になりましたネー、アノ、峠を越えて白い川から喜連川町を見渡したところ、それから喜連川町の裏の小山など、いまさぞかし秋ふかく見えてるでせう

ネ、

海岸は秋はそれほどでありません、何だか土地（トコロ）と季節としつくりそぐはないやうで心に乾きをおぼえます、ゴザでも被つててく〳〵と大山詣りにでも出かけようかと思つてゐますけれど、こちらもやはり病人に子供で、安心しては手を離されません、（これも別段にわるいといふのではありません、それに旅人のあとが近く生れさうです、時も時、苦笑されます）、

（やはり私の心はおちついてゐません、これではならぬと幾度思ひ直してみてもやつぱり心の底はあらぬ方をば見詰めてゐます、ぶら〳〵と歩いてゞもゐるときなど、僅かにじいつとしてゐるやうです、）大山といふのは當國一の高山で、富士の近く箱根の近くにあります、頂上にお社があつて、おこもりが出來るといひますから一人で一週間もそこにこもつてゐたらばと思ふのです、然し、これもさう思ふだけかも知れません、

先日はあゝいつて、お歌を送つて頂きましたけれど、兄の外には和田君のが間に合つたきり、あとの人のはうんと遲れて來たのです、で、來號まで待つことにしました、さう思つて下さい、

潮音のお歌、いつも〳〵感じ深く讀んでゐます、今日のなどにもひり〳〵身にこたへるのがあります、一應目を通したところでは兄のが一番いゝと思ひました、他のもとり〴〵とは云ひながらみんな何だか輕つぼくていやです、加藤君のもだん〳〵さうなつてゆくやうに思ひませんか、輕く淡くなつてゆくやうで氣になります、（兄は平賀君のをどう思ひます、一寸兄のに似てはゐませんか）、私には旅以來作がありません、出來やうとしてはまた空しく乾（カワ）びます、淺間しいことゝ悲觀してゐます、これも心のまとまらぬおちつかぬせゐです、

「砂丘」が二三日うちに出來る筈です、極くくだらなく思つてゐましたが、校正のころから、またさうでもないやうに思はれだしました、出ましたら御意見

お聞かせ下さいまし、

（今度の潮音のは先號に出べき筈だつたのを、太田さんが殘したのでした、それで、兄に寄すろ歌など、ちょつと間がぬけてゐます、「死ぬごとく……」の一首、あれが一ばん好きだつたのです）、

いつか一度私共のこちらにゐるうちにやつて來ませんか、まだ來年の春ころまでは、ゐることになりませう、二人してぼんやり砂の中にねころんでゐたいと切りに思ひます、

御兩親樣とも、御變りございませんか、また近くお訪ねしてお目にかゝりたく思はれてなりません、阿父樣のお目はもうすつかりよくおなりですか、奥さんもお變りありませんか、御看病でたいへんでせう、

みなさん、みなよそならぬ方たちのやうにのみ思はれて、始終お噂してゐます、失禮とおとがめ下さいますな、

別封、折よく鹿兒島の人から贈られました、あなたがたには或はお珍しいかと思ひましたので、お送り申します、鹿兒島の名物で、土地の人は文旦（ボンタン）漬といつてゐますが、朱欒の皮の砂糖漬です、ザボンのことをあちらではボンタンといひます、あまり甘いからお病いかたにはどうかと思ひますが、それでもお見舞のつもりでお送りします、御笑納下さいまし、

今日は雨が細かに降つてゐます、そして暗い、緣側に机を持ち出し、筆をおいてお歌を讀んでゐますと、自然と涙をおぼえます、

では、これで失禮します、

十月二日午後四時　　牧水生

あとをきらずにおいてくれ、自分も少し書きたいからと喜志がいふものですからさうしておきましたら、今日はまた氣分がわるいとかいつてねこんでゐます、それはまたとしてとにかくこれだけにしておきます、

尙ほ、小包は今日浦賀まで行かねばならぬのです

が、今日は雨が強いため、一日延し明日出て郵便局に托します、ですからこの手紙より少しおくれます、局まで二里近くありますのが何より不便です、

何といふ味氣ないさびしい日でせう、

十月三日午前十時　　牧　水

高鹽背山様

大正五年

一

一月十一日。相模三浦郡北下浦村より、新潟市、平賀財藏樣宛（葉書）

若しかすると、ひよつくりやつて來るやうなことになりはせぬかと、正月のころ、待たれてならなかつた、東京まで來てゐたのなら。もう一足なのに、勇氣を出してくればよかつた、この前、偶然出會つた時、僕はへと〳〵に疲れてゐるし、君もおちつかなかつたし、あんなで別れたのが實につらかつた、例の約束だからあてにはならぬが、この二月のうちに青森まで行つて來うかといま思ひ立つてゐる、そしてその歸りを君の方へ廻りたいと空想してゐるのだ、出來るなら羽後の酒田から汽船で新潟へと思つてゐるのだが、その間に航路があるだらうか、君の方で調べてくれたまへ、無かつたら郡山から汽車で行く、とにかく行くつもりでゐる、そのころ、君は忙しくはないだらうか、雪が見たいのだ、君の方からは信濃の南部を經て歸る、「無花果」のこと、ありがたう、當人、あの言葉を見て感謝してゐた、あゝ、逢ふと思ふと一日も速いがいゝやうにあせられてならない、夫人によろしく、

一月十一日　　若山牧水

二

一月十一日、相模北下浦より、下野國、高鹽背山樣宛（葉書）

不思議だ〳〵と云ひ暮してゐた位ゐ久しくとれなかつた鰹が、二三日前、初めて濱にあがりました、隣の漁家でそれの煮干をこしらへてゐるのを見て、高鹽さんにさしあげようと細君が云ひ出し、くだらぬものをよせと云つても承知せず、今朝ほど人に賴んで郵便局にやつた樣でした、信州生れの彼女は同じ山の國のあなたゝちには屹度このきたない贈物でもよろこばれるものと思つたのでせう、味噌汁のだしにでもするほか、あまく煮つけてたべる位ゐが能で、正直くだらぬものですが、とにかく御笑納を願ひます、急に寒くて氣色がわるくなつたといつてい

ま寢てゐますので、一寸小生代筆のかたちです。奥さんにもよろしくおつしやつて下さい。「文章」の歌、難有う、四五人分一緒にして出しておきます。

また、改めて書きませう、

一月十一日夕方　　若山生

三

一月十七日、相模三浦郡北下浦村長澤より、東京、和田直衞樣宛（手紙）

和田君、御無沙汰、失禮。

夫人の病いといふことをば君からも越前君からも聞いてゐたのであつたが、昨日あたり床上げときいて、ほんとうにびつくりした。そんなにわるかつたのか。當人も、君も、赤ちやんたちも、どんなにか弱つたらう。なま〳〵しい經驗に見て、心から同情する。他に友人としても居なかつたらうし、心細くもあつたらうと思ふ。近い所に居たいものと、こんな時しみ〴〵思ふ。それにしても、とにかく過去の追憶談になり得たことをば欣ばずにゐられない。床上げの朝、初めて一杯を傾けたといふ可憐なる夫君を思ふて、一種のうれし暗涙に咽んだ。遲ればせながら夫人によろして傳へてくれたまへ、考へればずゐぶん暫く逢はないものだ。

戸崎町寄せがきには度膽を奪はれた。獰猛なる、緊張し盡せる四個の巨顔（まつたくそんな氣がする）がいきなりこの眼前に湧出せるを感じた。何しろ愉快であつたらう、美しい限りだ。それから如何したネ、行つたの、三軒町に。月末には是非上京する。その時こそ、是非ゆつくり逢ひたい、話の盡きる時に初めて盃を持出す狀態に於てゆつくり話したいものと思ふ。下浦移住以來、僕はめつきり酒が弱くなつた。お正月の二日の夜、折から豪雨、五六尺增水してゐる溪の中にどんぶりこと逆轉して、かなりの間ぶか〳〵と押し流されたなどは全くのつらよごしである。昨日、例の藤里の新築祝ひによばれて出て行つた所、（少し遲れて）座には土地の上流株三四十人が揃つてゐて、僕を見るなり、ヤンヤ〳〵の喝采

さ。赤面したネ。ソシテ、つまりその時の追悼だといふのでいきなり三つ重ねの一番大きな、三合は確實に入る奴になみ〳〵とさしつけられた。少しはがうはらにもなつてゐたし、難有しとばかりそいつを二つぐうつと重ねた（三つ目には下に置いたよ）末、あとは浦賀での酒豪だとかいふ、また素的に氣持のいゝ老醫者さんと膝組みにさせられて、ツイわれ知らず飲んだ〳〵。そして歸りにはわざ〳〵雇男二人に守られて歸つて來た騒ぎ。今日はかたの如くふつかよひ、水を飲んだり、橙子を嚙つたり、うす青くなつてふら〳〵サ、イヤハヤ、

別封、「大阪朝日」を送る、これには加藤東籬君の歌が出てゐる、昨日のには高鹽君のが出てゐた、以後、斯うして同人のを少しづゝ出して行く事にする、加藤君に云つてやつたけれどうんともすんとも云つて來ず、止むなく「創作」の古いのから拾ひ出しておいた。「大阪朝日」は御存じでもあらうが三四十萬の部數を出してゐる、（東京では曾て萬朝報知が十四五萬を出して驚嘆されたものだ）、押しも押されもせぬ日本一の大新聞である。それを我等の手に持つて置くといふことは、いろ〳〵の意味に於て實に好都合ではないか。君もふんぱつして作つて、送つてくれたまへ。舊作を出してもいゝが、ソラ、大阪はいま〇〇社のナマ連中が巢をくつてゐる、此奴等に嗅ぎ出されて折角の根城を荒らされても困ると思ふので、これからは全部新作を出したいと思ふのだ。すまないが、別封の「朝日」をば君からまた加藤君に、（右の僕の心持をも君から傳へてくれゝば更にいゝ）送つて呉れないか。忘れずに。文章世界にも先日中村高鹽津田の三君と僕のとを出しておいた、多分二月號のに載せてくれると思ふ。いつぞやは君をだましてわるかつた、君以外、誰もよこさないので手のつけやうがなかつたのだ。今度あの時の君のを探したのだが、例のづぼらで何處にかしまひ忘れて見つからなかつた。

當時の創作社同人間の作には、とにかく一味の氣魄が渾然として湧いてゐた。それが次第に亡んでゆ

くことは、君に忍び難い。何か具體的に斯うして（發表するとか何とか）團結しておかないと、みな揃つてヅボラでアキラメのいゝ人たちだから、作ることにも怠り、次第に拙くもならうと云ふものだ。事實は既に表はれてゐる、いま、當時の我等の仲間のテイタラクを注意して見て見たまへ。何といふ見すぼらしさであらう。

第一、君自身から攻擊してかゝらねばならなくなつた。「創作」がなくなつて以來の君の作の狀態を君は如何見てゐます。實際、毎月の「潮音」の頁を繰るのがつらいのだ。

もつとも、いつぞやの君の手紙にもあつた樣に、君の内心におちつきの無いこと、歌といふものに對する感想信念の固定してゐないことなどが自然作歌の熱氣をも下げてゐることゝ、おぼえのあることゝて、すつかり同感してはゐるのです。けれど、とにかく今のまゝでは困ると思ふ。いま萬一このまゝになつてしまふとすれば從來數年間の君の努力も或は空しいものになつてしまはぬとも限らぬ。そんなことのありやうはないが、僅かの間にも休みなく時間はたつて行きつゝあるのだ。

云ひすごしたかも知れないが、多少の同感を持つて呉れられたら僕は非常に難有い。

それから先日から書かうと思つてゐた一事がある。この二月末、津輕に君の父君を訪はうと計畫してゐるのだ。青森に行つて、五所川原に出て、君の父君及び東籬君を訪ねるつもりでゐる、數日前、君の令弟にはこの事を通じておいた。外れがちの僕の計畫も、これは實行されると信じてゐる。どうしたものか、久しい以前から北の方のことを思ふと、僕には君の父君のことが聯想された。謂はゞ、永年の夢想が漸く具體化されることゝなつたのだ。

いづれ此事は、行く前に君に逢つてくはしく話す、金が出來れば來月初めにも出かけてゆく。

歌、といふものに對する僕の考へが、此頃漸く形を成して來た思ひがする、以前は、時々に表れた斷

片的のものに過ぎなかつた、が、今度のこそは初めて首尾一貫したものであるらしい、いづれ、これも逢つて君にもきいて見たい。自然これからの僕の歌風もきまつて行くであらうと思ふ。以前も無論無意識の間にこの考へは僕にあつたに相違ないが、今度はそれが表面に出て來たのだ。

夫人の健康を祈つて筆をおく。僕の方もいまは丈夫になつた。先日四五町さきの蜜柑山に登つて海見と梅見とをやつた。

一月十七日午後四時　　牧水生

和田兄

細君から、くれ〴〵よろしくとのことだ、何故和田さんは見えないのだらうとをり〳〵つぶやいてゐる。（はじめに）

君のすきなナイルス君のこともあるから一先づ君に送ることにした、（飛外、大阪朝日のことのあたりに）

四

一月二十日、相模北下浦より、新潟市、平賀財藏樣宛（葉書）

「裏二階に一人で……」つて、家族をどうしたの？歸した？

何だか、さうした境地の君をあり〳〵と目の前に見る樣な氣がした。旅行、あてにはならないが、とにかく無理でも出かけるつもりでゐる。では行きに海岸線で青森へ行き、歸りに秋田山形を廻つて、郡山から君の方へ出ることにする。海を通る、といふことゝ、酒田といふ港に寄ることゝを例により空想してゐたのだつたが、そんなでは駄目だ、あきらめた。僕だつて、いま、あまり飲まん。弱くなつてる。でも君と逢つたら、土曜日でゞもあつたら、何年ぶりかで、ハメを外さうか。速く行き度い。住といふ人は君の方へ行つたのか。

序文、今度こそ實行しよう。いつころまでだネ。

近頃また氣を腐らせ始めて、弱つてゐる。旅行々々。

一月二十日　　牧水

五

二月四日、相模三浦郡北下浦村より、下野國、高鹽正庸樣宛（手紙）

高鹽兄、また、御無沙汰になりました、お變りもありませんか、今年は全國とも暖かのやうにきゝますからあなたの方もさうでせう、こちらはいま梅のさかりです、少し盛りをすぎました、梅がまた非常に多く、砂山のそこ此處に白茶けて咲いてゐるのを見ると却つてさびしい思ひがします、家中みな健康です、でも私だけ何だか元氣がありません、この季節にはよくあることなのです、

御歌をお集めになるとのこと、非常にいゝことです、私からお勸めしようかとも思つてゐたことでした、特色のあるあなたの歌がさうすれば一層鮮かになるわけです、一つ苦言を呈したいのは、あなたのは一汎に平淡な裡に深いちからのあるのが多いのだが、多くある中にはそれがまゝ平淡にすぎて中にあるそのちからのある部類までも駄目にする恐れがありはしませんか、今まで月々の御詠草を見て、よくさう思つたことでした、ですから選をば寧ろ嚴しくなさる方がいゝかと思はれます、一册の中の數のさほどに多いことは誇りではないと思ひます、とにかく御參考にまで右申しあげました、

文章世界には出てゐない樣ですネ、出てゐればもう送つて來るわけなんですが、來ないところを見れば出なかつたのでせう、編輯者の都合でせうが、とにかく今一度問合せてみます、「大阪朝日」には續けて連中のを出してゐます、何しろ日本一の大新聞ですから反響は多いと思つてゐます、お出來になつたらばをり〳〵よこして下さい、

作歌の上に漸く一の信念は出來ましたが、なかなかそれが作の上に表れず、苦んでゐます、生活と作歌、さうした間の關係も漸く解つて來たやうです、今少し作つてみました上、御意見をも伺ひたいと思つてゐます、潮音、詩歌、アララギと昨日あたりから見てゐますが、どうもこれはと思ふのには出會ひ

ません、自分でもつと力を出して作るより外ありません、歌はいま漸く一種の廻轉期に入つてゐるやうです、

二月の中ころ、東北へ行きます、海岸線を通りたいとも思ひます故、お寄りせずに行くことになります、三月の末、お迎へすることが出來れば、こちらでお目にかゝる方がよいと思ひます、海をゆつくり見て行つて下さい、青森から新潟に廻り信州を經て三月の初めにはかへります、歌をうんと作りたい氣持から出て行くのです、悲しいことに今年はどこにも雪がないさうです、でも、少しはありませう、

海が、安房の山が、毎日霞んで息苦しい氣持です、昨日など、何處の山が燒くるのですか、空に煙が流れて、泣きたいやうでした、今日もさうです、机においた沈丁花が妙に心を刺します、山の方はいま如何です、流石に寒いでせうね、

御家族、みなさん御元氣ですか、考へ出すと、お目にかゝりたくなります、あの時、あんなに飲んでばかりゐずと、もつとお話でもすればよかつたと後悔をまた新たにしてゐます、齋藤君と、その兄さんは？森田君は？

何だか、じつとしてゐられなくなりました、濱の方でも散歩して來ませう、波までが妙にこの頃は心をそゝります、

御健康御元氣を祈ります、左様なら、

二月四日午後三時　　牧　水　生

高　鹽　兄

喜志よりよろしくと申し出ました、

六

二月二十四日、相模三浦郡北下浦村より、京都市、雨森長三郎樣宛（手紙）

雨森兄

私こそ御無沙汰してゐます、そして、いつも銀磬ありがたうございます、よくあゝ綺麗にして續けておいでること、驚嘆してゐます、でも今ではもう立派な地位が出來ましたから此上ともの御奮勵を希望します

短歌號の歌、同封お送りします、一度他のものへ出たものですが、ちやうど八首揃つてゐますので、これをさしあげます、海岸に來て丁度一年になりました、ひまなくせに何もようしないで面目ありません、坂部君はいまどうしてゐます、西内君は？　みなによろしくお傳へ下さい、元氣はないが身體は達者になりました、

二月二十四日　　若山牧水

喜志よりよろしく申しました、雜誌は兩人に一冊でようございます、

七

三月十三日、小石川潮音社より、下野國、高鹽正庸樣宛（葉書）

前略、すつかりゆきちがひ！小生、滯京約二週日、漸く機を得て明日出立、盛岡に向ひます、君と全く行違ひになります、私は、あまりあちらをだましてあるので、とにかく、明日、立ちます、すみませんが、留守でもあちらで待つてませうから、たゞ海を見に行つてやつて下さい、その代り都合では私は歸りに喜連川に參ります、こちらの樣子は太田さんによくきいて下さいまし、太田さんも待つてゐます、十五日、その夜、御一訪下さるまじくや、越前君は小石川區戸崎町二、新村方です、

（こちらではすつかりぐら〳〵とぐらついてゐました、お葉書をも只今拜見）

十三日夕方　　牧　水

八

四月十六日、陸奥南津輕郡板留溫泉より、東京市、百溪祿郎太樣宛（葉書）

百溪君、まだこんなところをうろ〳〵してゐる、四五日前から降るのはやんだが、手近の山から山、みなまだ眞白だ、でも、夜になると今でもばら〳〵降つてる樣子だ、今が四月だとはどうしても思はれん、櫻が咲いてる、四月の中旬だなどゝ考へねばな

らぬことは、馴れぬ身にとつて實にへんな氣持だ、こゝは岩木川のずつと上流、十和田湖に五里離れてゐる山奥、溪に臨んだ寂しい溫泉場、十和田に越さうと思つて待つてゐるのだが、どうしてもその程度に雪が消えぬ、あきらめて明日あたりまた青森か弘前へ出ます、

阿部君が上京したとかきいた、よろしく。

四月十六日　若山牧水

九

六月十二日、相模三浦郡北下浦村より、下野國、高鹽背山樣宛（葉書）

御無沙汰、御めん下さい、漸くこの二三日、人心地がついて來ました、暑いながらに、からりと晴れた夏の空は矢張り私にはありがたうございます、短册のお禮もまだよう云ひませんでした、すぐ部屋の柱にかけて朝夕それに親しんでゐながら一寸の筆がとれませんでした、こちらからも近々お送り致します、二三日前宿を引越しました。蜜柑畑の中の物置の二階（天井か）に私だけ籠つて、家族はその本宅の座敷に居るといつた風の所です、久しく歌を作りませんので、少々勝手を忘れた形です、ぼつ〳〵作り出さうと思つてゐます、

お宅の方、皆樣お變りありませんか、そろ〳〵お訪ねした時季に近づきますので、何となく思ひ出されてなりません、齋藤君の歌が見えませんが、どうしてゐます、さとの方へ行つてゐた妻も二三日前歸つて來ました、晴れた空、黑い海を眺めて何となしの心細さを毎日覺えてゐます、

六月十二日　牧水

一〇

八月五日、本郷天神町一ノ廿九ふじやより、京橋區、小川水明樣宛（葉書）

お葉書只今拜見、なぜそんなに元氣がないのでせう、何だか、こつちまで引き込まれさうだ、ナマダ〳〵、

明後日午後五六時、待つてます、いらつしやい、出

來るなら二人きりの方がいゝから、池の端でも散歩しませう、

歌、出來さうで一向出來ず、と云つて作らねばならぬわけもあり、イヤーな氣がしてゐます、

太田さんは今朝立ちました、五時半だといふから停車場へ出てゐたら七時幾分とかで立つたさうです、

五日夕方　牧水

一一

九月二十四日、本郷區天神町一ノ廿九、富士屋方より、日本橋區、西村陽吉樣宛（手紙）

西村君、御無沙汰、先日「雜音の中」ありがたう、御相談したいことがあるのです、出版物のことだが、「わが愛誦歌」とでもして、日本書紀、古事記、萬葉集、古今集、千載集、新古今集、（西行の「山家集」實朝の「金槐集」を主として）新葉集、德川期のもの（香川景樹の「桂園一枝」橘曙覽、小澤芦庵、太田垣蓮月など）の中から自分の好きな、重だつた人と歌とを拔萃して一册にしたいと思ふのです、引き受けてくれませんか、附帶要件は、一册二百五十頁位（土岐君の萬葉集の型がよくはないか知ら）、として、稿料六十圓、約束の時に半金だけ貰ひ、あと原稿渡しずみの時に半金貰ふ、原稿完成は今より一ケ月、（印税（一割）にして貰へれば尙ほいゝ）といふやうなことです、御考への上、すみませんが御都合折返し御聞かせ下さいませんか、實は非常に急いでゐるのです、待つてゐます、

九月二十四日あさ　牧水生

西村兄

一二

九月廿四日、本郷區天神町一丁目廿九、富士屋旅館より、下野國、高鹽背山樣宛（葉書）

久々にておたよりありがたうございました、おめでたがありました御樣子をば「潮音」で承知してゐましたが、ツイ默つてゐました、アダムですかイヴですか、そして皆樣御元氣ですか、奥さんによろしくおつしやつて下さい、小生あとから〳〵と用事出來、

それになまけてもゐてまだ滯京中です、あと一週間位ゐゐることになりませう、珍しいもの、ありがたうございますが、たび〳〵で恐縮です、「創作」同覽、初號と二號と今日和田君へ送りました、なか〳〵面白い、和田君も痔がなほり、小川・越前、みな元氣です、

齋藤君によろしく、

廿四日　　若山牧水

一三

九月二十六日、本郷區天神町一ノ廿九富士屋より、日本橋區、西村陽吉樣宛（手紙）

御返事早速ありがたうございました、原稿はまだ少しも書いてないのです、でも書き始めれば創作でないのですからわけはありません、紀、記、萬葉から德川期の重な、自分の好きな人の作を適宜に拔萃すればいゝわけなのです、簡單な傳記をつけるとか難解な句に註釋を加へるとかする方がよかつたらば加へます、どういふ風にそれをやるかはまだはつきりきめてゐませんが、これは貴兄の御意見もきいてみる必要があると思ふのです、體裁や何かは、土岐君の萬葉集が最も適當だと思ひます、それから頁數のこともありますが、あんな（萬葉集のやうに）には大きくしないがいゝと思ひます、ポケット用がいゝかと思ふのです、金が欲しいのと、自分の嗜好研究のためと、などから思ひ立つたことなのです、出來たら引受けて下さい、御計畫中云々とはどんなことでせう、僕は大抵ゐますが、御差支へなかつたら明朝なるたけ早く御いで下さいませんか、出來るだけ速いのを望んでゐるのです、天神下（切通坂下）か本郷區役所前で電車を下り、天神の社殿の眞向ふの通り、金（かね）（石のでなく）鳥井から一丁ほどの右側です、待つてゐます、

九月二十六日朝　　牧水

西村兄

一四

九月二十八日、本郷區天神町一ノ廿九、富士屋

より、下野國、高鹽背山樣宛（葉書）

實に珍しき御おくりもの、ありがたう頂載いたしました、丁度お言葉通りの見ごとなのが十入（ハイ）つてゐました、ちやうど一二の友人も來合せてゐましたので、早速手づから料理して杯をあげました、そのお知らせやお禮やらにちと變つた趣向をこらしたのでしたが少し遲れますのでとりあへず（でもなくなつたが）これでお禮申しあげます、太田氏へはこゝより遠方にて運輸思ふに任せず、いづれ今明、御厚意だけを口達するつもりです、

二十八日　　牧水

一五

十月二十三日、本郷區天神町一ノ廿九、ふじやより、市外、杉本寛一樣宛（葉書）

前略、たび〳〵で、實際小生も恐縮に思ひます、小生は大抵朝の八時から夕方の四時若しくは六七時ころまで、小石川區戸崎町二番地新村方（電車、巢鴨白山行の掃除町停留所下車、直ぐ左折してすぐ右側）にて仕事をしてゐます、それもはつきりとは申せませんが、この二三日それでした、明日もさうです、朝七時ころまではこちらです、夜はわかりかねます、お葉書でおいでる時間をお知らせ下されば待つてゐます、先日は結構なものをありがたうございました、實はお名前を忘れてゐましたが、けふのおかきおきで漸く思ひ出しました、隨分暫くでしたねエ、

廿三日夜八時　　若山牧水

一六

十月二十四日、本郷區天神町一ノ廿九、富士屋より、京橋區、小川水明樣宛（葉書）

二度ほど、逢ひそこねましたネ、何だかこのごろ足下がからになく悄氣てるやうなまぼろしを見がちで變な氣がしてゐます、イヤ、ひとのことぢアない、自分自身、虛勢こそ張つて居れ、妙に秋風が身に浸んで、心のおくでべそをかきつゞけてゐます、そのべそものにならないへぼべそなんだから、いよ〳〵心細いわけです、今少し精が強くなくてはいかぬと

思ひます、貴意如何。歌、出來ますか、拜見したいと思ひます、僕一向出來ず、强ひられ〳〵とう〳〵古いのを一頁だけ三軒町へ送つておきました、どうも思ふに歌はたしかに今一歩深入りせねばならなくなつてると思ひますよ、單なる寫生や配合や咏嘆でどうなりませう、もつと人間の機微に觸れてゆく必要があると思ひます、ではどうすればいゝか、それが僕をして去勢に近いしよげやうを與へるのです、翠村は展覽會病にとりつかれ、上つたり下つたり、痴態目もあてられず、

二十四日あさ　　牧　水

一七

十一月十一日、相模三浦郡北下浦村長澤より、廣島縣、渡邊麻吉樣宛（手紙）

一昨々日、四月目に東京から歸つて來て、火鉢の側に坐つてゐますと、目の上の狀さしに思ひもかけぬ貴君の名前の認めてある手紙を見出して、思はず聲をあげました、どうしておゐでるか知らと折々思ひ出してゐたその人からの便りでしたので、ほんとに意外なよろこびを感じました、永い間御病氣だつたさうで、驚きました、そしてお手紙を讀んでゐますうちにもいかにもさうらしい樣子が見えますので、何といふことなく心にかゝりました、御持病とは何ですか、そして、只今でもまだ御わるいのですか、

お歌を拜見しましても、いかにもまだ心のうちのさつぱりしないやうな節があり〳〵と目に見えますが、矢張り御病氣のせゐなのでせうか、それとも何か心を痛めておゐでることでもおありなのですか、それにしてもようおたより下さいました、思はずお目にかゝつたやうな心地がしました、これからは葉書でもいゝから折々おたより下さい、こちらからもさしあげます、それに來年の正月からまた雜誌を小生がやることになりました、御存じの「創作」のあとを太田水穗さんが「潮音」といふ名で繼いでゐましたが、それを今度また小生が引受けてやることになつたのです、そのため小生は十日ほどの後また上京します（家族をばこのまゝにしておいて）で、雜誌でも出れば自然またお親しくしてゆくことも出來ることゝ思ひます、歌をまた力を入れて詠んで下さい、今度のには曾つての明るさが消えて（底には殘つてゐるが）たいへん曇つてゐるのを感じました、そして口調も以前ほど整つてゐないと思ひます、單なる明るさでなく一層深入りした明るさがやがて此處から出て來るだらうと思はれます、人間の臭ひの餘程强くなつてゐるのなどは却つて以前に見なかつたいゝことだと思ひました。

繪葉書をありがたうございました、じいつと（あの田の中の）さびしいらしい町を見詰めてゐますと、いつのまにか、それが貴君でゞもあるかのやうに思はれました、福山をば汽車で二度ほど通つたことがありました、

二十日ころまで多分小生はこちらです、それがすぎますと、東京本鄕區天神町一ノ廿九、梅屋方へうつります、

十一月十一日　　若山牧水

渡邊麻吉樣

一八

十一月十九日、相模三浦郡北下浦村長澤より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（葉書）

三浦君、ほんとに御無沙汰しました、その後どうしてゞす、もうお身體の方はすつかりよう御ざんすか、いつもさう氣にかゝつてゐながら、よくお噂をしながら、なか〳〵葉書をもようかきませんでした、御免なさい。小生もあれから（昨年の三月末）この海岸に閉居してゐました。ところが喜んで下さい、四五日のうちに上京します、（當分家族はこのまゝですが）それは「潮音」（「創作」のあとに出た）の編輯經營を小生が今回引受けて發行することになつたのです。雜誌さへあれば、お互ひの間も毎月消息が知れ合つて、どれだけ淋しくないか知れません。のみならず、今度はよほど小生も考へた末に引受けたことなのですから、從來のやうに客氣に驅られて輕はずみのことをする氣づかひもなく、極めて眞摯に、質

實にやつて行く覺悟ですから、先回の樣な失敗など繰返すことなしにやつて行けると信じます。小生はこれを一生の事業の一ッとして、專心事に當ります、何卒そのおつもりで、充分の御聲援をお願ひします、非常に唐突に事がきまりましたので、とりあへず、右のみ御知らせしておきます。

十一月十九日　　若山牧水

一九

十一月二十四日、相模三浦郡北下浦村より、朝鮮京城、山崎斌樣宛（葉書）

阿木良君、とう〳〵空想實行派になつてしまつたやうだネ、中國ですら一寸微笑されたに、そんな所まで飛んだのか、いよ〳〵痩せて、正しくとんぼの生れ代りとなつたわけか、何しろ、御元氣お芽出度う、小生、それに比べて甚だ榮えない其後のありさまだ、それでもなか〳〵悄氣ないよ、にや〳〵しながら何か横目で睨んでる、いつか睨み當てることもあるだらう、君のその後をいろ〳〵と想像してみて、その實話がきゝたいのだが、それは先づあと廻しとして、僕は漸く二年間のこの海岸生活を切りあげる時が來た、明後日、（家族は來春として、）僕だけ上京する、そして「創作」の後身であつた「潮音」を全部引受けて發行することになつたのだ、この正月號からだ、出たら忘れずに送らう、それを以てその半島に一つ君の力で新領土を開拓してみて呉れ給へ、「半島文學」なんてものがある位ゐなら多少有望だらう、正月號に間に合ふやうなら十二月十日までに原稿（三十首内）と社費（三ケ月八十錢、半年一圓五十錢、一年三圓）を本郷區天神町一ノ廿九梅屋方小生宛に送られたし。（喜志宛の葉書は今日こちらへ來たので、とても廿五日なんかに間に合ひはしないよ。）とにかく、もつとくはしい手紙を右の所あてに出してくれたまへ、僕も返事をかく、考へてみると實際永く逢はないわけだネ、ほんとに元氣なのか、達者なのか。

十一月二十四日　　若山牧水

二〇

十一月廿日、東京市本郷區天神町一ノ廿九、梅屋方より、廣島市、三浦敏夫樣宛（葉書）

御返事、ありがたうございました、廣島におゐでる由、やはり御商賣の都合なのですか、近々御上京、大によろこびました、小生、多分その頃在京だらうと思ひ、三年ぶりの會見を非常に期待してゐます、雜誌のこと、「潮音」とは種々なことで分離してしまひ、改めて、「創作」を復活することになりました、この方がどれだけ正純で、いゝ氣持かわかりません、たゞ、急に斯うなつたので準備に甚だ困難してゐます、一月一日は到底駄目で、二月一日に初號を出します、私も歳をとりましたし、少くとも前のものよりいろ〳〵の點に於て好結果を擧げ得ると信じてゐます、お歌、久しく拜見しません、お送り下さいまし、

十一月三十日　　若山牧水

二一

十二月一日、小石川區戸崎町二、創作社より、四日市市、中村德之助樣宛（葉書）

御通知を出さうと思つてゐたところへお葉書でうれしうございました、初め、「潮音」を私が引きついでやるわけになつてゐたのでしたが妙な行きちがひから急に「創作」を再興することになりました、歷史もありますし、社友の舊知もありますのでこの方が却つてよかつたかも知れません、久しぶりにまた創作社の名の許に相集ることを何よりよろこばしく思ひます、氣を新たにして勉强もし努力もして下さい、やるからには必ず雜誌その他はこちらでしつかりやつてゆきます、規則書もまだ出來てゐませんが大體前の通りです、社費だけ紙價のため月三十錢、三ケ月八十錢、半ケ年一圓五十錢、一年三圓となりました、どうぞ、貴君の手で出來るだけの社友をこしらへて下さいませんか、舊社友が四散してゐますので、なか〳〵やりにくいのです、

家族は寒い間、あちらへおいてあります、
雜誌は二月一日初號發行です、

二二

十二月十四日、本郷區天神町一ノ廿九梅屋方より、市外大井町、和田山蘭樣宛（手紙）

お手紙、ありがたうございました、御意見よくわかりました。小川君のも。

つまり、それは私の思つてるのと全く同じだつたのです、わかるもわからぬもないことでした、若し貴下等の解してゐるごとき意味を越前君が云つてそれに私が若し同意したとすればそれは卽ちこのごろ折々出現する例のアル中現象です、いま君等のその言をきいていかにも不思議の思ひがしてならないのです。

小川君はよく私の胸中を察して居るのを見て內心驚きました、あの通りです、それにそれのみならず雜誌としての權威を持たしたいといふ希望も混つてゐます。

また、君の解釋の、毎號三四頁づゝは違つてゐます、「所謂一頁組の人を三四人」の意です、ですから一人で四五頁取る場合がないとも限らぬ、斯うすることは自然同人間の競爭激甚となつて、かなり私の苦しむ場合がないとも限らぬが、先づ私はそれに耐へてゆくつもりです。然し、越前君だつて、さう輕卒なことを考へるわけもないと思ふが、きゝちがひか（まさか二人ともとも思ふ）同じく酒の上のせゐであつたかも知れぬ、また、さうした新顏の秀才が出るとしたら（なか〳〵出まい）そのやうの處置法もあると思ひます、まつたくわれ等の結社は昨日やけふのことでないのだ、私としてさう下らぬ行ひは賴まれてもやられませぬ。

今度私の眞先きに手を着けようと思つてゐるのは、「現代歌人研究」といふ欄で尾上柴舟や石川啄木、前田夕暮といふやうな人たちを極く冷靜に、然し主觀的に批評し解剖してみたいと思ふのです、これは一面自分のためにもなります、いろ〳〵の反ばくがあつたら從順にそれにも耳を傾けます。と同時に、一

面「同人研究」もやつてみたいと思ひます、今のところ、眞劍になつてそれに値する人はやはり小川君のあげた三人です（私は口語(?)で同人間に同人の批評はなるたけ露骨にやらぬつもりでゐますからさうむきだしに云つたわけはないが、口吻で小川君が悟つたのでせう）今まで曾て何とも云つたことはないし、田舍にはゐるし、しますから先づ加藤君に手を着けようと思つてゐます、これも自分たちの仲間だとか何とかいふことは一切頭に置きません、たゞの一讀者一批評家としての見地からたゞ親切に綿密にしらべてみたいと思つてゐます。出來たら初號からと思ひますが、かなり責任のある仕事ですからさう急にゆかぬかも知れませぬ、尾上さんだつて、考へてみればなか〳〵かくれた佳いところを持つてゐます。君についても、小川君についても、云ふことがあります、そして、兩君とも、目下のところは一種の過渡期に屬すると思ひます、作らうといふそのこゝろもち、ねらひどころはいゝが、作はよほどそこからまだ離れてゐます、そして兩君とも同樣にかなり焦つてゐます（そのこゝろもちに於て兩君の間に同情があるのかも知れない、）

考へてみると創作社も多士濟々のやうで、實はあまり心太くない、まだどうしても一本立ちの强みと大きさとを持つてゐません、要するにこれからです、その點をも私は夙うからいろ〳〵考へてゐました、本氣で作つてゐるやうで、實のところまだ甚だ不本氣のところがあると思ひます、かなり眞面目といふことを缺いでゐます、詩歌の前にぬかづく眞ごゝろがまだよほど不足してゐると思ひます、和田君、君はどう思ひます。

越前君に對する兩君の批評にも大體に於て同意します、蓋しそれらの諸缺點をば彼自身も知つてゐるでせう、私の思ふにはこれからもう動いて行かぬ人とは思ひません、機會と發心とがあつたらまだ〳〵隱れた本質を發輝せぬとは限りません、めい〳〵が異つてゐることなども微笑まるゝことです。

ひとのことばかり云つては居られません、私自身も今度は一ツ大に勉强してみるつもりです、勉强して

みる樂しみのあるのを身うちに感じてゐます、これは、私にとつて決してかりそめのことではありません、私は過ぎ經て來た過去を（特殊の場合を除くほか）いつでもたいしたことに思つてゐません、いつでも新しく生れた者としてのみ自分を感じてゐます、これは人生觀などの理窟から來たことでなく自然にさうとしか感じてゐないのです、たゞ、のんきなのかも知れませんが、決してわるいのんきではないと思ひます。もう少し自分のことを書かして下さい、私はこれから（今まではきたない必要のみからだつたからダメ）ひまがあつたら思ひをひそめて小説をも書いてみます、幾つもさうした狀態に於て書くべき題材を持つてゐます、一つ位ゐは氣に入つたのが出來るかと思はれます。

和田君、私は何か事に當るごとに、この一二年來、一ツごとに眞人間にならうとする希望を抱くやうになりました、今度の潮音對創作事件などでも、しみ〴〵それを思ひました、心をこめて歌を作り（近來十ケ月、殆ど絶無）小説を書いてる時には特にそれを感じます。

急に眞人間にならうと云つたところでなれる筈もありませんが、さういふ希望を自分から、心から持つやうになつたことは、私の一生にとつてまつたくたいへんな事業です。一歩々々生れてゆくといふ心持なども自然此處から來るのではないでせうか。

佐野君のこと、ありがたうございました、早速今日私から葉書と規則書とを送ります、

それからこの三人間の手紙のことは單に三人間のみのことにのみとゞめておきませう、小川君には君より（私も云ひますが、極く遠廻しに）固くさう云つてやつておいて下さい、彼はかなり突拍子屋で且つおしやべりやさんだから、

太田氏の手紙、たゞきゝ流しておけばいゝでせう、

それからもう一ツ、小川君の手紙に先づ見え、君の手紙にも影のあつた自分を大きくするといふことを單に社會的にといふにとゞめず、これ

を自分自身としても用ゐたいものとはつきり心に記して下さい、云ふまでもないことですけれど、いゝ機會ですから一言すべらせます、

私も君の機智にならひ、何かかつこうな雜誌を見つけてその中に例の手紙を封入します、一寸待つて下さい、

身體は、あの晩、ほんとにその位ゐの影響で濟みましたか、何とかして速く直したいものですねエ、

細君によろしく、久しく逢ひませんね、近いうちひよつこり出かけるかも知れません、

十二月十四日　　牧　水

山蘭　兄

私も昨夜、（今日の九時がいよ〳〵の締切だといふので）完全に徹夜して秀才文壇に二十枚ばかりの小説をかきましたゝめ、頭がよほど疲れてゐます、脫字などあらば御判讀下さい、

二三

十二月十六日、本郷區天神町一ノ二九、梅屋方より、伊豫國、三浦敏夫樣宛（手紙）

廣島か、島か、と思つてゐたところへお手紙着、私も、とても無事の身體でないに相違はない、途中休息なしに歸られるかどうかと非常に氣づかつてゐたものですから、お手紙、重ね〳〵うれしうございました、よくほんとに無事に島守となられましたネ、お禮を云つていゝのか、お詫びをしていゝのか、一寸、わかりませんが、とにかく頭をさげます、さすがののんきやも少々あとで心配しましたよ、そして、流石の私の身體もあの後一兩日、とても本物でゐられなかつたのが、もつともその心配を增させました、

十日、お葉書を受取つた時、暫くは私も他と話が出來ぬ位ゐ、何ともいへぬ感がしました、暗涙を呑むといふのは、あれでせう、暫く葉書を見てゐて、誰にも默つて袂にしまひました、越前君にすら、あな

たのことを口に出しませんでした、あとで訊ねられて初めてうち明けたことでした、午後四時とあるのがまた氣になつて、行かうか行くまいか、いろ〳〵に考へましたが、とう〳〵よう行きませんでした、然し、ようござんした、あれで、當分思ひ置くこと無しでせう、年に一度位ゐは、ほんとに出ていらつしやい、そうして、われら枯渇人種をうるほして下さい、待つてゐます、

會は極めておとなしいものでした、雜誌の相談一時間、あと創題で歌を詠むこと二時間、雜談一時間で寫眞（雨のため失敗）をとり、散會しました、雨で靜かないゝ氣持でした、そのあと、有志だけで、附近の牛肉屋で、飲み且つ食ひました、こゝは先づ例の如くさかんでした、何しろ十二三人の人でしたからたいへんなものでした、でも、そのあとは何のことなく引き上げました、引きあげたのださうです、僕はどうして自分の宿へ歸つたか一向知りませんでした、

「牧水集」承知しました、二三日待つて下さい、いま手許にないのですから。それからこれはお願ひの方ですが越前君の例の繪を買つて呉れませんか、二枚とつて頂くと最もいゝがと云つてゐます、一枚五圓といふわけですけれど、これは幾らと申しません、なんでしたら阿父さんを口說いて下さいませんか、いづれか是非御賴み申します、御返事下さいまし、社の方も思つたほどではありませんが、先づどうにかやつてゆけさうです、二月一日を待つてゝ下さい、その代り私は全く晝夜兼行です、晝は雜誌の仕事、夜は自分一身の生活のための仕事です、一昨夜とその前と完全に徹夜して小說をかき、昨夜は宵からねてけさ三時に起きました、一ねむり眠らうかと思ひながらこの手紙にかゝりました、これからまた戸崎町です、

よく身體が續くものだと自分ながら感心してゐます、でも、二三日前湯屋で、カン〳〵にかゝりましたら十二貫二に落ちてゐました、私は今までに十二貫八になつたのが最低でしたに、またレコードを作りました、その時、カン〳〵氏の曰く「それは三浦

といふ人がいけないのだ！」と、眞實々々。

斯う世の中が寒くなつちアもう紅葉も散つたでせう、まして櫻においてをや、それとも一花咲かせてやる親切がありますか、どうです。實際寒い、身體が弱つてるせゐか、よけい浸みます、そこいらは溫かでせうねエ、でも、雪の降ることなどありますか。

頭がぼうつとしてゐる、耳なども少々鳴り居る、何だか、世の中があぢきなくなつてきた、戸崎町への行きみちだ、コニヤク氣分にでもちよとひたりますかナ。

コニヤク氏といへば鎌倉のコニヤク氏は、あれからさん〳〵ヘマをやりましたよ、滑稽々々。

戯談はおいて、

身體に氣をつけて下さい、いま弱られると、私も氣味よくない、ようござんすか！

十二月十六日あさ八時　　牧　水

敏　夫　兄

大正六年

一

一月十日、小石川より、大阪市、三浦敏夫様宛
（手紙）

寒い〳〵、ガタ〳〵ふるへながらけふライオン齒磨、三越などへ廣告とりに歩きました、そして、みな、耻をかいたゞけで歸つて來ました、

會員は二百五十名に上りました、でも會費はそれほど集りません、集つたのをば移轉（越前君が結婚することになり、戸崎町のあの家を出てしまひ、あの家に居られなくなつたので急に引越すことになつたのです）やら募集費やらにつかつてゐるので、正眞雜誌の費用をばこれから作らねばなりません、とにかく初號だけを作る豫定は出來てますが、二號がくるしからうと頭痛に病んでゐます、いづれにしてもやるにはやります、安心して下さい、

大阪へ遊びに？

のんきなことを云つてはいけません、小生昨今朝六時夜に一時か二時ですぜ、いまだつてもう電車が聞えぬから一時すぎでせう、間に合せの著書の原稿をかきかけていま餅をやいてゐます、そしてこの筆をとつてゐるのです、これをかきあげて印刷費にするといふわけです、大阪どころか、便所にゆくも惜しい時間です、

でも、四月のころ、行きます、つまり遊説です、大阪に百人位ゐ作れないものかと考へてゐるところです、

いかにも、いつが最後だか自分にもわかりません、酒を飲めばこゝろがかなしくなる、かなしくなれば何處かからだの外廓をとり外して居られるやうなところへ行つてゐたい——、ツイ〳〵出かけます、出かけて滿足したゝめしもありませんが、がまんしてゐるよりようござんす、酒がやめられゝばいゝんでせうが、これをやめてサテ他に代へる何物をもまだよう發見しません。

可哀相に、おさけの話は止しませうね。

寒いけれど、要するに春でせう、さう思ふと行つてみたい、久しぶりの大阪へ。四月に、どうかして逢

へないかなア。

また、梅が咲きますねエ、どうしたものか私はこの近年いつでもこの花の咲くころになると世の中がさびしくなつて困ります、

今度越して來た哀れな細庭にその木が一本ありますす、蕾んでゐます、あなたの島のおうちのアノ柏の若木はどうなりました？

自分で好きこのんでこんな無理な忙しい仕事を始めておきながら、すぐもう何處かへ逃げたくてたまりません、山の奥の落葉の降り積つてゐる大きな巖と巖との間の細い溪、そんな所でじいつと水でも見てゐたくてなりません、

梅が咲いた、また今年の自分の春も一ッ消えるのです、イエ、斯う言葉にすると可笑しい、そのこゝろもちは云ふに云はれません、

梅咲くと思ふこゝろのときめきをさびしむくせ
のいつつきにけむ

こぞ相模ことし都に見る梅のその初花は常にさびしき

行くところ梅の花咲き春めぐるわが代のはては
何處なるらむ

くだらぬことを書いてゐますと、いろ〳〵のことが思ひ出されます、何でもないと思へば何でもない、何とか思ひ出せばやつぱりさびしい自分の一生です、

もう止しませう、喰ひながら書いてゐたのだが、もう餅もいやになつた、

ホントに何といふ凍みやうでせう、膝なんか、ちか〳〵痛んでゐます、

一月九日深夜　　牧
敏　夫　様

寫眞下さい、

梅のはな枝にしら〳〵咲きそむるつめたき春と

なりにけるかな（封筒裏いつぱいに）

二

三月三日、小石川區金トミ町五三より、市外大井町、和田山蘭樣宛（手紙）

和田君、先夜まことに失禮、久しぶりにたいへん待つてゐて逢つたのにあんなに醉つてゐて誠にすまなかつた、あとで殘念で仕樣がなかつた、さぞあつけなかつたでせう、許して下さい、この三日ほど印刷所ごもりです、遲くとも今日はと思つてゐたのだが印刷所不馴のため、とんでもないへまをやつて、とう〳〵明後日夕方でなくては出來上らぬことになりました、內容は（恐らく體裁も）初號よりよほどいゝと思ひます、一頁組のもみな相當にいゝ、政一郎と柊花とが印刷してから一寸見劣りのするのを感じました。新しい人たちの出かけて來る機運が抑へ難く動いて來ました、女性もなか〳〵バカにならぬ、すべて見てゐていゝ氣持です、靑森方面では淡谷濤沫といふのがいゝと思ひますが、兄は如何思ひます、丹羽君をどうかしたやうな所がある、本號が出たら詳しい批評をきかして下さい、すべてに對する。雜誌、明日送ります、僕はこれからまた部屋を借りて他へ毎日かくれます、僕はやはり他に逢ふことがいけないやうです、獨りこもるにこすことはありません、今月からは眞實何とか法を立てゝよき生活に入ることにします、來月は從つてもつといゝ雜誌（云ひ得べくば歌も）が出來るとおもひます、自分のことばかりしやべりました、兄の生活はどんなでせうか。

三月二日夜十時

市外巢鴨アテネ印刷所にて　牧　水　生

小包、タンザク、只今着、ありがたう、三日あさ（原稿紙裏面に）

三

三月二十九日、小石川區金富町五十三より、岩手縣、福地房志樣宛（葉書）

宮島からお出しの葉書に、二十七日の夜に上野着とありましたので、それにその前、江の島から二十八日夜八時とありましたしますから、廿七日も必ず八時だらうと、停車場に出てゐました、ところがそれらしい一行を見ないので、念のため、福仙へ行つてきいてみましたら、そこでも今夜か明日かよくわからぬといつてゐるのです、「困つたなア」と思つたのは、二十七日の午後から雜誌の印刷が出はじめて、二十八日は特に忙しい日なのです、で、その日にはどうしても印刷所につめ切らねばならぬので、若し、おいでたらば印刷所の方へ廻つて頂くやうに云ひ置いて、出てゐたのです、そして、昨夜十二時すぎに歸つてお葉書を見、今朝一寸でも福仙の方へ行くつもりでゐましたが、つかれはてゝ目がさめず、とう〳〵殘念しました、今日も印刷所にきてゐます、

三月二十九日夜十時　牧　水　生

四

四月十日、小石川區金富町五十三より、日向國平賀財藏樣宛（手紙）

をり〳〵のおたよりを、ありがたくなつかしいものにして讀んでゐる。裏九州の方に移るやうな話もあつたし、門司あたりから葉書も來たので、てつきりさうだと思つてゐたら、さうでもなかつた樣だね、スルトやはり宮崎にゐるの？　君の短いたよりを通して、僕にも日向の春がをり〳〵心を痛めさせた、故鄕といふものゝ味ひは次第に齡と共に出て來るものゝやうに思ふ。若しかすると、數日中に、坪谷から母と姪とが出て來るかも知れぬ。實際はかなり苦しいわけだが、出來るだけのことをしてこの老人に仕へたいものと考へて居る。側について居れば、この數年來常に經驗して來た烏なきに胸をときめかすことだけでもなくなるのがうれしい。殊勝な心がけになりたいものと、思つてゐるところだ。「新潮」の歌をほめて頂いて、うれしかつた。遠くに離れてゐて、そして常にさうした深い注意を向けて呉れることを、實にありがたくも思ひ、默つてはゐるが感謝もしてゐる。そして、さういふ時ごとに、自分の作

が省みられてならない。「今少しく緊張した氣分で作れ」といふ君の言葉にはまつたく一言もない。空元氣（カラゲンキ）の高潮歌がいやならいやで、斯うした疲れたやうな、とび立つことの出來ぬ心持を、さながらに歌はれない筈はないと、信じてはゐるのだが、それが出ないのだ。出ないで、強ひてやれば妙な氣のぬけたものばかり出て來るのだ。恥しいことに思ふ。然し、この信念の強さから考へると、そのうちには何か屹度新しいものが出て來るだらうと、今までの經驗から推して、恃んで居る。雜誌（移りさき（右云つたわけで）がわかつてから送らうと今日まで送らずにおいた、今朝出した）四月號のはどうだつたらうか、同じく氣の拔けたものではあるが、「新潮」のと如何だらう。雜誌も、四月號で一寸行きつまつた形なのだ、歌集でも賣つて五月號をこしらへようと今日もその歌を直したり集めたりしてゐるところだ、苦しいものだネ、でもどうにでもして今度は出して行きたいと思つてゐる。多分、行けるだらう。それはさうと、君は眞實ひとつもいま作つてゐないのか、あまり考へこまないで、少しづゝでも作つてゐた方がよくはないか知ら。學校や、家庭や、君自身の生活や、いづれも無事だらうか、さうあるやうに想像されてはゐるが、何やらそれも冴えて目にうつらない。君にはわからない、と先日君が僕に云つたことが、いつでも思ひ出される。わからないのでもないと思ふ、色あひが違つてるだけで、お互ひに大方似たものではあるまいか。もつとも、さう云へば少し目のあいた人間全體に通じた寂しさ、ものたらなさかも知れない。同じくば、もつとこれを深く多量に握りたいものに思ふ。次第に僕は自分のちひさいのが見えて來て、その苦しさと云つたらないよ、そして、それと同時に、ぢいつと落ちついてその小さな自分を見守つて保持してゐることもしないで、（出來ないと云はない）徒らにがた〳〵してゐることを實に咒はしく思ふ。僕はまたそのうちそろ〳〵と小說を書いてみるつもりだ。歌は歌、別々にやれると思ふ、確かに。

相變らず飲めるか？

四月十日夜、久堅町のかくれ家にて

春郊兄　　牧水生

五

四月十五日、小石川區金トミ町五十三より、市外大井町、和田山蘭樣宛（手紙）

右の手指にけがをして、ほうたいで、文字がかけませぬ、失禮、（註、原稿紙の欄外はじめに追記）

山蘭兄、

直ぐ返事さしあげようと思ひながら、遲くなりました、お手紙ありがたうございました、短い文面中にも、よく貴兄の面影の表れてゐるのを誠になつかしく思ひました。すべてお言葉の通りです、みな、お互ひに元氣がない、想ふにこれはお互ひが今まで少しなまけすぎたためです、今少しきりつめた生活をしてゐたら、こんなことにはならなかつたのでせう、それが、それを、具體的に表はす道具の雜誌が出たことによつて、漸く知らず〳〵自覺された形なのでせう、そして、知らず〳〵沈んでゐることゝ思ひます、でも、どうせ一度は來なければならなかつた段どりですから止むを得ません、たゞ、この結果をよく處置すべきことに苦心したいと思つてゐます、久しぶりに私も歌を作り始めて、そのむつかしいのに驚いてゐます、こんなことは曾て經驗しなかつたことです、

いろ〳〵感慨がありますが、云つたところで、仕方がないと思ひます、最も強く感じてゐるのは、今まで遠くにのみ見てゐた人生が、驚くべく、眼のあたりに來てゐたことです、

御病氣、とりとめて、どうといふのではないでせう、見舞ひたいが怠けてゐます、病院にでも通つてゐるのですか、

お歌、折返し、お送り下さい、

十五日　　牧水

鄉里から母と姪と明日、出て來るさうです、

（封筒裏面に）

六

四月十六日、小石川區金富町五十三より、日本橋區、西村陽吉樣宛（手紙）

西村兄、

この十二日に御婚禮があつたやうにきゝましたが、本當ですか、謹んでおよろこび申します、どうしたひとなのです、そして、よろしくおつたへおき下さい、

「愛誦歌」はまだでせうか、

それから、もうひとつおねがひがあるのです、ずつと以前に貴兄にお話して、何かで、そのまゝになつてゐた私等夫婦合著の歌集を出したいと思ふのです、歌は双方で六百首（三百に三百です）あまりです、題を「白梅集」としようかと思つてゐます、原稿は今夜淸書出來上ります、そして、稿料六十圓、引きかへに頂きたいと思ふのです、（それをばすぐ印刷所へ納めるのです）私としては去年五月「朝の歌」を出してこのかたの歌集で、歌風の變りかけた一期の記念と思ふのです、一ぱい〳〵に行く見込でも立ちましたら、少々無理でも引き受けて呉れませんか、ちやうど時季もいゝと思ふのです、原稿を持つて明日出かけようかと考へてゐたのですけれど、何だかお忙しいやうにも思へるので、右、要旨のみかき記して、おねがひ申します、出來るならさうして下さい、

四月十六日　　若山牧水

五月號の雜誌の印刷費（前納）にあてたいのですから、急いでゐるのです、すみませんが、御返事折り返し、願ひます、

それから「創作」二月號の廣告料をまだ貰つてゐませんでした、

七

四月二十八日、朝鮮京城、山崎斌樣宛（葉書と手紙）

お手紙、しかもかうしたこまゞ〳〵とのおたより、

何よりありがたう、忙しいと云つても手紙のかけない程度ではないのだが、やはり例の通り、まご〳〵、うろ〳〵してゐるのです、御憫察をねがひます、龍山支社のこと、望外の幸です、（お手紙の通りのことが、いかにも本間君の方にはあるやうです、でも、これも無理はないと思つてゐます）さうした聯絡のある（鐵道といふやうな）集りとなると、非常に固定したものが出來さうで、樂しみです、臺灣にもやはり鐵道だけの人たちで出來てゐるのがあります、では、何分よろしくねがひます、（三ケ月七十二錢、半年一圓四十四錢といふ割）添削は今のところ一寸手が廻りかねますが、支社だけで、回覽雜誌でも作つて、その中に私も加はることにでもしたらどうでせう、他でもさうやつて好成績をあげてゐます、竹内君の歌は、たしかに異色あるものと初めて見たときから頭に殘つてゐました、特に君よりよろしくおつたへおき下さい、今日、葉書も出します、村田といふ人にも出しておきませう、何しろ、ありがたいことでした、今度はあまり大つぴらにやらず、個人的に事を保つてゆく方針をとるつもりですから、さうした關係から出來る社友を最も喜ぶのです、ことに他の勢力のあまり入つてゐない土地など、いゝわけです、

——あとは手紙！

「葉書の方をさきに讀んで下さい」

山崎君、とりあへず要用のみと心得て、葉書をかきかけたのだが、たまらなくなつて來たので、それをすてゝ手紙にする、

ほんとに、いつも無沙汰してゐてすまない、でも、何か事に當つてはいつも斷えず君の面影（昨日のも、今日のも）を心に浮べて、なつかしんではゐるのだ、君とてもまた同じことゝ思ふ、とにかく君は一體そこで何をしてゐるの？ようかん屋さんになつて、そして、どうするつもりなの？また、何の因果でようかん屋さんになつたの？そして大にもうかるの？これからさきどうしようといふ考へなの？露西亞へ行

く？まだ空想實行を思ひ切らない？何もその後大に變つたことは無かつた？ホれもられもしなかつた？第一いま獨りか二人か？面白いか面白くないか？しよげか元氣か？

何もかもみな眞直ぐに白狀してしまひたまへ、何だか、ペンで云つてゐるのが、めんだうくさいのを思ふ。君が、てん〳〵としてゐる間に、僕はまつたく相變らずだ、子供が二人出來て、だいぶおいぼれたといふだけだ、酒だけは相變らず毎日やつてるが、これも昔とはうんでいの變りかただ、飲んでお濠にとび込んで泳ぎ廻つて、おまはりにつかまつてまた他(ホカ)の見ず知らずのよつぱらひに貰はれて（おまはりさんから）、その家へ行つて、飲んで、ねて、目がさめて、はづかしくなつてとび出して、柏木の土屋のうちまで逃げ歸つたやうな勇氣などさらになし、何だか然し、だん〳〵人間といふものが立體的に見え出すよろこびをば感じて來た、今まではたゞむがむちうだつたが、こんどは自分で自分を見て自分をそだてつつゆくたのしみを感じて來た、歌もこれからそれにつれてよくなつてゆくかと思つてゐる。

喜志も相變らずだ、たゞお婆さんになつたゞけだ、びんぼうが烈しいので、一層婆々(ババ)りかたが速いやうだ、

友人にも、たいした變りはない、福永が三人のおやぢになつて、僕に輪をかけた貧乏ぶりを發揮してゐる、ホントだよ、ます〳〵痩せて、眼ばかりが頭の前面で威張つてゐる、〇〇の〇〇ヤンは中學校の先生になつて、飛驒の高山ではまつぴるまゲイシヤをひつぱつて町を歩いて、チョンになり、越後の新潟に行つて、校長とケンカをしてとび出し、いまは宮崎の自宅に歸つて、矢張り先生をしてゐる、不景氣なことばかり云つて來てゐるが、それでも、金はあるしサイクンは美人だし、まづいゝ方だよ、山本君がフランスから歸つて來た、相變らずグデンでヅボラで、そして、近く北原君の妹と結婚をする、雜誌も、表面は無事にやつて行つてるわけだが、初めに金をかけすぎたので、目下、實に苦しい思ひをしてゐる、何しろ、他に同じやうなのが幾つもあ

るし、みな投書家どもがナマになつてるし、以前やつてゐた時とは全く、たいへんな違ひだ、でも、どうしても今度はつぶせない義理になつてゐるので、今までにない決心を持つて、當つてゐる、この際、君の盡力など、實にありがたかつたのだ、正直にどろを吐いて、改めて禮を述べる。

金が足りないので、毎月遲れる、それに、初め、お役人とケンカをしたのがたゝつて、いまに三種郵便の認可を呉れない、來號（六月）はとつてみせる、五月號もこの三日には本にならうと思ふ、

酒のたゝりだらう、どうも昔と違つて身體がよくない、五月早々信州の中房溫泉に行くわけだつたが、鄕里から母が出て來たので、行けなくなつた、でもそのうちに行くつもりだ、

要するに、然し、さびしい、だん〳〵人間が、自分自身がさびしく感ぜられてならない、そして、だん〳〵臆病になつて、小さくなつてゆくやうに思はれてならない、

改めて、足下の健康を祈つて筆をおく。

四月二十八日午後　　若山牧水

山崎斌兄

八

四月二十九日、小石川區金富町五十三より、長崎市、中村三郎樣宛（葉書）

お葉書、ありがたう、何だか、たいへん變つた支社が出來さうで並ならず注意せられます、御盡力、多謝します、他のかたがたへも兄よりよろしくおつたへおき下さいまし、みないき〳〵とした人たちのやうにのみ想像せられて微笑まれます、どうです、そちらの支社中だけで、同寵雜誌でも作りませんか、そして、お互ひに批評し合つたりなどすることもいゝと思ひます、私も仲間に入れて貰ひます、支社設置のことは、三種郵便をとりたいために社友とか何とかいふ言葉を一切揭載を見合せましたゝめ、誌上へは何ともかきませんでした、妙な行きちがひから、どうしても許可してくれませんが、六月號からは第

三種として送り出せると思ひます、何卒、出來るだけの御後援を改めておたのみしておきます。
また、三日か四日になりませう、困ります、
二十九日印刷所にて　若山牧水

九

六月六日、巣鴨町天神山（大塚終點サキ）一二五〇、（大日本弓術會ノ下）より、小石川區高橋希人樣宛（葉書）

梅雨になりましたネ、お元氣ですか、先日は長瀞の繪葉書をありがたう、私はまだ行つたことはありません、明日あたり一寸何處か一二晩泊り位ゐで出かけたいと思つてゐるのですが、その長瀞へはどう行きます、そのみちすぢと、大體の費用とを折返しお知らせ下さいませんか、お待ち申します、
横須賀だかのお歌はたいへんきもちがようございました、その後、出來ましたか、
六月號、今日出來ます、
若山牧水

一〇

八月十八日、巣鴨町一二五〇より、信州、宮坂古梁樣宛（葉書）

信州を素通りして（秋田から酒田、新潟を經て中央線より歸京）大に殘念にも思ひ恐縮もしてゐるところです、歸つてみたら「白梅集」が出來てゐた、今までと違つた集でもあり、かたゝ〳〵大に讀んで頂きたく、別封お送りしました、而して讀後感を「日日」へ出していたゞきたいと思ひます、その後、お變りなしにや、旅から歸ると急に秋になつた氣がして、いさゝか、しよげてゐます、
殘星和尙は健在なりや、
八月十八日　若山牧水

一一

八月十九日、東京府巣鴨町一二五〇より、岩手縣、福地房志樣宛（葉書）

三日にこちらを立ち秋田まで行きました、歸りに盛

岡へ出て、そしてあなたの村をお訪ねするつもりでゐたのでした、そして、お話にきいてゐる溪谷の村をいろ〳〵に想像してゐたのでした、ところが妙なはずみから秋田より新庄に返り、そこから最上川を下つて酒田に出で、そこからまた船に乘つて新潟まで行つてしまひました、斯くして、その想像の村を見るの機はまた暫く延びることになつてしまひました、でも、近いうちに屹度實行します、それを樂しんでゐるのです、歸つてみましたら御親切なお葉書が屆いて居り、一昨日（その前夜歸つたのでした）お手紙參り、昨日、小包が屆きました、誠に、なんとお禮を云つていゝかわからぬのを感じます、たゞたゞ、ありがたうございました、魚は幸に無事で、香味ともにまだ鮮かなものでした、昨夜獨りして遲くまで煮たり燒いたりして酒をのみました、いつぞや送つて頂きましたのは（只今漸く云ひ得ますが）悲しいことに一箱悉く腐敗してゐたのでした、で、昨日は、お手紙がつくとすぐ郵便局へ電話をかけて特に配達して貰つたやうなことでした、いづれくはしく認めますが、とりあへずお禮のみ申しあげて筆をとゞめます、
八月十九日　若山牧水

一二

八月二十六日、東京府北豐島郡巣鴨町一千二百五十番地より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（手紙）

三浦君、
わがまゝだが、まづおねがひから申しあげる、甚だ香しからぬおねがひだが、
金を參十圓ほど拜借さして貰へまいか、
用途は矢張り雜誌の方なのです、いつそ、今月（八月號）限りで止してしまはうかと考へてゐたのだが、よく考へてみると、やつてゆけない筈はないのに矢張り自分のやりかたがまちがつてゐたからの失敗であつたのです。それも、從來は何といふことなく歌よみの師匠が弟子のために出してゐるといふやうな心もちが何處にかひそんでゐたのでよくなかつた、これからは全然態度を改めて、一個の商賣人としてや

つて行つたら結構やつて行けると信ぜられるのです、二三日考へて、いよ〳〵それにきめて、金をも作りにかゝりましたが、どうしても右三十圓ほど不足なのです、それも、來月號（一日發行、といつても三四日にはなりませう、つまり新しい印刷所へ前金そろへて持つて行けば急いでやつてくれますから　さうさせたいのです、今までの所はいふことをき、ません）を遲らせたくありませんので、承知して頂いたら折返し電報爲替で送つて頂きたいと思ふのです、返濟期は、これも今度思ひついた題目なのだが、「自歌自釋三百首」といふ單行本を大急ぎで書いて、それが本屋で引きうけてくれたらその稿料で直ぐさし上げます、九月末か十月初めになりませう、萬一、それが駄目であつたら、めんだうでも月十圓づつとして九月の末から今年一杯までに濟ますといふことにして下さい、今までのやうに歌よみの牧水としてゞなく、商賣人の牧水としておねがひするのですから、證文なり利息なりといふものも貴君の地方に行はれてゐる通りの樣式に從つて拜借したいと思ふのです、實は大分申しあげ兼ぬるのだが、どうもほかに持つて行けさうなところがない、非常な決心で、斯う、ぶしつけにもおねがひします、あまり無理でなかつたら、何とかして叶へて下さい、（金は電報にして下さい、證文その他のことは、あとから手紙で指定してよこして下さい）若し駄目であつたら早速その旨　御返事下さい、その時は、あきらめます、

いろ〳〵先日のお手紙の返事など書きつぐつもりでゐたが、右の願用を認めたら、もう何も書けなくなりました、書くにしても、あとから書きます、この秋の上京が、ほんとに實現されたらまことに幸です、今度は何處か郊外の雜木林めぐりでもすることにしておきませう、

御心配のリツル、チエリー女史は益々健在にして且つ妖艶の由、たゞ風のたよりにきくのみ、

僕は、雜誌をやめるやうな半分やけくそ的の旅行を今月の初めからこの十六日までやつて來ました、泰

然として腰をぬかした生活が一體どこまで續かうといふのか、一切不明、

とにかく、右で、筆をとめておきます、氣をわるくせずに讀んで下さい、

八月二十六日午前　　若山牧水

三浦敏夫兄

一三

九月十日、東京府巢鴨町天神山より、長崎市、中村三郎樣宛（手紙）

中村君、

御無沙汰してゐます、朝晩といつても誇張でない位ゐその人のことを頭に置いてゐながらいつでも默り込んでゐるのが私の癖で、そのためよくいろ〳〵の誤解なんか受けたこともありました、然したいてい心持は通じてゐるものと思ふ、

先日は寫眞をありがたうございました、想像してゐた人と大よそに合つたのも面白うございました、特に君と大橋君とはよくあたつた、町田君はいゝ和尙さまになりましたねエ、

このごろ、妙に長崎のことが頭に浮びます、いつかぶら〳〵出かけて行きますよ、九州ではたいがいの所はみな知つてるくせに長崎ばかり殘してあるのです、それで、島原をば知つてるのですよ、それだけに尙ほ意地わるく空想のまとになりがちで困ります、それに、今までと違つてその地に妙に個人的の親しみを感ずるやうになりました、つまり、君たちの一團が其處に出來てからのことです、無理をしては行きたくない、それこそ飄然とそこでお互ひ驚いた顏をつき合せる樣なことに速くなればいゝと空想してゐます、しかも極めて樂しい空想です、

その後、歌は出來ましたか、もう少し、もう少しと思ひながら私はいま最も君の作を樂しんで見てゐます、かれこれ云ふ必要もないと思ふので何も云ひませんでしたが、段々私の思つてゐたところへ落ち着いて來られるやうで、嬉しく思ひます、つまり、出來るだけ心を引きしめて、笑ひながらでなく作つて

貰へば段々よくなるに相違ないと思ひます、あゝして雜誌をこさへてゐても仲間に今のところ殆んど人らしい人がゐないので、心細いこと一方でないのです、それは、私の雜誌ばかりでなくどの結社を見てもみな同じです、そこへゆくと淺ましいもので自分の連中がいちばん慾目でよく見えますが、そんな他のことなど頭に置かず、自分等のことだけ考へだすと實に寂寥です、ずうつと見て御らんなさい、一體誰があります、ずつと初めから創作社にゐた人も新たに入つて來た人も、みな精の盡きた人みたいにキヨトンとしてゐるではありませんか、それはやはり私自身がよくないのだといつも思ひます、けれど、私はとにかく苦しむだけでも苦しんでゐます、見渡したところ、周圍の人はみなボカンとしてゐます、(たま〳〵してゐないのがあると思ふと歌のことをばのけにして、それをば種にして、何かろくでなしのことを考へてゐる奴なのです、もつともこの種の人の少いのは創作社のよろこびです、よそにはそれがずゐぶん多いやうです、作るといふも研究といふもたゞ見えからやり、それで一種の地位を作らうとする人や、しやうなしに歌を作つて社會上の地位を保つて行かうとする人や)歌の淋しいのは決して我等の間のみに限りません、天下一般にさうです、歌が盛んだといふのは實に皮相な外觀にすぎません たゞ氣の抜けてゐるだけいやな空氣を持たない我等の仲間は最もいゝ地位にある位ゐかも知れません、けれど、どうかそんな地位からはなるたけ速く脱け出したいものではありませんか、聲をひそめて、底ぢからを養つて、このみぢめなみすぼらしい歌の世界から一段とび出た所に我等の一圏を置かうぢアありませんか、わづかの力で容易に出來ることゝ思ひます、

とにかく、努めて下さい、私も勉強します、性來いくぢなしの私は自分一人では何をするのも心細くていやなのです、いま社中で多少とも望みのあるのは、ほんの三四人にすぎません、その中で誰か一人でも特に光を放つて來れば周圍も從つて驚き進みます、その白羽の矢を先づ足下に向けようぢアありませんか、

○○○○君をもとからの社中では一番有望だと思つてましたが、もと〳〵、實にいやな性格の人で、ただもういはゆる大家といふ者になりたく獨りで飛び出てゆきました、あんな心持ぢアもう進みません、中村柊花君が間がよければ進みませうが、かなり氣まぐれな人だけにあぶなつかしい、菊池野菊君は憾むらくは器が小さい、新しい人では正直先づ君一人でせう、向きやうでは片山朝日といふ人がどうかと思つてゐます、社外ではアララギにも誰一人ゐません、みな惡がたく固まつて眼ばかり光らす人のみらしい、やはり白日社にいゝ質の人がありさうです、でも、前田君があんな風ですから殺してしまひはせぬかと思はれます、他はみな二束三文にもなりません、御らんなさい、何といふさびしい眺めでせう、

元來、ひとのことをかれこれ云はれた義理ぢアありません、また、云ひたくもありません、たゞ、自分だけをもつとしたものに、——、少くとも自分で考へてゐるところにだけでも連れて行つてやりたいものとあけくれ心を使つてゐます、

長談議になりましたネ、

四五日來、腸をいためて毎日のお神酒をもずつと減ぜられてゐますので、そのうつぶんが凝つて右の如くなつたのかも知れません、

君は、酒はいけますか、身體がわるいといふのはどこなのです、實際何をおいても身體ですね、このころ、そこ此處と少しづゝ身體に故障が起き始めましたが、實になさけない、わるいといふところをどうかして速くお直しなさい、私もこのごろずつと好きな酒をも攝してゐます、もと〳〵大酒家の方ではないのだが、それでも身體のいゝ時にはずゐぶん馬鹿をつくしました、今では獨酌獨りを樂しむと云つた境地です、それにしても、いつか一度對酌したいものですねェ、

もう止しませう、他の人たちに君よりよろしくおつたへおき下さい、高島君には特に無沙汰のわびを述

べといて下さい、

九月十日　　若山牧水

中村三郎兄

一四

九月十七日、東京府巣鴨町一二五〇より、函館、河村光次郎樣宛（手紙）

お手紙と社費ありがたうございました、

お手紙の後半にある歌の面白くなき御感慨、骨を刺さるゝ思ひがしました、まことに、歌はいま一體につまりません、それはひいき目でなく「創作」に限つて拙いのではありません、歌があまりに普遍的になり、つまり昔熊公八公が發句をやつてゐた代りにいま新派和歌をやるといつた樣な形もありますし、一つはまた黑人側ではあゝでもない斯うでもないといふ樣なせんさくのみ始めたゝめだと私は思つてゐます、どの時代でも研究といふものゝ盛んの時には必ずのやうに創作は衰へてゐます、

けれど、これもさう永くもつづかないでせう。また、續かせたくないものです、小さくとも雜誌など出してゐる以上、何かしら斯うした場合に役立てたいものです、今までは（今もですが）全く經營一方で心をつかひ切つてゐました、これからは少し何とかするつもりです、私自身、不滿足でたまりません、このまゝ別るゝ云々のお言葉、ありがたうございました、よく、私も記憶しておきます、

御家業と、御境遇は、どうなのです、お漏らし下さいませんか、私共も貧乏な代りに割に健康です、けれど、いろ〳〵考へ出せば苦しいことさびしいことのみです、

をり〳〵おたよりねがひます、

九月十七日　　若山牧水

河村光次郎樣

一五

九月十八日、東京府巣鴨町天神山一二五〇より下野國、高驪正庸樣宛（手紙）

御無沙汰してゐます、ツイ近頃逢つた樣にもあり、

ずつと永く逢はずにゐるやうにもあります、要するにツイ近いところのくせに二三年お別れしてゐるわけですネ、

今月は歌がなかつたのですか、この三四ケ月たいへん佳いと思つて（中には極く平板のも混つてゐるが）いつも樂しみにして拜見してゐるのに、見えないとなると淋しさを覺えました、君の歌は佳いと云つてもずつと際立つて特殊の色を持つてゐるといふのでなく、自然に押し詰めて行つた平凡の裡の微妙に到つたものが多いのです、で、ちよつと目につかぬが、見あきませぬ、九月號のではいごの花（どんな花です、いちごの花のやうなのですか）や魚つりの歌などがそれです、おもふに君は今後とも矢張りこの道を急がずに益々きめ細かに押しつめて行かるゝがよくはないでせうか、たゞの平凡でない、つまり自然を自然のまゝに洗練して表はすといふ行きかたなのです、私など、時々浮氣を起していろ〳〵に細工したりなどしてみますが、やはりしまひにはもとの自然のまゝといふのに歸つて來ます、たゞ、どの行きかたでも同じですが、氣をゆるめてはだめですネ、直ぐ死んでしまひます、君と殆ど同じ傾向であつた加藤君が何かに考へ込んで作らず、和田君はまたあゝでもない斯うでもないで自縄自縛になり、今のところ君ひとりが殘つてゐるやうな形です、それを思ふても自重してほしいと思ひます、自愛し、努力して下さい、一念澄入の境地のありがたさがこのごろ次第に私にもわかつて來たやうに思ひます、木の實のやうな靜かな生活、さうしたところに入つてゆきたくてなりません、追々と私も二重三重の生活から離れてゆくかも知れません、

元氣なのですか、身體は大丈夫？御家族はどうです、越前君のことで、ありがたうございました、同君もあれ以來大元氣で、文展に出すとかいつて屏風を二枚書いてゐます、一枚は出來上つてあと一枚にかゝつてゐます、同君にあゝした活氣を與へたのはまつたく君のちからといはねばならないのです、厚く御禮申します、

菊池君が出て來ました、あの人の上京があの人にど

んな影響を及ぼすか、全く私にもわかりません、和田君は先づ失敗といはねばなりませんでしたからネ、

もつとも幸も不幸もその人々の心にあることで、こんなことをば他からは何も云はないが適當だと思ひます、

山がよくなりますネ、いろ〳〵のことが心にうかびます、

今日から選にかゝります、來月は少し變つたものをこさへようかと思つてゐますがたゞ思ふだけでせう、要するに歌のさびしいのが心苦しくてなりません、

みな〳〵様によろしく申しあげて下さい、

九月十八日　　牧　水

背山兄

散文、拜見しました、頁の都合でと思つてゐますが、どうもむつかしいかも知れません、その時はあしからずお許し下さい、（初めに）

漸く晴れさうです、（封筒裏面に）

一六

十月八日、東京巣鴨より、長崎市、中村三郎様宛（葉書）

ありがたう、風はたいしたことはありませんでした、たゞ、生れて初めて作つた庭といふものゝ草花がすつかりやられてしまひました、がつかりしてまだあとしまつもようしません、旅行、たいへんいゝことですネ、是非實行なさい、だが、おたづねの人は殆どゐません、久留米に一人もゐないし、大分縣にも大分市笠和町に三浦道夫君といふのがゐましたが、今はゐません、日向にもゐません、平賀春郊君が近頃までゐましたが、上京して來ました、兒湯郡三納村といふに樋渡花明君がゐますが、道路から引き込んでゐます、日向に行つたらとにかく宮崎郡の青島には行つてごらんなさい、鹿兒島には二三人あ

ります、そちらにもゆきますか、また、おたより下さい、私も先日のゝ御返事も書かうと思つてゐてまだ果しません、しけから惡性の風邪で、ずつとねてゐます、

八日　　牧　水　生

一七

十月十日、巣鴨町天神山一二五〇より、府下大井町、和田山蘭様宛（手紙）

友よ、

どうして、をるか、
ちからなくつぐみてをるや腹くろくかまへてを
るやいづれかはいへ
庭さきに花など植ゑてをることはやよおたがひ
にさびしければぞ
罵ると汝をするときしみづからのちから危しと
こゝろ冷えて止む
友としてちからを持たぬ時々のわれは見ゆらめ
どうとんずなゆめ
おほよそにおもひそらすな一すぢにおもひいり
たることは尊し
なかばにてひとみ落すなわが友よおもふことみ
なひとみには宿せ
酒のみのわれとおれとが酒なしにむかひ合ふこ
とも或時よけむ

十月十日　　牧

山兄

シケはどうだつたネ、（封筒裏面に）

一八

十月十六日、東京府巣鴨町一二五〇より、千葉縣、細野春梨様宛（葉書）

こま〳〵とのおたより、ありがたうございました、白梅集、明日か明後日かお送りします、何か拙い文字をかいておきませう、定價と郵税と八十錢さし引き、殘り一圓二十錢を社費の方へ廻しておきます、で、來年二月分まで濟んでるわけになります、

まことにたいへんなあらしでしたねエ、あなたの方もずゐぶんひどかつたやうにきゝましたが、それほどの御災難もありませんでしたか、私の方も屋根を少し剝がれ、庭を荒らされた位ゐですみました、あらしより私にはこの毎日々々續いてゐる曇天がたまらなく苦痛です、このためにとう〳〵今年は秋といふ秋を知らずにすごすのではないかと悲しんでゐます、

あなたの村は銚子から遠うございますか、

十月十六日　　若山牧水

一九

十月二十六日、東京府巣鴨町一二五〇より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（手紙）

三浦君、

さしあぐべき手紙をさしあげずに過した日數が、もう五十日かそこらたつたことをいま考へてゐる、事情はたいてい御推察のことゝ思ふ、ことに今月九日發のお手紙を見た時など、一種の暗涙を覺えたくせに、やはり默つてゐた、

金のお禮もまだ云はなかつたと思ふ、どうにもならなくなつてあれを書いて、すぐあれを送つて貰つた時は、實に何とも云へぬ感謝を覺えた、あれで一息ついて、十月號はどうにか無理をせずに出した、十一月號でまた行き詰つたが、今朝の樣子で、どうやら雜誌にするにはなし得る樣になつた、とにかくあの時は隨分弱つたのだ、

すぐお返しするやうに大きなことを云つたが、やはりうまく行かぬ、然し、今後一二ケ月のうちに、どんな方法でかお禮をしたいと思つてゐる、どうかそれを待つてゐてくれたまへ、書畫帖、一日か二日車か何かで駈けめぐればすぐ出來ることだが、今の僕にはちとそれがむつかしいのだ、ひたすらに知人に逢ふことを怖れてゐるので、いち〳〵いま賴んで廻ることがいかにも苦痛だ、せめて歌よみの重な人十人くらゐならと思ふが、これならば案外容易に出來るかも知れない、それから、今までの僕自身の作のうちから自分の氣に入つた歌を百首だけ拔いてそれ

を何かの帳面一帖に書き取るか短册にかくかしてお送りしたいと思つてゐる、いづれかして微意を表することにする、

赤土山のいたゞきに腹ばひになつて書かれたといふお手紙、今もとり出して讀んでゐる、落ちつかぬ氣持が常に身から離れぬといふ心には誠に同感する、つまり僕等のは、それのもつと惡辣なものなのだ、

近代人の、免れぬ境地なのかも知れない、文學を知る者のそれが運命なのかも知れない、然し、自分で自分にうち克つことが出來ないこともないと思ふ、どちらつかずの所にゐるからさうなのではないか知らとも思はるゝのだ、僕はどうしてもそれから速く逃れたい、外部生活はとにかく、心のうちだけでももつと清澄な靜かなところへ行きたくてたまらずにゐる、

雜誌をやめて、島へ來ぬかといふ、難有う、實に難有う、然し、僕にはいまさうした自由がない、なるほど雜誌印刷の場合になると苦しむが、とにかく平常はその雜誌のために食つてる形なのだから强ちこれを排斥するわけにゆかぬ、そして今度は單に止むを得ず雜誌を出してゐるといふでなく作の方からもその雜誌發行を有意義だと感じてゐることが二三あるのだ、で小さいながらも、どうかしてこれをば續けてやつてゆきたいと思つてゐる、この心もちが變らぬ間、いやでも東京から離れられないと思ふ、御厚意をばほんとにうれしいと思ひました、

いま僕はたしかに生活の一轉期に來てゐるやうだ、いろ〳〵、實に變つて來ましたよ、そして、それはすべていゝことだと思つてゐる、僕の日といふものはこれから明けるのではないか知らとも思はるゝ位ゐです、外部は非常に老いぼれて內部はいよ〳〵若くなつてゆくやうな快さをしみ〴〵感じてゐます、これはたしかに喜んで頂くに足ることだと思ひます、

秋の上京はよしましたか、

僕は九月もだつたが、今月に入つて本式に病人になり、すつかり寢てしまひました、四五日前から起

きてゐます、月初めから八年目かに酒をやめて、いまだに嚴重にそれを守つてゐる、あと一二週間は駄目らしい、若し、君が上京するならそのあとにしてほしい、いまのところ、まるで外出すら不能の形です、

十一月號は少し遲れて、出ます、折惡しく昨夜また大雨で、多分工場が浸水（淺草の向側川側ですから）したと思ふ、スルト、もつと遲れませう、小さいけれど、だん〳〵みんなの歌もよくなつてゆくやうに思はれる、さうは思ひませんか、

元氣ですか、僕はよくないが、家内はみな達者です、勝手だが、おたより下さい、

十月二十六日　　牧　水

敏夫兄

二〇

十月三十日、東京府巣鴨町一二五〇より、滋賀縣、西堀花汀樣宛（手紙）

お手紙、ありがたう、ほんとにもう暫くの間ですネ、おうちに起き臥しなさるのは、身體はお丈夫なのでせう、それだと大丈夫だ、推察するところでは、極めてすなほな性質のかたの樣でもあるし、入營後もそれほど、苦惱なしに過し得らるゝかと思はれますよ、却つて、そのため身心を鍛へられていゝかも知れない、人間の底には、（本能といつてもいゝか）叩けば叩くだけよき素質の現はれて來るものがある樣に思はれます、貴君も、さうして、いまだに知らなかつたよき世界を自分のうちに收めて來らるゝやうに祈ります、たゞ、それより祈らるゝのは、尊い自分を荒すな、といふことです、平和な家庭（さうらしく思はれますから）から急にそんな所へ行つて、驚きと周章と自暴自棄などのため、われからわれを壞して了ふことがありがちだと思はれます、ありもしますまいが、そのことのないやうに祈ります、歌は、さういふ場合、常に貴君の友となるであらうと思ひます、

詠草、今日着いたのをも拜見しました、たいへんよくなつてゐる、今までのには、線の極めて細かい調

はゞ模樣畫風のところが多かつたが今度のは、線もやゝ太く、より多く自然になつて來てゐる、まだ、底のちからには乏しいが、これは今のうち止むを得ぬことゝ思ふ、たゞ、このまゝ自然に伸びて行つて貰へば、充分だと思ひます、

私は貴君を見出し得たことを、自分ながら喜んでゐる、私の求めてゐる詠風に貴君の作が適つてゐるといふのみでなく、その人となりまで、親しく感ぜられてゐます、これから貴君の行くべき道は廣く且つ自由である、背のびをしながら、ずうつと大きくなつて行つて下さい、ほんとに、自愛をいのります、

いまはお忙しい盛りでせう、暫くは田畑にも出られないと思ふと、へんな氣がしませう、

琵琶湖の岸にでもあたりますか、近江のどの邊です、

十月三十日夜　　若山牧水

西堀花汀樣

十一月號は三日に出來ます、

社費は御都合の時でようございます、

二一

十一月八日、東京府巣鴨町天神山より、青森縣、加藤東籬樣宛（手紙）

林君にお逢ひの由、さすればこちら同人の貧弱なる消息、みな御承知のことゝ思ふ、和田君も久しく睡つてゐた（而かもあまり樂しくなく）樣だが、この頃、少し何とか考へ出した樣子です、あの人の歌も慘めな位ゐ行き詰つてゐるので、どうかせねばもうその最後らしくも見えてゐたが、あれで考へ直せば寧ろ以前の境地を拔け出てよきところへ進むかと思はれます、越前君は自分でもやる氣はあるまいが、あつたところで、たいてい解つたものと思はれる、聞けば今年一杯で役所の方をよして畫專門になると云つてますが、果してどうかと思はれます、

君の歌を「獨白」の何月號かでみたが、これも香ば

しからぬものと思ひました、根のない底のない獨斷的な「自己の境地」を空語してるらしくしか受取れませんでした、その後、作つてゐますか、ちやうど君の好きさうな季候にはなつたし、例の啄木鳥なども例の梢にやつて來はせぬかと思はれてゐます、君にしろ、和田君にしろ、妙に小さな殼を作つて其處に強ひてをさまらうとする傾向のあるのは不思議なことだと思ひます、なぜもつと自然に、そして非安易的にならないのでせうか、板の上に載せられた乾いた土と天地の土と、同じ土でもすつかり違つてゐるではありませんか、

東京に、ほんとに一寸でも出て來ませんか、僕まだ飲めないが外出位ゐは出來るやうになりました、ちと寒くなつたが、それでも、火桶を抱へて饒舌り込むにはさしつかへはない、あまり無理でなかつたら出ていらつしやい、みな待つてゐる、

今日は珍しい晴天です、風があつて、木の葉がしきりに散つてゐます、いゝ音だ、

十一月六日正午　　牧水生

東籬兄

二二

十一月九日、東京府巣鴨町一二五〇より、京都市、藤井草宣樣宛（手紙）

思ひがけぬお手紙、まことにありがたうございました、實は、先日の蘭溪亭のよせがきの中にあなたや西内雨森君たちの名前を見出して、おう〳〵、と思つたのでした、よく、ほんとに、おたより下さいました、

たいへんな御氣焔で、ナルホド、これは大人になられた、と驚き微笑んだことです、私はいま、くだらぬことで、頭を病らせてぐんなりしてゐますので、御氣焔に對する個々の返事を暫く見逃して下さい、たゞ、おたよりを頂いたよろこびを述ぶるだけにとゞめておきます、

雜誌を別便で二册送ります、一册は御近所だときく藤元君におわたしなすつて下さい、久しく便りがありませんが、どうしたものかこの人も忘れ難い一人

です、そして、私の手紙の代りだとおつしやつて下さい、

藤井黎白君はどうしてゐます、東京で病氣して居られるやうにもきゝましたが、さうでせうか、所がわかつてゐましたら敎へて下さい、あの人は私には淋しい印象のみを殘してゐる人です、

西内君雨森君にも、あなたから、よろしく〳〵おつしやつて下さい、雨森君のことは想像すれば想像出來ないこともないやうに思はれるが、西内君は一向わからない、近況お知らせ下さらば幸です、

歌のこと、私のいま抱いてゐる意見などは逐次雜誌を通して見てゐて下さい、このころ特に一種の覺醒（？）を感じてゐます、何か、近く事實の上に現はし得ると信じてゐます、何か、早く、やりたくてたまりません、歌といふものがいま漸く私の目に見えて來たやうにも感ぜられます、

世上の雜相についてだいぶ御憤慨の樣が見えますが、めくら千人、憤慨するのがまちがひかも知れません、

然し、その憤慨によりあなたの現狀を知るを得る便利はありました、

京都の秋の話、胸の苦しくなるのを覺えます、空想してゐるだけで、一度もまだ知りません、いつか、そこで、その折にお逢ひする機會のあることを望んでゐます、

十一月九日　　若山牧水

藤井艸宣樣

二三

十一月（？）十二日、武州飯能町港屋より、東京市、平賀財藏樣宛（葉書）

あんまりよく晴れたので、ふいと思ひ立つて、正午すぎ、池袋から武藏野鐵道に乘つて、此處まで來た。野のはて、山の起る際、裏を流るゝ入間川が意外に大きく且つ淸いので驚いてゐる。あまりその溪が美しいので、明日もう一日、若し晴れたら溪に沿うて三四里馬車に乘つて見ようか知らと考へてゐ

る、痛み出しはせぬかと危ぶみながら。上市場といふ宿場があるさうだ。溪を挿んだ山がみな明るい紅葉のさかりなのだ。こんなことなら君をさそつてくればよかつたと思つてゐる、身體のせゐか、妙にさびしい、それに、土地一といふのださうだが、宿屋がきたなくてなんだか心細くてならぬ。寒いねえ、霧のおりてるなかに、灯がそこ此處見えてる。歌が出來さうだが、明日にして、今夜、ぐつすり眠りたい。

十二日夕方　　牧水生

二四

十一月二十二日、東京府巣鴨町一二五〇より、長野縣、山浦喜造樣宛（葉書）

寒くなりました、山國はいつそうさうでせう、お歌を今夜（十二月號分の）見てゐます、たいへんに佳い、靜かな、おちついた、讀者を相手にせぬ詠みぶりが、平凡らしい歌をみな活かしてゐます、何とも知れぬよろこびで繰返し拜見してゐます、

これからまた雪でせう、お達者ですか、

十一月二十二日　　若山牧水

大正七年

一

一月二十二日、東京府巣鴨町一二五〇より、朝鮮京城、山崎斌様宛（手紙）

拝啓

御起居如何。けふ半島文學の通知到着、またやるのか、その内容はどんな組み立てにや、鷄林文壇との關係其他詳細きゝたし。

いつぞや君から云つて來た短册を五十枚書いて朝鮮を一遊する方法、あれはホンの當座の座興で云つたのか、それともまた實のある話か。乃至、實になりさうな話か。實は、その時はそれほどにも聞かなかつたが、この節、何だか大變大陸といふものが見たくなつたのだ、乾いた冬の空氣のなす戯れかとも思ふが、都合ではひとつ實際に飛び出してもいゝと思ひ出したのだ。で、前の君と高須賀君とのよせ書きを思ひ出した。もう一度、何とか云つてみて呉れないか。それによつて覺悟をきめたいと思ふ。あまりみじめな思ひをして開くことならその短册會もイヤだが、さうでなく、無事に運べさうなら、やつてみたい。行く、となつてもすぐは駄目だが先づこの五月か六月だネ、都合では滿洲の一端ものぞいて來たいのだ。いま、さかんに空想が渦を卷いてゐるところ。若し、具體的になりさうなら尚ほ一應御一考を望む、その上、御通知を待つ。

本間君が「創作」をよすやうに言つて來たが、何かわけがあるのだらうか。難波英夫、小野和之君からもお手紙頂きながらツイ御返事しそこねてゐる、君よりよろしく。

（中絶破れ）　僕のうちにはこの三月か四月、第三人目が生れる。「朝鮮及滿洲」の選、とにかくやつてゐる。金も送つて來てゐる。やる位ゐならもうちつとあれをさかんにしたいと思つてゐるけれど、一向投稿がないやうだ。

この頃、どうも身體がもとの様でない、この二三日、また酒をやめてゐる、悲慘だネ。それだけ、仕事（一生の）の方には身が入りつゝあるやうてゐる、これからは何か出來さうだ、今までは全く夢中だつたのだネ。いろ〳〵のことを思ふ、過去、現在、さうして未來、文法のおさらへではないが、凡人はやはりそこからどうしても脱け出せないやうだ。

寒いさうだネ、こちらは例年にない晴天つゞきで少し氣味がわるくなつてゐる。北國は雪が大變らしい。

お目にかゝらぬが、夫人によろしく。高須賀、其他諸君にも。

一月廿二日　　牧水

斌様

わが親愛なる「空想」のために、折返し御確答を待つ、

二

一月二十六日、東京府巣鴨町一二五〇より、千葉縣、細野春翠様宛（葉書）

細野君、とうと出しそこねたおたよりを漸くいま書きます、何とも申しわけありません、御おくり下すつた珍らしい野菜は、私の伊豆旅行の留守中に届いてゐました、普通よりよほど遅れて屆いた様です、何よりもお手作りといふのがうれしうございました、正月のことで、ことにありがたく、來る人ごとに自慢しながら馳走しました、二月號に山蘭君の猪を煮る歌が載りますが、その時にもあの牛蒡は珍重されました、お禮をいふのもきまりのわるいほど怠けてゐましたが、とにかく、ありがたく御禮申します、正月はいつでもさうですが、毎日毎夜來客ばかりで、殆ど机に向ふ時がありませんでした、それに十五六日から齒が痛んで、今日漸く二月號の選歌にかゝつてゐます、お歌、先月はたいへんよかつたが今月はやゝ落ちました、また毎月を待ちませう、二月號は五六日遅れます、

一月二十六日　　若山牧水

三

二月七日、伊豆田方郡土肥村、明治館より、東京、杉本寛一様宛（葉書）

杉本君、とう〳〵來たよ、古戦場へ、こんどは君土

藏の天井へほうり込まれてしまつた、宛然あき俵あつかひだネ。でもいゝよ、心耳澄むところ自らそこに神境ありサ、他を探すのもめんだうくさい、じいつとこゝにころがされてゐるつもりだ。靜かだ、隣室といふものを持たないからネ、何だか少し氣味がわるい位ゐ。今夜初めてこゝに獨りでねむるのだが、考へてゐると、さびしくなつた、イヤに心ぼそい。風邪はすつかりいゝやうだし、せい〳〵仕事でもして行きませう、歸つたらほめられたいものだ。今夜は別あつかひでこの土藏の天井でねず公を相手に二三本ぶつ倒すつもりだ、明日からはすつかりつゝしむよ。細君と、榎本君によろしく、手紙をくれたまへ。

二月七日夕方　　若山生

四

二月九日、伊豆田方郡土肥村、明治館より、東京、杉本寛一樣宛（葉書）

杉本君、早速だがおねだりだ、それもチト大きい聲で言へない代物なのだ、ほかでもないお菓子がたべたいのだ、銀座の木村屋（だつたネ）からビスケットのいゝのを買つて送つて貰へまいか、他に何か恰好なものがあつたら尙ほいゝ、イヤ寂しいの何のつて、昨日一日で何だか氣が變になつた、すぐ逃げ出したいのだが、さうも行かず、まアボリ〳〵嚙りながらでも机にしがみつかうと思ふのだ、妙なものをねだるやうになつたものサ、

若山牧水

五

二月十二日、伊豆田方郡土肥村、明治館より、信濃、小里頼子樣宛（手紙）

信濃は今年は別しての寒さだときゝました、お變りありませんか、昨年の夏、お目にかゝりそこねて、いまだに殘念に思つてゐますが、でもお目にかゝつてゐる樣な思ひもしてゐます、このごろは御近親に御不幸がおありになりました樣で、お歌を通してあなたの御近狀をよく知つてゐる樣にも思つてゐます、

緊張に緊張を重ねておゐでゐらしい御起居を御いたはしいやうにもまた近よりがたいやうにも眺めてゐます、この二三ケ月間のお歌はいつも我々の目をそばだゝしめてゐます、寸毫ゆるみのない御心持が、一首々々を通してうかゞはれます、拜見してしまつていつも敬虔な思ひにうたれます、

然し、あまりに心をいためて御健康にさはる樣なことのないやうに祈られます、御健康さうには想像されますが、それでもいかゞですか、とにかくに御自愛下さいまし、

中村君にはお逢ひになることがありますか、西さんその他には？

私はこの七日にこちらに參りました、溫泉といつても極めてさびれた所です、でも海岸だけに溫かです、精々仕事をするつもりで來たのでしたが、ぼんやりして何もせずに過しました、まだ二週間もゐて行かうと思つてゐます、

東京においでになる樣なことはありませんか、お目にかゝりたいと存じます、

今月の御詠草、たのしんで待つてゐます、十七八日、二十日ころまでゞ結構です、こちらあてにおよこし下さい、

二月十二日　　牧水

頼子樣

六

二月十四日、伊豆田方郡土肥村、明治館より、信濃、中村柊花樣宛（手紙）

四五日前から一寸書きたい〳〵と思つてゐてなかなか書かなかつたところへ、淺間からのよせがきが屆いた、

羨まれたりなどしては割に合はないのを思ふ、どうしたものだか一向氣が浮かない、起きるとから寢るまで重苦しい氣持でのみすごしてゐる、滯在中に單行本を二册、春陽堂から歌の作法を、新潮社から散文集を、書きあげてゆかねばならず、ことに作法の方は初めから一枚々々と書かねばならぬのだが、まだ一枚もようかゝずにゐる、けふで滯在八日目

だ、

信州は大變寒いさうだ、少しはもうゆるやかになつたかネ、こゝは暖いのは暖かだ、海岸で、東北に山を負つてるのだ、たゞ不便でネ、溫泉宿なども信州のずつと邊鄙のところよりひどいかも知れない、古いにはずつと古くからある溫泉場らしいんだが、歌の會は面白かつたかネ、その位ゐの人數だと却つていゝかも知れない、西久美子の黑いゝさい可愛らしい顏を思ひ出す、素山老とは後日物語なしだつたらうか、山口君は行かぬがよかつたらう、

歌は出來る？　先月（つまり今月號）のは少し變りかけてゐたやうだつたが、どつちつかずの狀態と見る方が、確かだと思つた、僕も暫く出來ない、こちらでまだ一首もなし、歸るまでには少しは出來るだらう、

とにかく、右の作法書をかきあげねば歸るにも歸られぬのだから、まだ十日やそこらこもることだらう、けふから思ひ切つて書きかけるつもりだつたがまたぐれた、來月號の雜誌も急ぐのだが、それも運命が右の作法書にかゝつてゐるのだ、二月號はさびしかつた、遲刊か休刊にしても次號はもつとよくしたいと思ふ、君の原稿、こちらに呉れ給い、

北町品、よくなるネ、少々切れすぎるのを思ふが、あれで靜かに抑へて行つたら、いゝだらうと思ふ、丁度そのことを昨日か云つてやつたところであつた、

どんな女だネ、すねものか、おはねか、何か內容がありさうかネ、忘れてゐた、美人かネ、

どうしたものか、僕には中房の若葉が空想されてならない、此處あたりよりどんなにいゝだらうなどと思つてゐる、さう出かけることも出來まいから今年はあきらめかも知れないけれど、それでも、行つてみたいねエ、ずゐぶん今まで僕も海ずきだつたが、このごろはどうも山がいゝやうだ、もつとも此處はうしろにかなりの山を背負つてるのだが、要するに海岸の草山だアネ、たゞ、竹の林や、樟の木立や、薪、炭に伐る雜木山などの赴きは一寸君に見せたいネ、それに到るところ蜜柑の畑で、いま夏蜜柑がき

れいに色づいてゐる、魚は豐富だ、近いうち、舟をかりて釣りに出てみたいと思つてる、鰺が釣れる時だ、

要するに面白くなくて、寧ろ、苦しくて、たまらない、たまに斯うした靜かな境地に來たので、いろいろ考へ出されるせゐもあるだらう、ともすれば絕望的になりかけて、自分の一生がバカ〳〵しくなりかけて、苦しい、泣くにもなかれぬといふあれだネ、こんな風ぢア僕はながいきは出來ない、

然し斯うしてだん〳〵人間になりつゝあるのかも知れない、さうも思ふ、さうして、また自分の淺薄なのに氣がついてくる、要するに、ちからが足りないのだ、

飲むといふほど、酒も飲まない、うんと飲んだら氣も晴れやうかと考へるが、可哀相に身體がわるい、因果なものさ、毎日二合づゝ晩酌を頂いておとなしくしてゐる、

けふはひどい風だ、山は明かに晴れて濤の音が恐しいやうだ、

何だかまただん〳〵さびしくなつて來た、

二月十四日午前十時半　　牧　水

中村兄

七

二月十四日、土肥、明治館より、東京、杉本寛一樣宛（繪葉書）

ありがたう、いま屆いた、どうもやつぱりうまいネ、暫く樂しめる、どうもありがたう、十日に松井君が來て二晩泊つて行つた、

何だか妙に氣がめいつてゐてまだ一枚もようかゝずにゐる、けふと思つてゐたが明日からいよ〳〵書きかけます、變りなし？

二月十四日午前十一時　　牧　水

八

二月十六日、伊豆國田方郡土肥村　明治館より、信濃、重田彌次郎樣宛（手紙）

君に手紙を書かねばならぬと思つてゐたところへ、

いままたお葉書到着、原稿も。

たいへん落ちついた起居らしいので、まことにうれしい、歌などを讀んでみてもそれがよくわかる、一時の重田君とはよほど變つたものだ、

歌は、佳い。漸く心持と、言葉と(歌ふといふこと〻)が或る一致を見出して來たやうだ、今までのは全く別々であつた、君自身にも痒いところへ手の屆くといふ快さを覺えてゐるに相違ないと思ふ。けれど、それはたゞ以前の君に比していふことで、まだ〳〵不消化を免れない、言葉全體に血がゆきわたつてゐない、從つて心持の半分も歌には出てゐないと思はれる、例へば、

ひとりゐをなぐさめかねて外に出れば空しき小田に風吹きにけりの、外に出れば、といふのもことわりすぎてゐる、弱くもなり(とに、でれば と二段に折れてゐる)乾きもしてゐる、出で來れば でたくさんだ、たくさんどころか、その方がよほどその出て來たところを強く表してゐる、むなしき小田も理(ことわ)りすぎ、且つ語をなさない、冬枯小田にとか冬田の原にとか幾らもあるだらう、風吹きにけりはもつともよくない、文法から云つてもこれは過去で、一寸吹いて通つたといふにすぎない、それはとにかくとして、調子(リズム)から云つて甚だいけない、空しき小田にまではいかにものびく〳〵と暢びて來てゐるが、そこへ來て、ひよいと吹きにけりとちひさくちんちくりんになつてゐていかにも滑稽だ、これは當然風わたるなりとか何とか現在で且つ強く暢びた言葉を使ふべきである。二、三といづれもさうした缺點をかなり多量に持つてるやうだ。けれど、以前とくらべれば別人のやうによくなつてゐる、そして第一君のいま居る心の境地が非常に澄んでゐるらしい、それが命だ。

歌は來月號に出しときます、來月號といつても三月は若しかすると休むかも知れないよ、こちらに來て或る單行本をかくつもりだつたのが、どうしても氣が乘らずけふで十日だがまだ少しも手をつけないでゐる、これが出來なくては印刷所との交渉がチトめんどうなのだ。

雉子を送つて貰へるのかね、そいつは難有い、でもこちらでは一寸困る、やはり東京に歸つてからにしてくれたまへ、急がなくともいゝから。

それからこの間のお手紙に名畫の版畫を云々とあつたが、版畫とはどんな意味だらう、エッチングか木版かゝネ、それとも寫眞銅版(白樺などの普通にある)のいゝのゝ意味か、また、一枚々々別になつてゐるのかスタヂオみたいに一册になつてゐるのか、もいちどくはしくきかしてくれたまへ、丸善にゆけばたいていあるだらう(右いふ寫眞版なら)と思ふが、今はやはり少したかいだらうよ。

僕は特にそれほど健康を害したでもないのだ、が、昨年の夏から急に駄目になつたネ、自分でもなさけない位ゐだ、ちやうどさうした時期に達したのだネ、苦笑しながら自分でもいろ〳〵考へるよ、そして斯うして獨りでなどゐると、だん〳〵心ぼそくなどなつて氣が滅入つてしかたがない。だもんだから何もせずに毎日ぼんやりして暮してしまふのだ。

こゝは海岸のさびしい、古い溫泉場だ、信州の山の中あたりのそれと似た程度だ、そのくせ近所にいゝ溫泉場があるし、海岸だしするから金は割にたかくとりやがる。たゞ、暖いのと、さかなのたべられるのがとりえだ、梅が眞さかりでネ、到るところに白々と咲いてゐる、蜜柑山が多いが、夏蜜柑橙の類はまだきれいにうれたまゝ枝にある、それと竹の林と薪や炭にする雜木林の山がもうほのかにつのぐんでゐるのと、それらが目をたのしませてくれる、また豫告だふれかも知れないが、今年の初夏に中房に行つてみたい、どうも僕いま山がいゝネ、もとは何でも海に限つたものだが、山の方がいまなつかしい、そちらの山に山櫻のさくころ、一寸でも行つてみたい、安くでゆけるだらうネ、どの位ゐだらう。中房の話をすればこの紀元節に柊花素山が女の連中を四五人集めて淺間で歌の會をやつたらしい、君は知らなかつたのか。君はまだ柊花君を知らなかつたのではなかつたかネ、知らなかつたら逢つときたまい、いゝ男だ、翠村と素山とをつきまぜた風な男だ。○○○○もそちらに歸つて行つた、この男は僕はきら

ひで困つた、それほどでもないのだらうがネ、とにかく女八分男二分といつた形だ。
いづれにせよ僕はまだ十日位ゐこちらにゐるつもりだ、たよりをくれたまへ、わりに速く郵便は屆くネ、君の方の消印が十四日の九時だが、こちらにけふの十二時についた、これはいつ行くか、どうしてもこちらからのは遲いだらう。若し東京に行くやうなことがあつても　出來るなら僕が歸つてからにしたまへ、一緒にいろ〳〵話したいし、芝居でも見ようよ。

二月十六日午後五時　　牧　水

重田兄

よりあひてますぐにたてる青竹の藪明けそめてうぐひすのなく　（封筒裏面に）

九

二月二十二日、土肥、吉村屋より、東京、杉本寛一樣宛（繪葉書）

要するに、何もしなかつた、二三日うちに歸ります、永いことお別れしてゐる樣におもふ、歸つたら馬力をかけますよ、
七八日前、宿をかへました、こゝはずつと海岸の安宿です、でも、たいへんきもちのいゝうちです、別れるとなるとなごりが惜しい、海にも山にも湯にも、
このころ一日ごしに大風です、けふはその吹く方の日、

牧　水

（繪葉書の畫面に）
しらしらと枝にさきみちうめの花かゝよふみれば明るくもあるか

一〇

二月二十三日、伊豆土肥より、長崎市、中村三郎樣宛（手紙）

すつかり默り込んでゐました、

身體が思ふやうにないのですか、かんしやくを起さずに養生して下さい、實際このころ私も健康といふことを思ひます、
何にもせずに完全にぼんやりして二十日近く暮しました、昨日から船を待つてゐるのですけれど、船が來ないのです、風で、荒れてゐます、午後けふ凪ぎました、明日は大丈夫でせう、
お歌、まだ拜見しません、こちらで選歌や大方の編輯をやるつもりでしたが、とても駄目と思つたので歸つてからやることにきめたのです、三月號も遲れませうが、いつかの八月號の樣なのをツナギに出しておいて、四月號からしつかりします、どうも、力足らずめんぼくありません、
歌さへ今度はよう作りませんでした、よく〳〵弱つてゐたものとみえます、歸つたらしやんとします、
齋藤君（註、茂吉）の面影が折々のおたよりを通してよくうかゞはれます、東京にゐないのだと思ふと、折々逢ひたくなります、元氣でせうね、よろしく〳〵おつしやつて下さい、みな仲間の人たちにもさうおつしやつて下さい、
君は、何はおき、身體に注意して下さい、だん〳〵暖くなるので、樂しみですネ、

二十三日　　牧　水

中村兄

一一

三月二十二日、巢鴨町一二五〇より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（手紙）

御無沙汰、申しわけなし、忙しいといふより矢張り氣が落ちつかないからと云ふ方が本當でせう、諸事萬端その狀態で苦しんでゐます、
越前君から四月に君の上京の由をきいて困るなアと思つてゐたところでした、四月の中、下旬に私は多分京都の方に行つてるだらうと思はれたからです、この一月に支社の大會をやりそれに出席する筈でしたが、よう行かなかつたので、今度は是非共行かなくてはならぬことになつてゐます、その留守に若し君が出て來るやうにでもなつたら甚だ困ると思つて

ゐたのです、六月、甚だ結構、これで安心しました、初めてお父さんになるゝことも結構です、私も、これはあまり結構でないが、この四月、第三集を出版します、とにかく六月を待ちます、ほんとにゆつくりしてゆくやうにして出ていらつしやい、眞實ゆつくりした氣持であそびませう、

三月號は休刊でした、四月號はどうにかして出します、茅野昌栖が死んだのでその追悼號のやうにする積りです、彼の死は、全く意外でした、

この二月中を殆ど一杯伊豆の小さな溫泉に行つてゐました、その時、例の百首を書くつもりで用意して行つてゐたのでしたが、そのやうな氣になる折がなくて、とう〳〵無爲のまゝに紙など持つて歸りました、いつか、さうした機會をねらつてゐますので、それを果す時があるでせう、待つてゝ下さい、

京都のついでに大阪をと思ひ、そのついでに岩城島をと思ふが、思ふだけでせう、せめて吉野にでも登つて來ようかと思つてゐます、旅でもしてゐる時が一番のんき（？）でせうか、

みな無事です、君の手紙の來るごとに「またあなたは御ぶさたしてるのでせう」とやられるので、恐縮です、御うちへもよろしくおつたへおき下さい、

三月二十二日　　牧　水

三浦敏夫兄

一二

三月三十日、巣鴨一二五〇より、府下大井町、和田山蘭樣宛（手紙

お葉書拜見、何も無いやうに見えて君の身邊にも矢張り斷えず何かあるらしいネ、お察しする、

高鹽君の時、同君は雨に濡れて生徒を連れて歩いてゐたせゐか腹をこはしてひどく悄氣てゐた、酒も飲めず、お互ひに殘念であつた、それでも第二夜（第一夜は十七日、七八人集つて上野の萬盛庵で飲み、その翌夜、同君と越前君と二人だけ僕の宅に集つて飲んだ）は意外に元氣で、三人とも悉くいゝ氣持になり、幾らも飲まないのにすつかり醉つて別れるの

が實につらかつた、その夜はほんとうに君のゐないのを悲しみ恨んだ、仕樣のない親爺だと言つたりした、第一夜は下らぬことから松井君と越前君と喧嘩を始め、松井君は中途で席を飛び出すといふ幕になり、珍客に對し面目なかつた、それから手紙で松井君は創作を退くといふ風のことを云つてよこしたりしてゐたが、兩君間の現狀は僕知らない、越前君は役所をよし（代りに弟を呼んで入れた）先日、種（タネ）とりに妙義に登つたりしてゐた、

歌が出來ない由、やはり氣がおちつかないのかネ、同感する、君の伊豆の方に送つてくれた歌などを見てもどうもまだ腹一杯の力がないやうに思ふ、臆病な上目づかひ（クハヘ）をしながら愚痴を言つてる樣にしか思はれない、拗ねたやうなところも見ゆる、そして、要するに底から押し上つてゐるといふ力を感じない、つまり、歌ふ感情が弱いから、生一本でないからだと思ふ、生活力が弱いからだと思ふ、昨今君は妙に惡がたくしやちこばつてはゐないのか、從來の自然な態度を忘れてゐるのではないか、若しそれだつたら悲しむべきことゝ思ふ、とりみだすといふことは、見ぐるしくもあり、非常な損失でもある。あらゆる場合に於て我等は我等の生活を生活してゆきたいものと思ふ、外面はとにかく、自分の性根だけはとり亂したくないものと思ふ、

茅野君には驚いた、あゝいふことがあるとすると、いよ〳〵ぼんやりしてゐられないネ、ひとごとには思はれなかつた、雜誌に追悼錄を添へた、四十頁あるから、かなりのものだ、來月の二日か三日には出來る、昨日まで校正だつた、

とにかく、しつかりしたまへ、くすぼるのはいけない、僕はなんだか一人合點か知らないけれど、心細くて仕樣がない、

今日あたり訪ねて行かうかともよほど考へたが、雜誌のあとで非常に疲れてゐるから、見合せる、そのうち逢ひませう、

三月三十日　　牧　水　生

山蘭兄

一三

四月三十日、東京府巣鴨町一二五〇より、信濃
重田彌次郎樣宛（手紙）

御無沙汰、失禮、
お手紙、ありがたう、君自身も喜んでの樣だが、そのよろこぶ君を見る僕等のよろこびもまた決して君に劣らなかつた、お互ひに東京で相見た記憶上、今度のが一等よかつたのは事實だ、一回々々とよくしてゆきたいものだ、東京に限らず、何處で逢ふ時でもさうしたいと思ふ、
旅行、この六日に東京を立つつもりだ、途中一二ケ所立寄り、京都へ行き、大阪奈良高野山と廻つて和歌山へ出、それから船で熊野の海岸をぶら〳〵と歩きたいと思つてゐる、それから鳥羽に出て、伊勢名古屋を經、木曾を溯つて信州に入る、どうしても來月廿五日ころにならうかなどゝ考へてゐる、そのころだつたら一番ゆつくりしてゐていゝ時なのだから出來るだけそこでゆつくりして旅のつかれを直したいものと希望してゐる、若しその畫會などが成効しさうだつたら幸だ、越前君が先日も來て見本風のものを書いたが、どんな樣子だらうか、
旅行はいまゝでにない緊張した氣持で自ら期待しつつあるが、多分期待通りに行き得るかと思はれる、さうだつたら實に幸福なのだが、また一面不安なところもある、
青葉の高野山（一週間位ゐ籠るつもり）、初夏の雲湧く熊野の海、空想だけは素的だがネ、どうかそれだけの緊張し滿足し切つたつらを持つて信州へ入り込みたいものだ、
お產はこの二十二日だつた、をんなの子サ、眞木子とつけた、
雜誌は二日には出來るだらう、
亂筆、御免なさい、
喜志からもよろしくとのことです、

四月三十日　若山牧水

重田行歌樣

一四

五月八日、東京驛より、京都市、雨森長三郎兄宛（手紙）

お葉書、ありがたう、
小生、今曉六時廿五分に東京驛を立ちます、同午後三時濱松着、九日午前十時八分同所發、同日午後六時四十分京都着の豫定です、少し身體がいけませんので、苦しくなればその間にまた一度位ゐ降りるかも知れませんが、大抵右の時間を狂はせないつもりです、なほ、濱松で乘車の際、電報（豐田君あて）を打ちます、若しまた途中下車の際は改めてまた打ちます、
恐れ入りますが、右、西内君藤井君にお傳へ下さいませんか、豐田君へはこの手紙と同時に葉書を出しておきます、
とにかく、お目にかゝれることになりました、この手紙と前後してゞす、

五月八日午前二時半　牧水

雨森兄
坂部兄

一五

五月十一日、京都市吉田町神樂坂、吉野館より、大阪市、大島武男樣宛（葉書）

お手紙、只今拜見、一昨夜當地着、明日支社の會合、それより東京より六月號選歌の原稿の到着（十四五日）するのを待つて比叡山に登り、五六日のうちにそれを片づけて、それから大阪の方へ參りたいと思つてゐます、で、どうしても二十日すぎ廿二三日頃かと思ひますが、その頃御都合よき日はありませんでせうか、若し、どうしても都合惡き樣ならばまた何とか方法を考へます故、御返事願ひ度う存じます、明日は午後六時より圓山公園內東端、あけぼの樓で歌會をひらきます、（竹尾君の上京で、宿のことで困つてゐるところです）

五月十一日　若山牧水

一六

五月十三日、京都市吉田町神樂坂、吉野館より、
大阪市、大島武男樣宛（葉書）

いつも大急ぎで、御めん下さい、
十五日に出ておいでになりませんか、丁度葵祭だ
さうです、御一緒に見物（參詣か）致しませう、朝
の九時に私の宿の近くから行列が出るといひますか
ら、出來たらそれまでにおいでになりませんか、お
出でになるやうでしたら折返し御返事下さい、お待
ち申してゐますから、
昨日、保津川下りをやりました、

五月十三日　若山牧水

一七

五月二十一日、叡山西塔本覺院より、京都市、
坂部廣吉樣宛（手紙）

坂部兄、
一昨日はどうでした、嘸ぞかし大變だつたでせう、
身體に障りはしませんでしたか、みんな無事だつた
でせうか、妙に氣になつてゐます、第二第三のナガ
サブロウ氏などが續出しては困りますから、
山寺は極めて無事です、でも、あの晩は流石に眠
りにくかつた、うと〳〵しては雨の音をきいてゐま
した、昨日はまたいろ〳〵のことにがつかりしたも
のか、何も出來ず、晝間から、頂いたものをちびち
びやつたりなどしてゐました、夜は例の爺さんと大
によろしくやりました、今朝は大丈夫の樣です、こ
とに天氣もよく晴れました、今日こそ一つうんと仕
事をします、
それから一つ御相談があるのですが、聞いて頂け
ないでせうか、昨日考へてみると、旅費が怪しくな
つてゐるのです、初めから怪しかつたのだが、京都
滯在中、矢張り何か彼か豫想外に使つてゐるのに氣
がつきました、この分では大阪奈良まではどうにか
行けさうですが、それからさきが頗るむつかしい、
出て來たほどですから、出來るなら高野山位ゐには
登つてゆきたいと思ふのです、たゞ廻るだけでいゝ

から熊野の方をもなどゝ考へてゐます、で、苦しい
あまりに考へついたのは短冊會の樣なものを作つて
頂いて十五圓か二十圓を製出するの方法はないだら
うか、といふことです、どうでせう、困難でせうか、
書くにはいくらでも書きますから、若し餘り苦しま
ずにそんな方法がつく樣でしたら一骨折願ひたいと
思ふのです、あなたのお考へでむつかしいとお思ひ
でしたら、これだけの話にしておいて下さい、若し
よささうでしたら雨森君、西内君たちにも相談して
みて下さい、社友のみを相手にするといふことはよ
くなからうかと思はれますから、自然他の方面へも
手を延ばさなくてはと思はれます、お忙しいのを知
りぬいてゐて甚だ相濟みませんが、とにかくお願ひ
致します、あまりたいしたことには考へずに下さい、
廿四日までには必ず京都へ歸ります、二十三日ま
でにと思つてゐますが、疲れてゐるかして仕事が甚
だ遲いのです、が、廿四日には雨でも歸ります、で
すから歌會をおやりになるやうでしたら廿四日夜に
願ひたいと思ひます、二十五日は大阪へ行かねばな
りません、
歸りは大原へ降りて寂光院を見て行きたいと思つ
たりしてゐます、
とりいそぎ、右、いろ〳〵申しました、

廿一日　山上にて　牧　水

坂部兄

一八

五月二十一日、叡山西塔本覺院より、大阪市、
大島武男樣宛（葉書）

先日失禮しました、十八日登山、廢寺然たる荒寺に
寺男のつんぼ爺さんと二人いま暮してゐます、二十
四日下山、廿五日大阪へ參るつもりです、尙ほ、下
山次第京都よりもお知らせ申します。大阪へ着いて
からどうすればいゝか、京都吉野館宛お知らせ置き
下さいませんか、
山にはまだ櫻が咲いてゐます、名も知れぬ鳥が老
杉古檜の間を無數に啼いてゐます、

二十一日朝　若山牧水

一九

五月二十三日、山城比叡山西塔本覺院より、名古屋市、尾崎久彌樣宛（葉書）

お葉書（十三日附）ありがたう、お言葉に甘え、君の方に御厄介になります、久しぶりに枕を並べ、さぞかし足下にあてられることゝ思ふが、精々勇氣を養ひ、以てこれに對抗せむことを期してゐる、明日山を下り、すぐ大阪に出る、それから奈良、それから高野山と考へてゐるが、もういつの間にやら金がなくなつてゐるので、これは怪しい、とにかく名古屋に出るのは來月に入つてだらうと思ふ、名古屋ではたゞ君や鷲野君夫妻にお目にかゝりさへすれば本望だと思つてゐます、鷲野君にも電話でなり、右の旨、おつたへおき下さい、

五六日前からこの山中に籠つてゐる、ずつと山の奥の院で、寺男と二人きりで暮して來た、面白かつた、

いづれまた、ゆつくりお話します、そちらに着く日時確定次第またお知らせします、

五月二十三日　若山牧水

二〇

六月一日、紀伊那賀郡東野上村石本君方より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

廿四日に叡山を降りてお手紙拜見、廿五日大阪へ、その夜住吉にて支社歌會、廿六日大阪歌壇元老會、廿七日同地一般歌壇歌會、廿八日奈良へ、そこの女高師の先生達の歌會、廿九日漸く獨りになつて初瀬まで落ち延び一泊、それから高野へ登るわけであつたが、どうも金が覺束なく、（實はそこから君の方へ電報を打たうと思つたのだが、あまり仰山にして君を驚かしてもよくないと思つたので、よしにした）見返り〳〵その麓をすぎて此處まで來てしまつた、今日夕方の汽船で熊野の勝浦といふのへ行く、そこから奈智瀧に登り、新宮に下り、また汽船で志摩の鳥羽まで行く、それから伊勢へ出て（山田で歌會）名古屋に赴く、

その間先日の、御禮も云ひたし、あとのことを賴む必要もあつたのだが、それこそ葉書を書く間もなかつた、右の順序の間にはちよい〳〵見物といふこともしておきたいし、二人二人訪問もしたいし、それを通じて常に座右を離れぬのは酒だ、今にして思ふ、よくあれで身體が續いたものだと、

金は、遲れながら云ふが、ありがたかつた、一體僕は幾ら貰へる勘定になつてゐるのだらう、その會の中の一分子としての僕なのだらうか、それでなくたゞ會よりの思召しとして幾らか送つて貰ふといふことになつてゐるのだらうか、其處がはつきりしてゐなかつたので、今少し賴みたく思ひながら、よう云ひ出さなかつた形もあるのだ、先日の手紙ではあとからも送れる樣に書いてあつたが、若し僕の貰ひ得る分といふのがあつたら此際都合して送つて貰へまいか、京都で矢張りつかひ過したので、先日送つて貰つた十圓は忽ちにして影を消したのだ、京都で友達に賴んで少し融通して貰ひ、辛うじて此處まで來たが、此處からもまた此處の友人（野上草夫といふのだ）を痛めて名古屋まで延びようと思つてゐる、で、名古屋の方に折返し送つておいて貰ふと難有い、君をいぢめて心苦しいが、惡しからず思つてくれたまへ、金のことは歳と共に段々云ひにくゝなつて困る、

名古屋のところは、（六日頃に着くことになるだらう）、

名古屋市東區熱田町字東町夜寒十一番地鷲野芳雄方だ、

この分では木曾川を溯ることが何だか大變心もとなくなつて來た、矢張豫期して來た樣な旅でなく、かなりごた〳〵した旅だつたので、隨分と疲れた、歸ればまた來月號の編輯とその金つくりとが待つてゐる、それを思ふと、うんざりするよ、

越前君はもう立つた樣に思ふが、どうだらう、若しゐたら別に手紙を書かないから君よりよろしく云つておいてくれたまへ、

氣の張つてるせゐか、元氣は割に元氣だ、自分ながら可笑しく思ふ、嘸ぞ、君の方でも飲みかたが

續いたことゝ思ふ、大丈夫かね、

六月一日　若山牧水

重田行歌樣

ア、越前君の歌はツイ送りそこねて（原稿全部をば叡山から送つておいたので、送つても間に合はなかつたらう）來月號にしたからと云つといてくれたまへ、

二一

六月一日、紀伊那賀郡東野上村野上君方より、名古屋市、尾崎久彌樣宛（手紙）

尾崎君、漸く此處まで來た、こんどは極く靜かな旅行をするつもりだつたのだが、矢張り駄目だつた、酒と群衆と喧噪との間にもまれてやつて來た、よくあれで身體が續いたものだと自分で感心してゐる、苦笑、自ら憐れむのほかない、

今日、船でこゝを立つ、こゝは和歌の浦から五六里のところだ、熊野の浦を巡つて、途中で勝浦に降り、この間、一晝夜かゝる、遠目にでも奈智を見て溫泉もあるといふから一晩位ゐ泊り、新宮に出て、それからまた船に乘る、鳥羽上陸、時間の都合で一泊、山田に一泊、（鷲野君の友達で中林といふ人がそこにゐる、）それから名古屋だ、

久しぶりで飛んだ賴みだが、君並びに鷲野君の骨折りで、僕の短册會とでもいふ風のものを起して貰へまいか、會といふと大きいが、實は路銀作りなのだ、三日間位ゐの豫定であつた京都へ二十日もゐたので、そこで既に大半をはたし、今度の旅行の眼目であつた高野登りをもとう〳〵遠慮せねばならぬ破目になつた、こゝから名古屋まではどうかして漕ぎつけるが、それからが危い、ナニ、それから東京までの汽車賃なら君を借り倒しもするが、餘りに身體が疲れてゐるので、東京に入る前何處ぞの溫泉で、四五日休んで行かうと思ふのだが、東京には留守の間の恐しい仕事が僕を待ち受けてゐるのだからネ、その必要があるのだ、で二十圓ほど欲しい、短册なり半折なり、かきすての原則に從つて書いてゆくから

一つ片肌ぬいでそれだけ集めてくれたまへ、たいへんな賴みだが賴む、鷲野君にも云ふべきだが、どうかするといま留守（丁度このころ出張する樣な手紙だつたから）かも知れぬと思ふので、君だけにこれを書く、君から鷲野君に委細傳へて呉れたまへ、

五六七日の頃には逢へるだらう、

實際疲れたネ、ろくに飯もよう食はぬ、

六月一日　若山牧水

尾崎楓水樣

二二

八月三十一日、東京巢鴨より、松本市、小里頼子樣宛（手紙）

御無沙汰、お許し下さい、お變りありませんか、私共は先月來子供に病まれて弱りました、私自身もひどく弱つてゐますので、どこぞ山の中へでも行つてゐたいと思ひますけれど、出來さうにありません、

雜誌は二日に出來ます、校正の時になり、どうも頁の都合が惡くて、折角組んであつたのですけれどあなたのとほか二人ほどのとを來號廻しといふことにしました、惡しからず思召し下さい、そして、これと共に新作を澤山（いつも數が少なすぎます、今少し多作なさい、いゝ季候で、出來ませう）送つて下さい、十月號でこんどの埋合せをしませう。

それからこれは別ですが「早稻田文學」十月號で歌壇の各社から二人づゝとか歌を集めて出すのださうです、私の社からはあなたと潮みどりとを推薦しておきましたので、この六日までに私の手に屆く樣歌をお送り下さい、その中から拔いて向ふへ送つておきます、その餘は「創作」のにします、もつともこちらはまだゆつくりでいゝけれど。

ほんとにいゝ季候になりましたネ、信州が思はれてなりません、一寸でも出かけたいと考へてゐます。

御近狀いかゞですか、岩淵君が何とかだといふ噂など聞きましたが、ほんたうですか。いろ〳〵御事多いことゝ思ひます、御自愛を祈ります。

文展でも開けたらあそびに出てらつしやいません

か、お目にかゝりたい。
喜志子からもよろしく申しました。

三十一日　　牧　水

賴子様

二三

八月三十一日、東京巢鴨より、信濃、宮坂古梁様宛（葉書）

ほんとに暫く！昨夜遅く印刷所から歸つて來てあの葉書を見た時には涙の出る樣な氣がした、この間の潮音の會で君に逢つたといふ岩淵の話を聞いた時もさうだつたが、とにかく、久しぶりに逢つてゆつくり話したいものだ、元氣かネ、僕さつぱり駄目だ、齡のせゐもあるだらうが、とにかく身體がすつかり役に立たなくなつた、だん〳〵いゝおぢさんになりかけて來た樣だ、殘星君にもよろしく。李花君はいつこちらに歸るだらう。

どうかすると、こつそり三四日出かけて行くかも知れないよ、

三十一日　　若山牧水

二四

九月十二日、東京府巢鴨町より、下野國、高鹽正庸樣宛（手紙）

高鹽君、御無沙汰してゐます、元氣ですか、奥樣はいかゞです、もうお產はお濟みですか、

先日はわざ〳〵お見舞を頂き、ありがたうございました、おかげさまで三人共どうにか取りとめはした樣ですが、まだよう起きません、何しろ病人がみなわけのわからぬ人たちですから實に困りました、子供がよくなると共にこんどはこちら夫婦が怪しくなつてゐます、

貴兄の歌が頁の都合で今月號に載らずに失禮しました、組み上げまでしたのですが、詠草の行數が狂つて貴兄のと北町品、津田汐汀君と三頁だけ來號廻しにせざるをえなくなりました、惡しからずおゆるし下さい、新しい詠草も來てゐる樣ですから來號はまた原稿を新たにして出しませう、十月號はまたみ

なよかつたでせう、どこでも評判になつてる樣です、一つ精出して作つて御らんなさい、自分の力に自分で觸れる、其處まで行かなくては嘘です、たゞ、ぼんやりで作つてゐるだけでは物足りないでせう、創作社の人たちもこれから何だかよくなる樣に思はれます、

これは別な話ですが、綾雄君は今でも日光ですか、よくわかりませんけれど、出來たら今月の末から日光の方へ行つて見たいと考へてゐるのです、それには綾雄君がおゐでると甚だありがたいがと考へてゐるのです、名ばかりでまだ行つてみたことがありませんから普通よりやゝ丁寧に瀧なども見て廻りたいと思つてゐます、樣子をお聞かせ下さいませんか、

尙ほ、出來るなら日光から戰場が原湯本を經て上州の利根川の上流へ出たいなどゝ考へてゐます、秋のころになるとどうも私は溪が戀しくていけません、溪のことを思ふと心が痛みます、

釣はいかゞでせう、夕方など、あなたがあの川畔を釣竿さげて通つてゐられる幻などを、時々思ひ浮べることがあります、そろ〳〵山も川べりもよくなりませう、

御家族、みな御壯健ですか、日光に行く樣になればお父さまたちにお目にかゝりに一寸でもお訪ねしたいなどゝ考へてゐます、よろしく〳〵申しあげて下さい、

妻からもよろしく申しました、

九月十三日正午　　牧　水

高鹽兄

二五

九月十四日、巢鴨町一二五〇より、松本市、小里賴子様宛（手紙）

お手紙ありがたう、斯うしてお手紙など讀んでゐますとお目にかゝつてゐる樣で、嬉しく思ひます、一昨々日、北海道から小包着、お名前を見て不審に思ひましたが、多分さうだらうとお手紙にある通りのことに想像をつけて、遠慮なく早速いたゞいたのでした、まことにありがたうございました、ぢかに

頂いたのより、尙ほ一層ありがたい思ひが致します、お父様へもくれ〳〵よろしく申しあげて下さいまし、よきお父様、よきお父様、おふたりの間のことなどまで思はれて嬉しうございました、

九月號は偶然みな揃つてゐた樣でした、中でも兩中村君のが目立つてゐはしませんでしたか、あなたのと高鹽君のとを除いたのは今以て殘念です、詠草の行數の數へ違ひから後の方になつてどうでも三頁けづらねばならぬことになりあなたたちお二人はこの頃毎月續いてゐたし、他の一頁は菊池君の三頁の一頁を略いて間に合せたのでした、が、あなたのはいつもより幾らか氣の拔けたところがあつた樣ですネ、强ひてお作りになるのはいけないかも知れない、ともすればあなたのは才が勝ちすぎる傾向がありますから作ればいくらでも作れませうし、また、みな相當に出來ませうが、それは要するに嘘の作となりがちです、あとで見て口惜しい思ひのするのが常です、作つてしまへばなか〳〵捨てられないものだから矢張り作る初めに心する外ありません、歌の調子の張つてゐること、調子の齒切れのいゝこと、自由なこと、等に於て社中いまあなたの上に出る者はありません、みな驚異の眼で熟視してゐます、自重して進んで下さい、女流作家は振り出しはみな花々しいが、或る程度に達するといづれもまたみじめな最後をとめてゐます、晶子さんほどの人でも一生を通じての作からサテどれだけの質を拾ひ得るかは極めて疑問でせう、みな上すべり、空疎に流れがち、不當の思ひあがり、才氣一方でその場をきりぬける、といふ樣な缺點から來るらしいのです。外にのみ向つて注意が向けられる、內に心を集める心がけが足りない、心を大きく持てない、さうしたことからしく思はれます。お世辭でなくあなたには、その分子が甚だ少く（無いとはいはない）思はれます、そして、一帶が大きい、いはゞ一寸つかみどころのない樣なところをお持ちの樣に思はれます、私はそれを甚だたのみに思つてゐます、小さいことで喜憂せず氣を長く大きく持つて、御自身持つておゐでる力をば殘りなく出しておしまひになるだけの覺悟をお持

ちになりませんか、自分の力に自分で儸れる、これより心ゆく事は他にない樣に私は思つてゐます、

妙に說敎くさくなりました、一度申しあげたいと思つてゐたことですから、とにかく申しあげてみました、

今月號の校正でも濟ませたならば何處ぞ山奧の溪間でも歩いてみたいと考へてゐます、多分行くとすれば上州の奧でせう、そのついでに信州にも廻つてみたいと思つてゐますが、若しさうなる樣でしたらお訪ね致します、

子供がまだわるく、私もそこ此處と身體が冴えずに弱つてゐます、積惡の酬いで止むをえません、このごろ、大に用心してゐます、いま、酒をやめないと十年生きない相ですが、まるきりやめることだけはまだ出來ません、いづれはさうなるでせうが、

十月號へはゆつくりでようございます、十八九日頃までに屆く樣、お送り下さい、出來ましたか、飛び立つ樣なのをたくさんお見せ下さい、

私は來月號も駄目らしい、頭が（過勞なのでせう）馬鹿になつてゐるのです、旅でもしたらよくなるでせう、私などは商賣品の樣な形でツイ濫作せねばならぬ場合があり、今まで平氣でやつてましたが、このころそれが苦しくなりました、これからは漸く腰をすゑて自分の作にかゝることが出來るかと思はれ出しました、燃え立たぬ愉快を覺えてゐます、

御自愛をいのります、

十三日　　牧水

賴子樣

二六

十月十五日、東京府巢鴨より、大阪市、大島武男樣宛（葉書）

御無沙汰してゐます、昨日はまた見ごとなものを、ありがたうございました、しかも彼の山からと思ふと添へられた裏白の葉さへなつかしうございました、厚く御禮申します、

どうしておゐでゞす、御元氣ですか、お歌もこのごろ來ないので淋しい、毎月少しづゝでもおよこしな

さい、來月號のは二十日ころまでゞ結構です、お送りなさい、山崎君はどうしてゐます、

身體が思はしくないので、淋しくていけません、いやーな天氣ばかり續くのも苦しいことです、

十月十五日　若山牧水

二七

十一月廿一日、車中より、信州、宮坂古梁樣宛

（葉書）

死ぬやうな思ひをして草津鐵道にて五時四十分輕井澤着、七時十八分同驛發のこの汽車で小諸までのつもりで乘つたところ、輕井澤で飲んだのがきいてすつかりねこみ、いま眼をさませば田中なり、あきらめてこのまゝ篠の井の方へゆきます、明後日はお目にかゝれるでせう、

廿一日夜　牧水

二八

十一月廿八日、鹽尻の奧田川浦鑛泉より、松本市、小里頼子樣宛（手紙）

頼子さん、お手紙を書くに今少し落ちついた氣持をと欲しますけれど、さうしてゐるとまたそのまゝになつてしまひます、とにかくいま思つてゐることだけを筆にしておきます、

お目にかゝれて誠に幸福でした、あんなに多勢の人でしたが、いま私の心の裡にあるのは誇張でなくあなた一人の樣に思はれます、何一言お話もしませず、しかもあゝした亂暴な狀態に於てお目にかゝつておきながら、正直のところ、私は後悔より滿足を恥羞より幸福を感じてゐます、少しあつかましい樣ですけれど、まつたくさうなのです、ほんとにようお目にかゝりました、

そして、いまあなたを思ふと、いかにも遠い遙かなところにおゐでるやうで、云ひ難い寂しい思ひがします、單にお別れした後の哀感といふよりは今少し複雜な、卒直に云へばおいたはしい人をそのまゝに置いて來たといふやうな感じです、お怒りにならずに下さい、恰好な言葉が見當らないからです、お

目にかゝると同時にあなたといふものがよく解つたやうなよろこびを覺えて、そしていまそれらのことを思ふと何とも云へず寂しい心地がするのです、人間同志の悲しみとでも云へば云へるかも知れません、私はまつたく久しぶりに斯うした感情を身に感じました、

私に自愛するやうにといふ梧さんあての御傳言を面目なくも嬉しく頂きました、（あのお手紙を見せて貰つた時、私はまつたく顏をそむけずにはようゐませんでした、）充分にそのつもりをばしてゐながら、やはり人間が弱いからなのでせう、ツイ〳〵あゝして埒を外してしまひます、然し、あれは全く近來では稀なことでした、皆無とはいけますまいが、今後漸次にあれらを愼みます、

あなたにも御自愛を祈ります、私のは最もあはれな自愛、あなたのは最も尊い自愛です、それを思ふとまつたく一種の嫉妬を感じます、それだけに私に見せてやるつもりで御自重を祈ります、

阿父樣にも折があつたらお目にかゝつて來たいと思つてゐましたが、やはり駄目でした、歸りにいたゞきましたものに書いてあつた文字も多分阿父樣のだらうと思ひました、そして、斯うした御父子を云ふやうなくお親しく存じました、お妹さんもさぞびつくりなすつたことゝ思ひます、おわびしといて下さいまし、弟さんも來てゐて下すつてしたのださうですネ、あとで久美子さんにきゝました、そしてあの時、おいでゞなくてよかつたと思ひました、

これは、云つてよいことかわるいことかと思ひますが、あなたのことについて〇〇君からよく聞きます、若しそのことについて私に出來るやうな用事がありましたら何でも致します、御心置なくおつしやつて下さい、今度同君が來れば（來ることになつてゐたのです）三人していろ〳〵お話したいと思つてゐたのでした、さし出がましいことですが、私の方からたゞ口だけ切つておきます、

私は矢張り酒のために少し身體を痛め、こゝに來てゐます、近所の人すら名を知らないやうな鹽尻か

ら二里近い澤合の小さな一軒だちの鑛泉場ですが、痔によく利くといひます、
多分明後日は東京につきます、

亂筆御免下さい
十一月廿八日午後　　若山牧水
小里頼子様

二九

十二月二十日、東京府巣鴨町より、市外大井町、和田山蘭様宛（手紙）

失禮しました先夜は、
あれから無事？
あの時に相談したいと思つたけれど、一寸場合が場合だつたので默つてゐたのだが、
今度新年號で創作社基金募集といふことをやる旨發表しておいた、それには事後承諾を得るつもりで君と菊池君の名をも借用しておいたのです、怒らずに下さい、その要領は一つの會を立てゝ會の名を百幅會と呼び、君、菊池君、小生の三人が一枚づつ半折に歌をかいて三枚で一組にして一組五圓で賣るといふのです、そして數を百口に限つたのです、一時に五圓はむつかしからうと思つたので、月賦のやうにして、向ふ十ケ月で拂ひこむことにしておきました、で、その拂ひ込み殘りが先づ百圓は出るとみねばなりません、（百口出來たとして）そして紙を僕が買つて君たちへ持つて行つて、百口纏つたところでホンの一杯代として三十圓づつ兩君にさし上げたいと思ふのです、そして、その他の金を印刷費の補助（實は少し穴を埋める必要もあるのです、新年號は大きいし）として取つておきたいと思ふのです、少々蟲のい、話の樣にも思ふが、いろ〳〵の點で此際切にその必要を感じたので、それには新年號に發表するがよいと思ひ、惶しく君たちの承諾をも得ないで印刷にしてしまひました、「詩歌」のつぶれたことなど、全く用心をさゝやいてくれました、
どうでせう、承知してくれませんか、雜誌の校正が廿四五日にはすみませうからさうしたら紙を持つて

君の方へ出かけます、寒休みに一つ習字でもするつもりで書いてくれませんか、百口は少々困難かとも思ふが、幾らか出來ませう、出來なければずつと今後繼續してやつてゆきます、百口になるまで、
若し不承知でしたら明日から三日間本所の印刷所へ行つてゐますのでその旨電話をかけてくれませんか、印刷に附するまでに訂正しますから、電話番號は本所二四四と二四五の二つです、
それからこれも繼續事業として創作社叢書として各同人の歌集を順次に發行したいと思ひます、これについてはまた親しく御相談します、
君は一體いつから休みになるか知ら、
とりあへず右用件のみ大急ぎで（實際忙しい、このごろ僕は毎日四時間か五時間かしか眠らない）申しました、お手紙か、電話かで至急御返事ねがひます、
頭が少し變になつてゐるので、亂筆御めん下さい、

二十日朝　　若山牧水
和田山蘭様

大正八年

一

一月十日、巣鴨町より、日向、平賀財藏樣宛
（手紙）

一日發のお葉書、いま屆いた、君の時々の葉書を斯うして見てゐると僕にはさながらの詩を見てゐる樣な氣がする、文句や書かれた場所動機の如何に係らず、いつもそれを見るごとにほんとうの詩を讀んだあとに感ずる「人生の寂寥」を感ぜぬことはない、そしてその暫くは僕自身も實に寂しい靜かな氣になつてゐる、ありがたいことに思ふ、

元日は僕も朝だけうちにゐて早く飛び出し犬吠崎に行つた、そして三晩泊つて來た、つれがあつたので考へてゐたほど靜かな三日ではなかつたが、それでも自宅にゐるよりよかつたらう、今度君が來たら一緒に何處か行かうか、いゝ場所を考へて置かう、伊豆か甲州あたりにいゝところがありさうだ、

「創作」は二十九日に送り出したんだが、まだ屆かなかつたか知ら、今年は少し眞劍に雜誌の方にも力を出して見たいと思つてゐる、同人の叢書も出したい、丁度君のもその時期に來たことになる、具體的に今度こそ調べて見るよ、百幅會に一口入つてくれたまへ、百に滿たないと第一見つともない、一向にまだ反應がないのだよ、この金には手をつけないで別口に積んで置く氣でゐる、つまり恒心の種だ、

前田君の「詩歌」がつぶれたよ、思ひ切つたことをよくやつたものだとも思ひ、ずるい男だとも思ふ、然し、その事を前として自分の雜誌のことを考へるといろ〳〵改めて考へらるゝことが多い、

「短歌雜誌」に〇〇君のことを小說として書いてみた、初め書く樣に尾山に約束して、旅行が長引いたため時日がなくなり、それをとり消したけれど、とう〳〵急かれて書いたのだ、二夜ほどで書いた、急いだため（ばかりでもなからうが）書く氣持が落ちつかず自分の書かうと思つたところが殆ど出ることなしに仕舞つた、いかにも殘念である、少しひまを見て書き直すつもりだ、見たかネ、出來るならそちらで見てほしくない、モデル問題など恐いからネ、

東京で見てくれたまへ、

「とねりこ」を見たいといふことだつたネ、いま探して送らう、

二十日ころにほんとに來られるか知ら、出來るならやつて來たまへ、今度はこちらで飲むことをよして兩人して何處かへ出かけよう、今年あたりから眞實に、ほんとうに眞實に「自分の日」を持つことに努めたいと思ふ、まつたく餘日なきを思はずには居られない、問題が段々現實的になつて來た、

僕のひまなのは二十五六日からさきだ、

一月十日　　牧　水

春　郊　兄

喜志からも吳々よろしくとのこと、（卷紙の始めに追記）

二

一月廿日、東京府巣鴨町より、岩手縣、福地房志樣宛（手紙）

川魚を送つたからといふおたよりを頂いたのはもう二週間も前の樣に思ひます、それから一二度郵便局にも注意したのですが一向要領を得ず、內心もう諦めてゐたのでした、ところへ寧ろ突然に一昨日持つて參りました、急いで開いてみますと、々々匂ひがついてゐましたがまだ結構たべられますので、早速火を入れて煮込みました、昨日一日じり〳〵と煮て、今日の晚酌に戴くつもりです、誠にありがたうございました、いつも斯うしてお心にかけられていろ〳〵お送り下さるのにお禮もろく〳〵よう云はず、誠に面目ありません、この前澤山お送り下さつた林檎は恰度それまで私の宅に來てゐました姪が鄕里へ歸る時でしたのでいたゞいたまゝそつくり彼女へ托して鄕里の母へ送りました、日向には全然あの果實がないのですから非常に喜んださうです、これも遲れながらお禮申します、

「創作」がゆかない相ですネ、まだでせうか、今度は方々で途中遲延や紛失やあつた樣ですが、君の方のもどうか遲延であつてくれゝばいゝがと思つてゐ

ます、折惡しくこちらにもいま一部もなくなつてゐますので、紛失でしたら來月初め書店から返品のあり次第お送りします、

雪はいかゞです、雪の消えかゝるころでも一晩泊り位ゐにお宅を訪ねたいと毎年思ふのですが、一體いつころ解けませう、そして行くとすれば汽車からはどうなるのです、おついでの時、お知らせ下さいませんか、

創作社も今年あたりから少しづゝよくなる樣子です、ほんとにおかげさまでした、同人叢書も發行します、

御病氣の樣子をお歌で見て今更ら驚きました、もう大丈夫なのでせう、小生たちも元氣です、

妻よりも呉々よろしく申し出ました、

とりあへず右まで

一月廿日　　牧水生

房志樣

及川胡月君へもよろしくお傳へおき下さい、

三

一月二十一日、東京府巣鴨町一二五〇より、信州、中村柊花樣宛（手紙）

中村君、

十二日には、それでも、若しや出て來られる樣になりはせぬかと餘程心待ちに待つた、重田君は風邪、山口君は途中で他へそれ、偶然東京に來合せた上伊奈の日野霞外君だけが唯一の信州人といふわけであつた、よせがきを送つたから他の面ぶれは解つてゐることゝ思ふ、人數の少い割には面白い會であつた、

此處に緊急を要する問題がある、新年號にも一寸書いておいた創作社叢書としての同人の歌集出版の事だ、種々協議した末、兎に角遂行することに決定した、この三月になれば僕に金を貸して呉れるといふ人もあるのだが、幸ひ加藤君は全部自費で自分のを出版しようとしてゐた所であつたのでそれを先づ手初めに出版することにした、最初七册だけを第一

期發行としてそれを來年の秋までに出し終りたい、それは「加藤東籬集」（すべて名前の集にする）から順次に、山蘭、背山、牧水、野菊、柊花、喜志子、といふことになつてゐる、歌は八百首内外、型は四六版、製本は質素を旨とするが、氣持のいゝものを作りたいと念じて居る、で、第一篇をばどうかして三月一日までに作りあげたいと急いで居る、寢耳に水で、驚くであらうが、早速君にもその準備にかゝつて貰ひたい、歌の配列の順序は舊いのを初めにして新しいのを後にする樣にしたい、

永年の希望が實現せられるので、非常にいま僕は喜んでゐる、實は少々冒險事業ではあるが、そろ〳〵機運が動いて來てゐるとも感じ、これまでの業跡から云つて少し位ゐの冒險をば敢てするに足るだけのものがある樣にも思はれ、寧ろ突然にこの擧に出でたのである、來月號に右七册だけの廣告を堂々と出すことにした、その廣告用として君の年齢、生地、職名を詳かに知りたいと思ふ、右の七册の順序は（喜志は別として）大抵年齢の順序のつもりであるのだ、

多分君も喜んで呉れると思ふ、金の事を考へるかも知れないが、百方手を盡して君たちには一文をも出さしめない、二百部を賣りさへすればそれが立派に成立してゆくのだ、で、君自身の分をば君自身に出來るだけ賣りひろげろ覺悟をば持つてゐてくれたまへ、（單にこの事をばわれらの内輪だけの事業とせず、正に天下の事業として行ひたいので、出來るだけ廣告（新聞には手が及ぶまいが）をもする、手紙にも刷つて千二百枚（創作社の社友には往復ハガキ）ほど出すことにしてある、かなり大仕掛の仕事なのだ）然し、あまりに突然なので、とにかく君の返事を得る必要があると思ひ、あわてゝこの手紙を書いたのである、至急返事を呉れたまへ、それと共に右廣告用云々のことをも知らしてくれたまへ、實はもう文言も出來て印刷所へ渡してあるのだが、間違つてゐてはいけないから訊き合はすのだ、そして、それを以て校正の時に（誤つてゐたら）改めたい、簡單でいゝからこれだけでも大至急に賴む、

創作社もどうやら芽が出て來るらしい、何だかそんな氣がする、これを幸ひにうんと勉强してみたいものだ、君の心持は昨今どんな風だネ、年齢の關係などから妙に焦燥し、迷惑する時代らしいが、多少そんな所がありはせぬか、然し人間の心持が幾つにも分れてゐるといふことは誠に不幸なことの樣に思ふ、若しさうであつたら努めて統一せられむことを祈る、

百幅會には是非二口か三口入つて貰ひたいと思つてゐる、いま四十餘口出來た、三月號までには一杯にしたいと思つてゐる、三口は少し多すぎるか、二口で結構だ、これも折返し何とか云つてくれたまへ、二月號に發表する必要があるのだ、創作社に大枚な金を貸さうといふ人が居るのださうだ、僕は直接には知らない、が、それが三月にならねばわからぬといふ、それが確かなら何も百幅會でもないのだが、先づ雲をつかむより土を掴むの必要を思つて斯うしたのだ、これも案外に成績はいゝ方である、

いろ〳〵書きたいが、急ぐから當用に留めておく、折返し御返事待つ、

一月二十一日朝　　牧水

中村端兄

四

一月二十二日、東京府巢鴨町天神山より、下野國、高鹽背山樣宛（手紙）

先日はわざ〳〵お忙しいのに來て頂いて誠にありがたうございました、お蔭で何となく大會といふ氣分がしました、誰も來なかつたので、ことに難有く思ひました、お仕事にさし支へはしなかつたでせうか、あとで氣になつてゐました、お別れの日はあつけないことでした、とんでもない幕をお目にかけ恐惶千萬です、但し、折々あること〻御察し下さい、あれから若しやと思つてあきらめかねてこつそり行つてみました、いつかお話した喜連川人種のゐる店です、何だかたいへん哀愁情緒か何かになつて獨りで長いこと飲んでゐました、「どうなすつたのです、〳〵」と諸君がしきりに不思議がつてゐました、

よほど變調子だつたのでせう、いま考へれば苦笑です、然し、思ひ出すとまた少々殘念さが感ぜられます、

歌集出版のこと、少々瓢簞から何やら出た形がありますが、愈々左の如くきまりました、

第一編　加藤東籬集　第二編　和田山蘭集
第三編　高鹽背山集　第四編　續若山牧水集
第五編　菊池野菊集　第六編　中村柊花集
第七編　若山喜志子集

これだけを第一期出版とし、出來たら隔月、でなくとも三月ごしに一冊づゝ出してゆきたく思ひます、そして第一編をばこの三月一日に出さうといふのです、昨日印刷所をもきめて來ました、隨分何處も高くて困りました、三百部刷つて一冊が四十七八錢かゝります、その他に各冊に廣告費を四五十圓かけます、で、三百部のうち五十を新刊紹介とし、あと二百五十を八十錢位ゐづつに賣つて收支償ふといふことにしたいと思ふのです、こちらで賣るのは充分に手をつくします、そしてその上、各著者で出來るだけの數を引き受けて貰ひたいと思ひます、今から多少その用意をしておいて下さいませんか、內輪の爲事ながらかなり大仕掛にやつてみるつもりです、廣告その他にも隨分と手をつくします、

出版費は今のところまだ漠たるものなのです、第一編だけは加藤君が初め自費で出す筈でゐたのですから、その出版費を一時私が借りるといふことにして兎に角に三月中には出します、あとは例の百幅會ですが、第二編の頃までには幾らか集りはせぬかと思はれます、其處でまた（因果なことに）頭に上つて來るのは例の「三千圓」ですが、このことについてはいま私からは何にも申しません、一にあなたにお任せ申しておきます、それが出來たらどんなに仕合せだらうとは思つてゐます、やりかた一つでは各冊三百部以上を賣り出す樣なことにならぬとも限りません、そのつもりで各冊十圓ばかりを棄てゝ紙型を取つておきます、さうすれば儲かるわけなのです、どうかしてさうしたいと思つてゐます、とにかく、儲かる話はあとゝしてやりかけたこと故、やり

遂げずにはおきません、

話はあなたゞけのことになります、今からすぐ原稿整理にかゝつて下さい、いつぞやお預りしておいたのを一應またお手許へお返ししませうか、その後のは纏つてゐませうかどうでせう、一人八百首づつといふことにしてあります、（集の體裁なども申しあげたいが、とにかく第一編がもう出ます、それにより御承知下さる方が確實です）考へて見ると唯だの浮氣の爲事ではありません、まつたく各自一生の何分の何かの大きな爲事だと思はれます、愼重に御處理を願ひます、

この叢書刊行の結果、個人的にまた社會的に、のことを考へるとなか〳〵に興味があります、とにかくに創作社も漸く目鼻があいて來る樣ではありませんか、ずつと昔詠んだ歌に、

かにかくにわれの歩みは遲きなりさなりたゆまずあゆもと思へ

といふのがあります、私は今後もずつとこのつもりで遲い歩みを續けて行く氣でゐます、これはあなたにも同感のあること、思ひます、實際私などはこのころになつて漸く自分の生涯といふもの歌といふものが幾らかづつ解つて來た樣に思はれます、そして段々歌といふものがありがたくなつて來ました、ありがたいことです、どうかして、この調子で今迄のあるかないかの生活をして來た償ひをしたいと思つてゐます、人生五十といふ、短い樣でもあり、考へ樣ひとつでは極めて悠々たるものでもある樣です、人間の生き樣は實に種々ある、そのうちの最もよき生き樣をすることが我等の神さまに對する報謝だと思ひます、

二月號の原稿の半分を昨日印刷所へ渡して來ました、早いでせう、この分では二十八九日に出來るわけですが、叢書の廣告を出すために少々遲れませう、あなたの原稿、昨夕屆きました、少し苦しいが、どうかして二月號に入れておきたいと思ひます、此頃にない出來の樣に思ひます、鴨と雨の歌がとりわけてもすぐれてゐますネ、難有うございました、

原稿を印刷所に渡したあとはいつもい、氣持に

なりますが、今日がそれです、で、こんな手紙など書きました、

一月二十二日　若山牧水

高鹽背山兄

五

二月十六日、東京府巣鴨町一二五〇より、京都市、藤井草宣樣宛（手紙）

藤井君、どうもたいへん御無沙汰してゐます、濟まぬと思ふと共に自分ながらひどく齒がゆく思ひながら、やはりその「時」がないのだ、これは私の生活法がいけないのだと思ふ、もう半年、或は一年もしたらこれを改めてゆけるかと思つてゐます、

いつぞやのお手紙と散文「…居住者に與ふ」あれのことを先づ書きます、あれは大體に於て君の誤解に基くと思ふ、和田君にせよ菊池君にせよ、君の想ふがごとき人物とはまるで反對の性格を持つた人たちであるのだ、唯だ彼等は私以上に無知である、前后を見廻すといふ極く簡單な自省をもしない（菊池君はさうでもないが）人たちなのだ、そして極めて言葉通りのい、氣持になつてものを云つてゐるのである、彼等の言葉はそこに何等の底を持つてゐない、

さういふ人であると知つてゐてさういふ人のやうに取扱はなかつた私の不注意は、あのお手紙でよく胸にこたへた、それで、あれからあの合評をばやめにした、その代りにお互ひに今少し了解（歌に對する）を深むるためにもと毎月互評會といふのをひらくことにした、まだ一回しかやらないが、效果がありさうに思ふ、雜誌に發表せぬ部の雜談の方が多くは根本論で、この方が主となつてゐるのだ、けふその第二回をひらくことになつてゐる、

君のみならずそれに似た考へを持つてゐる人が少くないだらうと氣のついた時、私はその双方に對してたいへんに濟まぬ、氣の毒な氣がした、それを知つたお禮を君にすぐ云ふつもりでゐて、遲れてゐたのです、ほんとにありがたかつた、

いつかこちらの人たちに逢つてくれるとい、と思

ふ、みな、それこそ子供みたいな人たちのみなのだ、いづれその機會がありさうにも思ふ、

けふお葉書ありがたう、その充實した君の昨今を想像して、非常に愉快であつた、急ぐことはない、靜かに歩みを進めたまへ、ありがたいことだ、

いま二三ケ月は駄目だが、これからそろ〳〵また私も勉强する、樂しく勉强する、さうした資格がだん〳〵に自分ながら見えて來た、私はまだ自分のどれほどの力をも出してゐないことを知つて、悔と羞と勇氣とを覺えてゐる、ごた〳〵した中にあつて、そんな事を思ふと、焦燥と共に一種の沈靜を感ずるのだ、

「創作」もおかげで、次第に景氣がよくなつてゆく樣である、社友も六百出來たし、歌も眼に見えぬ程度ではあるが一體に進みつゝある、牛の樣な無知と力とを持つて動いて居る樣に思ふ、この調子はわるくないではなからうか、

歌集叢書、少し亂暴だが、思ひ切つて手をつけてみた、すまないが、機會のあるごとに一册づゝ買つて貰ふ樣に皆にすゝめてくれたまへ、一種を二百五十部賣れば損をせぬのである、（二册目山蘭、三册目に私のを出す）實をいふとどれにもそれだけの（一册にするだけの）重みはないと思ふ、けれどそれを片づけてしまふとあとでまたどうにか皆考へはせぬかと思ふのだ、どうかして企畫通りに事を進めて行きます、

まだ書きたかつたが、もう人が來た（互評會の）とにかくこれだけ出しておきます、無沙汰をしてゐても心には數通の手紙を常に書いてゐることを君の心にも置いておいてくれたまへ、

風邪は？　細君も樂しく健けきや？

十六日正午すぎ　　牧　水

藤井草宣兄

四月號に三頁位ゐの（ポイント二十八字詰）感想を書いてみませんか、

六

四月十日、巢鴨町一二五〇より、京都市、雨森長三郎兄宛（葉書）

御無沙汰してゐます、をり〳〵おたよりは、ありがたうございます、あゝいふのを見るごとに、お逢ひしてゐる樣な氣になりながら、なか〳〵筆をばようとらないのです、お變りなく、結構です、小生も身體は達者です、然し、この一二ケ月まるでバカみたいになつてぼかーんとしながらくらしてゐます、先日、比えいにお登りでしたネ、またそろ〳〵あの頃になりますねエ、皆々諸君に君よりよろしくお傳へ下さい、

歌會の歌

うつゝにもゆめにもあれや眞さびしきくるしき夢をいま見たりけり

四月十日　　若山牧水

七

四月十五日、上州磯部より、東京、中村三郎兄宛（繪葉書）

留守中、いろ〳〵御厄介でせう、

こちらはまだ櫻が咲いてゐます、しかも暖くて、河鹿がしきりになきます、

ぼんやりと、たゞ、ぼんやりとしてゐます、

四月十五日　　牧　水

八

六月四日、山上湖畔より、東京、中村三郎樣宛（繪葉書）

本人の方が多分さきにお目にかゝるでせうが、とにかく。

赤城だとかなり路が困難だときいたので、藥を飲み〳〵の身には（前橋についた夜から風邪）危險だと思ひ、そこをあと廻しにしてこゝへ來ました、三里ほど濶葉樹林、一里あまりが松や落葉樹の植林地帶、あと一里餘が意外な廣い荒れた原でした、表の寫眞がその一部です、それを出端れると湖が見えま

した、念つて來た鳥がしきりに啼くのでありがたく思つてゐます、筒鳥、郭公、杜鵑など、今朝も湖の向ふでないてゐます、

六月四日　　牧　水

みづうみのかなたの原に啼きすます郭公の聲ゆふぐれ聞ゆ（繪葉書畫面に）

九

六月四日、伊香保より、前橋市、山崎斌樣宛（葉書）

一金六圓八拾錢也
御一泊料ほか
マサ三本　ビール一本代！

恐惶頓首

尻に帆かけて下山の圖也

風邪ひいて何のおのれがいかほかな
ウソダアイ、おくすりがアラアーイー

四日ヒル　　風の神

一〇

六月五日、東京市外巣鴨町一二五〇番地より、市外大井町、和田山蘭樣宛（手紙）

先夜失禮、然し、偶然にしては割にいゝ會合であつたとおもふ、

たゞ、僕の殘念に思つたのは、僕の意中を充分にあの夜云ひ表はすことの出來なかつたことで、妙にわざとらしく誇張したり、おだてたり、徒らに外面的な野心を唆つたりした風にとられはしなかつたか知らといまだに氣になつてをる、眞意は其處ではなく極く生眞面目な內心問題であつたのだ、妙にだれてゆき疲れてゆき遲れ殘されてゆきぐれてゆきすねて行かうとする樣な傾向が少しでもあつては困るといふこと、若しさういふことに少しでも氣づいたらお互ひ協力してそこから脫すること、さういふ目的のために雜誌を善用すること、幸ひ創作社も外形的に幾らかづつ大きくなりつゝあるからといふ風のことを云はうとしたのであつた、思ふ半分も云へなかつた！、それにかなりそれに類したことを今までに云ひ古して來てゐるので、單に「またか」と思はれるに過ぎなかつたのではないかと心配したりしてゐるのである、實際一般にもゐないが、創作社にも人がゐない、生きた歌が少い、もう少しお互ひ苦しまなくてはどうしてもいかぬと思ふのだ、よくこの邊のことを考へてほしいとおもふ、年齡の上から云つてもお互ひはもう充分本氣になつてかゝらなくてはならぬ地位に達してゐるよ、「このまゝに死んでは」といふ氣がすることは君にはないかネ、要するに今までにやつて來たことは謂はゞその日〳〵の出來心か漠然たる興味にすぎなかつたかも知れぬ、問題はまつたくこれからだ、

歌集、出來たら持つて來てくれたまへ、いろ〳〵印刷についての注意をもきゝたいと思ふ、別に急ぐと云ふわけではないが、精々早い方がいゝ、僕のにも早速かゝるつもりだ、

「東籬集」どうだネ、どうもあゝして集めてみると屑が多すぎて折角の光をも埋めてをる感じがしてならない、君はさうは思はないかネ、惜しいことをした樣な氣がしてならない、然し、彼も今度は隨分昂奮して歸つた樣だからすつかりまき直しで始めるかも知れない、あまりに物を知らなすぎたのだネ、今までは。

今日小包で添刪を送つておいた、夙うに返すべきのが溜つてゐるので催促がかなり烈しい、すまないが大急ぎでやつてくれたまへ、返す分は君より直接に今度だけ返しといてくれたまへ、詠草として雜誌に出すのだけこちらに廻してくれたまへ、

僕は三十一日に宅を出て、赤城から榛名に登るつもりで出かけたところ、出るとすぐ風邪氣になつて前橋で三日も寢込み、わづかに榛名に登つて昨夜歸つて來た、それだけでも然しよかつた、いつか一緒に何處ぞへ出かけたいねエ、

氣が向いたらいつでも出かけて來てくれたまへ、先夜の樣な心配は無用にしてくれたまへ、寫眞、げにオソロシキ寫眞だネ。先づ中村君と僕とは西南役生き殘りといふところ、他の三人はまさしく三敎合同會の形だネ、

五日夕方　　牧　水

山　蘭　樣

十五六日頃に日曜があるネ、その時合評會をひらかう、

一一

七月四日、東京市芝區櫻田太左衞門町四番地製英舍天沼藤太郎方より、日向國、平賀財藏樣宛（手紙）

印刷所に校正に來てゐる、校正刷の出るのを待ちながらこれを書く、

たび〳〵のおたより、まことにありがたう、そのたびごとに君と逢つた安心やよろこびを感じながら例により御無沙汰してゐた、許してくれたまへ、やはり何といふことなく忙しいのだ、何をするともないが、少しも自分の時間といふものを持たぬ樣な朝夕のみ續いてゐる、そこにゆくと近頃の君はいくらかおちついて來たらしい、うれしいことだ、精々その樣に自身を押し進めて行かれむことを心から祈る、この間の君の葉書ではないが、一生のうち、ほんとうに自分の時間といふものはまつたく幾らもあるものではない、それを思ふと片時もかりそめには出來ぬことなのだ、それを知らぬではなかつたが、しみ〴〵身内に痛感する樣になつたのはツイ近頃だ、追々と僕自身もさうなつてゆくことゝおもふ、お互ひに惜しいものを今までに自ら捨てゝ來てゐる、それだけにこれからを用心したい、

よく延岡に行く樣だネ、何か仕事のためかネ、それから、この前々の葉書に延岡から歸つたら上京する旨認められてあつたが、あれは事實かネ、來ると云へばやはり待ちかぬる思ひだ、事情をきかせてくれたまへ、「東籬集」を送らうか、近く出て來るなら

その時にしようか、

君の歌集をばどうするかネ、夏は印刷所のひまな時だ、作るなら作つたらどうだらう、原稿はもう出來たか知ら、「東籬集」は三百部で百五十何圓かで出來た、

印刷費をまた五割上げた、とても凸版ではやつてゆけぬので、七月號からこゝへ代つた、凸版には三百人近い職工がゐたが此處には十何人かしかゐない、却つてこちらの方が氣持はいゝ、爲事もはかどる、

七月號は六七日に出來る、

紀行文をほめていたゞいて恐縮だ、おちついて書けばいゝのにやはり例のくせで締切に迫つては中腰になつて書くのだからどうも浮いてゐていけない、とにかく昨年のあの旅の紀行をば全部かきあげるつもりではある、あの續きをば「新潮」に少し出しておいた、

五月の末榛名に登つた、ツイこの四五日前、潮來の水鄕を廻つて筑波へ登つて來た、旅が一等ありがたい、君の來た時、今度こそ何處かへ行かうよ、

「アラ、ギ」の「左千夫紀念號」を讀んでゐる、いゝネ、いゝお爺さんだつたらしい、歌にも少し臭いけれどいゝのが多い、君はあの雜誌をば毎月見てゐるのか、

君初め御家族みなお達者かネ、僕の方では二三日前から妻は赤ん坊と旅人を連れて信州へ行つてゐる、僕は達者な樣な、でない樣な、例の調子だ、

校正室（といふ程のものさへない）が工場の中にあるので騷しい、これでおく、

牧　水

春　郊　兄

奧さんによろしく、

一二

七月五日、東京巢鴨より、千葉縣、細野春翠樣宛（繪葉書）

おもひ出のいづれはあれどさびしきは逢ひてのちのわかれなりけり

つくば嶺もかすみが浦もはるけしや昨日ゆきし
とおもふばかりに

筍、昨夜着、大騒ぎして頂戴致しをり候、これでやつと今年の安心を得申し候、深く御禮申上候、

七月五日　若山牧水

一三

七月二十二日、東京府巣鴨町一二五〇より、信濃、山崎斌様宛（手紙）

たび〳〵お葉書、ありがたう、默つてゐてすまない、けふの追分の繪葉書など、一種の憤慨を以て眺めた、さぞよからうネ、

八月中旬上京とは一寸驚いたネ、宿はどうにかなるだらう、どうにかするつもりだ、僕は廿五六日前橋にゆく、二週間滯在の豫定で、

それから、とりいそぎ、一つおたづね、

社友で山内眞珠子さんといふ人がある、小學校の先生をしてゐる人だが、この休み中に海か山かに一週間位ゐの滯在で何處かへ出かけたいといふ希望だ、海岸は第一僕が氣が進まない、山にしたい、山といふと心に浮ぶは其處だ、が、あまり金がかゝつては駄目だ、女の事で自炊は安易だらう、とにかく、極く簡單に行けるかどうか、君の所見意見をきかせてくれたまへ、期間は八月十三日から二十日までの由、若し君と行きちがひにでもなれば幸だが、さうもゆくまい、人物は極くいゝ人、おとなしい淋しい人、いはゞ老孃の一人だらう、その一週間に精一杯歌をつくりたいといふことなのだ、

今夜來てその話なので、早速先づ君の方をきゝ合せてみる、御返事待つ、

廿二日夜　牧水

斌兄

一四

七月廿四日、東京より、千葉縣、細野春翠様宛（繪葉書）

喰べる樣にと云つて一昨年の冬君が送つてくれた百合の根を半分だけ庭に埋めておいた、昨年は實によく咲いたが今年も雜草のかげに眞白な花をつけた、剪つて來て机にさし、いま夜なべのあとのウキスキイをなめながら見入つてゐるところです、

廿四日午前四時　牧水

一五

七月廿七日、東京府巣鴨町一二五〇より、長野縣、山崎斌様宛（手紙）

急用から（イヤに急の字續けども）

君に云つてゐた例の家がいよ〳〵あいたと今日家主が云つて來た、改つて夫婦してしらべて來た、ずゐぶんの古家で、いろ〳〵不滿もあるが、とにかく早速そこに越さうと思ふ、こちらの大家に行つてあとの話を（實をいふと君のほか他にも二三希望者があつたのだがそれらの話はあとにする）したところ大家氏甚だ權式高く、來月から（卽ちこの次ぎの借主から）月十三圓にすることにしますが御承知かといふ、現在より三圓五十錢高になるわけだ、少からぬ暴騰だ、それでも君いゝかネ、君の社が櫻木町にあるとするとその近くにこの九月中にはあくかと豫定せらるゝ（少し怪し）或る男（知人、君も）の家がある、それも越すとなるとどうせ暴騰だらうが、それでも十圓か十二圓どまりだらう、どちらにする、若し君がこの家に來たい希望を持つならば僕は前橋に行つたつもりで、晝夜とも、君の來るまでこの家に寢泊りしてゐるつもりだ、爲事をしながらサ、瀨戸内海氏が來るにしても、さうすれば、荷物だけはこゝに受取つて置くことが出來る、移るとしてもさうめんだうでもないだらうから一應こゝへ落ちつき、櫻木町近くの知人の家があいたら更にそこに移るといふことにしてはどうだらう、

といふのは畢竟君をこゝに置きたいし、君の希望を遂げしめたいといふことから出來た話なのだが、實は僕は前橋に行つて少し心から眠りたい、もつともさうなればこゝの留守番には（牧水借用のまゝにして賃九圓半の割にて牧水支拂ひのこと）中村君を頼

んでもいゝわけだ、とにかくこゝはわるくない、高くなつても高くない樣に思ふ、

一六

七月三十日、東京府巢鴨町一二五〇番地創作社より、茨城縣、重田彌次郎樣宛（葉書）

たいへんな商賣を始めたものだネ、しつかりやつて禿頭居士の信用を博しろや、雜誌は五日前（四五日ころ）に出來るだろ、そこへ送りませう、それから淋しかろと思うて田川浦へ昨日「雄辯」を送つといたのだが、どうにかなるだらうか。柿岡町に舟橋暢（秋雨）君がゐる、たゞ柿岡町とだけきりないが、小學校の先生か役場の人かだらうとおもふ、逢つたらよろしく云つてくれたまへ、そして、「たいへんいゝ傾向を持つてゐると思ひ樂しんで見てゐた所この頃少し頓挫した樣だがどうしたものか」と云つてゐたと傳へてくれたまへ、歸りには寄りたまへ、だがそれまでに轉居するよ、例の家だ、巢鴨町一四九三だ、東洋女學校の前横丁だ、

一七

七月三十一日、東京市外巢鴨町一二五〇より、信濃、山崎斌樣宛（手紙）

萬事都合よく行つた。

種々談判の結果、このまゝに八月一杯僕が借りておくこと、その間に疊を大家で代へること、（これはよほどの好意なのだ、寧ろ意想外な）襖障子を僕で繕ふこと、（この二つは僕から申し出たのだが、その前者を大家氏が受取つたのだ）など、これにて御安心をねがひたいとおもふ。

僕の方は家が大分古く汚れ切つてゐるので人を入れて掃除させることになつてゐるのだが、何しろ三四日打通しの雨で、手が出せない、今日も駄目らしい、明日も降る樣だつたら思ひ切つて移ることにするかも知れぬが、とにかく校正は出だしたし、すつかり氣を腐らしてゐる所だ。で、前橋行がちと怪しくなつた。せめて三四日でも、とあきらめかねたりしてゐるが、あちらはどうなつてゐるのかネ、八月

も借りてあるのだらうか、若しさうでなかつたら、あちらをば打ち切つたらどうだネ、若し既に八月も濟んでゐるのなら出かくる、さうでなかつたら見合はすといふことにしたい。輕井澤も、大分太つぱらを見せたものだネ、至極ありがたい、前橋の腹いせにずつとそちらへ行つて雜誌の編輯もそこでやらうかなどゝも考へてゐる、とにかくこの話はお目にかゝつてにする。山内女史には昨日云つてやつた、大よろこびで多分今夜あたりやつてくると思ふ、無論出かくるに相違ない。せと内海氏はいつ出て來るネ、とにかくこの家には僕等越し次第中村君に來てゐて貰ふことにしてあるから荷物はさしつかへない、（といふうちにも留守が多からうから、こんどの僕の新居宛の方がたしかにはたしかだ）とにかく早くお逢ひしたいものだ。（若しすでに一二五〇あてに出したのなら通運會社の名を知らして呉れたまへ、注意しておくから）

何だ彼だ、どうもまごついていかぬ、頭がぐざ〳〵になりさうだ、オレはもう何もかもよして山へでも入り込みたい、アーンアーン。

卅一日　牧

斌　兄

一八

八月三日、巢鴨より、千葉縣、細野春翠樣宛（葉書）

花ぢア花ぢアと思うたら百合は百合ぢアがこりやどうぢア白い白いまつ白い水晶の小粒の大粒の百合のお根々でありました、百合のお根々をどうしませう、水で洗つてさとつけてお鍋でにんにしてたべませう、たべるそのときどうしませう、おさらにもつて箸もつておいしおいしとたべませう、たべるばかりが能ぢアない、いつぱい飲ましておくんなんしよ。

（牧　水）

八月三日朝

（喜志子、みどりとのよせ書）

一九

九月一日、九十九里片貝より、東京、岩淵要樣
賴子樣宛（繪葉書）

秋風の立つた海が急に見たくなつて、編輯もまだ濟んでないのに、昨日晝から出かけて來た、そしていま大に滿足してゐる形だ、こゝは九十九里のまん中に當り、それこそ右も左もまつ白な浪と砂丘ばかりなのだ、暑いが、風も、雲も、海も、草木もまつたく秋だ、何だか無闇としんみりした淋しい氣になつてしまつた、

二〇

十月廿九日、信州星野溫泉より、東京、山崎斌
樣宛（繪葉書）

昨日失禮、今朝七時發、とにかく此處に寄つてみた、なか〳〵いゝ、いつそ此處に落ち着かうとおもふ、いま、一寸散歩に出てみたら偶然「山本別莊」と標札のある家の前へ出て驚いた、人のゐぬ庭に楓が朱の樣に染つてゐた、

滿目悉く冬景、これで明日あたり晴れて呉れたら文句なしだがなア。

廿九日(?)夕方　　牧　水

二一

十二月七日、東京府巢鴨町一四九三より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（手紙）

あなご、たいへん結構でした、初めてたべるものでした、まことに難有うございました、まだ珍重して自分一人のみに專有しつゝあるのです、

御上京、いゝことです、家はまことにない樣です、然しその氣になつて探せば見付け得ないこともないと思ひます、どん〳〵郊外にも建ちつゝあるのですからネ、

然し、來春おいでるといふのに今から探しておいても爲樣がないでせう、矢張りその間際になつてあなたゞけさきにおいでゝそして專心に探さなくては駄目な樣に思ひます、厄介でもさうなすつたがよいでせう、眼についたらすぐ約定してしまはないと忽ちなくなるのですから、そのつもりでないといけませ

ん、

場所はやはり郊外、大森、目黑、代々木、大久保、目白、池袋、巢鴨あたりがいゝと思ひます、その中でもこの附近に家を探したいものと考へてゐます、惜しいことにツイ近所に先日いゝ新築の家がありましたにネ、どの位ゐの所を御希望です、いまの私の宅が、上八、三、二間、下六、四半、三、二、四間で賃二十二圓です、が、これは法外にやすいのだ相です、（ひどく古いからでせう）これで、三十圓から三十五圓が昨今の相場だと人ごとに云つてゐます、柏木の方にしきりに新築が出來つゝある樣にきゝましたが、（友人佐藤綠葉がそこに近く越す筈ですが）あの邊もいゝと思ひます、

とにかく一度君だけさきに出て來ないと事はまとまりませんよ、骨惜みではありません、そして御家族を呼びにもう一度歸るのですネ、探す氣になつて探せば何處にか見つけようよ、それまでにいゝと思つた家を見つけたらば電報でも打つ樣にしときませうか、

私は今年は全く夢中ですごしました、來年を待ちます、

十二月七日　　牧　水

敏夫兄

大正九年

一

一月十五日、巣鴨町一四九三より、千葉縣、細野春翠樣宛（葉書）

先日來、いろ〳〵ありがたうございました、二日の日はゆつくりすることが出來ず、あとで甚だ殘り惜しく思ひました、あれから君はどうしました、そしてもう正月氣分を取り除け得ましたか、小生は例により生死不明の有樣です、さびしくていけない、十八日にやると云つてゐた會合をばもう一週間延して廿五日にしたいと思ひます、さうして下さい、とりあへず右急用のみ、

一月十五日　　牧水生

二

一月十六日、巣鴨町一四九三より、麹町區、原田實樣宛（手紙）

今朝の朝報を見て驚いた、火事でしたつてネ、御無事だつたとは思ひますが、さぞ驚いたでせう、それにあの書籍がどうなつたらうとそれが氣にかゝりました、都合よく運び出しましたか、その外には何事もありませんでしたか、十四日の火事のことは少しも知りませんでした、

小火だつたと思ひますが、それだけ君にとつては急なことだつたらうと察せられました、さぞお勞れでせう、大事にして下さい、妻よりもよろしく申しました、彼女は何より「お產があつて間がないのにどんなだつたらう」と云ひました、小生はそのことは知らなかつたのです、いつだつたのです、夫人に右よろしく、

平常御無沙汰してゐてすみません、今年は少し勉强します、昨年は恰度いけない年でした、身體（年齡と境遇）がさうした時期に當つてゐたのでせう、

一月十六日あさ　　若山牧水

原田實兄

三

一月廿四日、東京府巣鴨町創作社より、愛媛縣森下笹吉樣宛（手紙）

森下君、伊豫と此處とでは隨分違いが、今夜など何だか一緒に坐つて話してゐる樣な氣がします、いつかほんたうに斯うしてお逢ひする時がありませう、いま藤谷君からいろ〳〵そちらの話を聞いてゐる所です　こちらではめづらしい時雨がいま急に屋根に音をたて始めました、升田君伊出君に君よりよろしくおつしやつて下さい、イヤな風邪が流行りますネ、大丈夫ですか、私は常用含嗽劑のおかげか案外に元氣です、たゞ、精神の、靈魂のつかれを多少感じてゐます、これは要するに猪食つたむくいで止むを得ないでせう、然し大丈夫、牧水は充分それを傍觀する餘裕を持つてゐます、安心して下さい、

亂筆御判讀、

二十四日夜　　牧水生

森下笹吉樣

（藤谷庸夫とのよせ書）

四

二月十一日、伊豆濱港鈴卯旅館より、東京、山崎斌樣宛（繪葉書）

實は少々惑つてゐたのだつたが、矢張り來てよかつた、あの日、沼津に夜着、昨日の船が悲慘にして壯快、航路半ばにして出帆不能といふわけだ、何とも知れぬ昂奮に乘じて阿良里といふ港から海岸沿の山路を此處までやつて來た、その道中がまた素敵だつた、今日は一日此處で靜養、明日松崎から行けたらすぐ天城南麓の溫泉まで行きたいと思つてる、そこで書くつもり、

留守中おねがひします、

二月十一日　　牧水

五

二月十一日、伊豆仁科村濱港鈴卯旅館より、信濃、重田彌次郎樣宛（繪葉書）

昨日、沼津發下田行の汽船は途中で吹き出した意外

の西風に航行不能となり、阿良里といふ小港に辛うじて避難した、止むなく其處から海岸沿ひの山道をえつちらおつちら此處まで辿つて來た、が、今朝は足腰うづき、義理にも動けず、一日休養といふ形になつてゐる、今日もまた揉み切る樣な風で、汐煙が吹雪の樣、梅が白々と咲いてゐる、

二月十一日　牧水生

六

五月十四日、上州吾妻郡川原湯より、千葉縣、細野春翠樣宛（繪葉書）

二三日前からこんなところに來てゐる、こゝから半道ほど下ると五月號の「雄辯」に書いた溪となるのです、あの時は落葉、いまは若葉とつゝじで、また一層よく見えます、

こゝになほ三四日ゐて例の歌集の編輯をやつてみます、それから草津に出て、白根山の側を越えて信州に出ます、

靜かなのはいゝが、さうなるとまた急につかれが出て、わけなしに重苦しくて困ります、

五月十四日　牧水

七

五月十九日、上州吾妻郡川原湯より、愛媛縣、三浦敏夫樣宛（繪葉書）

三浦君、お手紙を頂きながら默りつ通しで、何ともお詫びも出來ない氣持です、もう中國地の方へお移りですか、身體のこと、あまり神經質にならずに下さい、それだけでも弱りますよ、お引越が大變だつたでせう、その後の樣子どんなです、僕、こんな溪間の溫泉に十日ゐました、明日は草津に越えます、月末歸京、またその上にて、

五月十九日　若山牧水

八

五月二十日、上州草津より、東京、黑土會御中宛（繪葉書）

（草津溫泉時間湯攪亂の光景の繪葉書に）

先づ、
三十分ほど、
この板にて、
かつたりざぶりと
湯を揉むなり、
板の音
水のひゞき
初め
合はねど
次第
次第に
かなしき
リズムを
なし來る、
音頭とりゐて、
をりをり、
唄をうたひ、
衆これに和す、
聲すでに慘、
やがて、
柏子木鳴る、

五月二十日

九

六月二日、東京府巢鴨町一四九三より、信濃、重田彌次郎樣宛（手紙）

蕨、お葉書一昨日着、今日またお手紙着、それに本物が屆かないのに業を煮やしいま自身出かけて見たらちやんと來てゐた、なぜ通知をよこさぬと文句を云つたが追つ着かず、そのまゝ持つて歸つてあけてみたら惜しいかな大分いたんでゐた、然し、結構たべられさうだ、早速いまアクを拔かせてゐる所だ、たくさんなこと、まことに難有う、そゞろに欠の湯の山の檜林落葉松林など眼に浮んで來る、

例のもの、三十一日に振替局の方に拂出票を出しておいた、今日はもうその通知が僕の方に來ねばならぬのだが、これもまた事務遲滯と見える、然し、明日か明後日は遲くも君の方に行くことゝおもふ、

局は片丘局にしておいた、實はもう少しと考へて歸つて來たのだが、鬼の留守の氣味か、荒らされるだけ荒らしてゐたので、辛うじてきつかりしかよう送れなかつた、すまないが勘辨してくれたまへ、そのうち、少し稼ぐつもりでゐるから飲みしろの多少も送れるとおもふ、ほんとにいつも濟まない、

僕に話すことつて何だつたのかね、こちらもぼんやりしてゐたが、惜しい機會を失くしたものだつた、手紙でゝもきかしてくれたまへ、夏はずつとこちらにゐるからそのころ一寸出て來るのもいゝだらう、都合では一緒に何處か海岸へでも行つて見よう、

東京に歸ると僕は駄目だ、たゞ度を失へる如くにうろたへるのみだ、また、ひどくいろ〳〵なことが溜つてゐるのでネ、實際ぼうつとしてしまふのだ、けふまでそこらを出歩いて飲んでゐたが、今日から机に向つた、明日あたりからずつと落着くつもりだ、

伊太利の飛行機を迎へに行つた、こちらの二機が向うの一機を迎へて環狀をなしながら翔ひすましたのを仰いだ時は涙がこぼれた、日本のもうまくなつたよ、

その後、越前君に逢つたかね、

健康とおちつきとを祈る、

二日夕方　　牧　水

重田兄

一〇

七月五日、東京府巣鴨町一四九三より、靜岡縣沼津、神部孝樣宛（手紙）

神部君、君と原田君とに逢ふために君等の時間の都合を開發社宛に問合せたら、君は目下歸鄕中の旨原田君から返事があつた、その事は却つて僕には幸であつた樣に思ふ、

用事を先に書きます、

神部君、僕は今度、永い間自分の問題になつてゐた東京引退を實行することに決心しました、つまり東京を去つて、靜かな田舍に隱栖するのです、このまゝにゐたのではとても僕には何も出來ないで、精

力の浪費ばかりをやることになるからです、田舍に引込んで、自分の身にあるだけの力を創作の方に注いでみたいと思ふのです、

サテ、その引込先を何處にするかでまた暫く惑ひました、そして結局沼津附近に行きたいといふことにきめたのです、

どうでせう、適當の家が借りられませうか、沼津も町中はいけないと思ふのです、狩野川のほとりか、海の近くか、とにかく靜かな場所がほしいと思ひます、五間か六間、二階建であれば更に幸です、贅澤も云へないでせうから、無論ほど〳〵で我慢しますが、兎に角さうした家がありませうか、引込むからには半永久的で、少くとも五年か十年、若し氣に入れば一生そこに暮すつもりでゐます、さうなれば少しづゝ金をためて自分に家を作りたいなどゝも思つてゐます、

一向に不案内なので困つてゐるのですが、幸ひ君のおゐでることに心づき、あらましのことをおきゝしてそれから沼津の方へ出かけたい氣でゐました、君がそちらにお歸りなら一層便利の樣に思ひます、めんだうでも右の樣な事を詳しく調べてみて呉れませんか、強ち沼津には限らないのです、そこを中心としての一帶です、然し、あまり郵便局や醫者などに不便でも困ると思ひます、

その都合で私もそちらに參ります、いま借りるとすると夏季あてこみの高値でありはせぬかと注意してくれる人もありますが、一年とか幾らとか年をきめてからならばその事もないかと思ひますが如何でせうか、それもきいてみて下さい、

それから、その附近一帶の人氣とか物價とか朝晩生活の便不便とかいふものについても聞かして下さい、動くと云つてもたいへんですから一度移つたら容易の事では移轉せぬつもりです、で、その前に詳しくいろ〳〵知つておきたいと思ふのです、

御返事、お待ちします、それによつてまたいろ〳〵考へたいと思ひます、引越さうと思ひ立つと一刻も早くといふ氣が爲て少しも落ちつきません、この手紙もあとやさきです、御判讀下さい、

その後、お變りなしでしたか、私の方は不快な日ばかり續いてゐました、身體も心もひどく勞れてゐます、

多分近々お目にかゝれるだらうと思ひます、とりあへず右おねがひまで、

七月五日　若山牧水

神部孝樣

一一

七月九日、東京府巣鴨町一四九三より、信濃、重田彌次郎樣宛（葉書）

いま「望鄕歌」を見ながら君に逢つた樣な氣になつてゐる、歌もうまい、續けて作つてゐるかね、もう少しずつと腰が据りさうだがね。その後、どうしてゐるかね、連中の消息も一切聞かないが。僕いよ〳〵決心して近々都落ちときめた、二三ケ月惑つてゐたが、矢張りどうしても逃げ出さずにはゐられなくなつた、秋風が立つてからと思つてるが、向うに家のあり次第引越すつもりだ、多分沼津の近所になるだらう、五年か十年、完全に隱栖する氣でゐる。雜誌は長谷川夫婦に經營一切を任してゆく、選と編輯は向うでやるのだ。お名殘に東京で逢ひたいけれど、多分駄目だらう。

七月九日　若山生

一二

七月十八日、東京府巣鴨町一四九三より、靜岡縣沼津、神部孝樣宛（手紙）

拜啓、

お手紙、ありがたうございました、お骨折、厚くお禮申します、何だか御一家にあれこれして頂いてゐる樣で大に恐縮して居ります、いづれお目にかゝりますけれど、君よりよろしくお禮を云つておいて下さい、

お知らせの家、實に申分のない家だと思ひます、何だかもう眼の前に見てゐる樣な氣がしてゐるのです、どうかしてこれを借り度いとおもひます、唯だ

いつぞやお話した豫算と大分違ふので、多少恐れをなしますけれど、さう我儘も云へまいと思ふのです、若しそれがお手紙にあつた樣に二十圓にでもなつて呉れゝば何よりです、どうかその樣に御周旋願へればこの上ありません、

それからその家には敷金といふものはいらないのでせうか、そしていつごろ空くのでせうか、もう一つ、其處に入つて直ぐまた空けて呉れ（つまりその東京の所有主が入るとかいふことになつてゞす）といふ風のことがありはしないでせうか、少くも五年六年はその心配はないだらうかどうか、といふ樣なことをお調べ下さいませんか、いろ〳〵お手數ですが、よろしくおねがひします、

實は今日あたり直ぐ出かけて參りたいのですが、「創作」の校正が明日あたり出るのと、他の雜誌八月號に受合つた原稿をまだよう濟まさないのとで、一寸出られないのです、で、大急ぎで手紙で右お禮やらおねがひやら申し上げます、それらの片づき次第、四五日の後には是非小生參ります、それまでに右の事など、また御返事下さいまし、行くとすれば無理をしてもなるたけ早く（と云つても今月一杯位ゐは駄目でせうが）越してゆきたく思ふのです、何だか心持はもうそちらに行つてゐる樣なありさまです、

東京も實に暑い、今年は別の樣です、

今日など、斯うしてゐて室から遠い富士が見えます、その麓にゆくのだと思ふと何だか因緣淺からず思はれます、

ほんとに皆さんによろしく申上げておいて下さい、

七月十八日朝八時　若山牧水

神部孝樣

一三

七月廿三日、東京府巣鴨町一四九三より、靜岡縣沼津、神部孝樣宛（手紙）

お手紙難有うございました、いろ〳〵の御骨折、ことにめんだうな金錢上の交渉にまで當つて頂き、

恐縮千萬でした、厚く御禮申します、萬事御手紙の通りで、非常に結構と思ひます、畑はやれるかどうかは別として是非全部借りたいと思ひます、この分の借料はまた別にきめて頂きたく存じます、家賃前納も結構です、たゞ、その月の分をその月の十日までに納めるといふことにしておいて頂き度く思ふのです、つまりその前月の月末までに小生に屆くべき金が大抵は六七日づゝ遲れるのが常ですから自然一切の支拂とも現在にさうやつてゐるのです、それから五六年間云々といふのも强ちにその數字に據るのでなく、出來るならばその位ゐ、若しまた出來るならばそれ以上にもといふ意味におとり下さる樣願ひます、それから金錢上一切の事は全力を擧げて期日等に確實を期しますから、念のために申し添へておきます、

その後、現住者の樣子はどうなりましたか、どうしても來月一杯駄目だとならば心よくそれまで待ちます、また、いま直ぐと云つてもオイソレと馳け出すことも出來ないのです、矢張り今から二十日位ゐはまご〳〵せねばなるまいと思ひます、雜誌のあとかたづけ（八月號の編輯をばこちらで濟ましてゆきたく思つてゐます、七月號はこの廿五六日出來ます）そこ此處の暇乞、それから引越までに少し治療を受けてゆきたい持病もありますので、大抵そんなことになるだらうと思ひます、いまは咽喉の治療にかゝつてゐます、然し、そちらの樣子をばはつきりと知つてゐたく思ひますので、わかり次第、刻々にお知らせ下さいまし、その年限云々のことが問題になりはしないでせうか、何だか氣になつてゐます、

いよ〳〵斯うなつて來るとあれもこれも爲ておきたいことが出來て、氣がせか〳〵してゐます、時間の都合で一寸そちらへ參つてみたく思ひながら、もう少し待つてに爲ようなどゝも思つてゐます、家內中、いまはその氣になつていろ〳〵空想したり談合したりしてゐます、

何彼とほんとにお手數ですが、今後ともよろしくおねがひします、妻よりも吳々よろしく申上げました、

とりあへず右まで

七月廿三日　若山牧水

神部孝樣

一四

八月一日、東京巢鴨より、信濃、重田彌次郎樣宛（葉書）

二十二三日の頃、若しかと思つて每朝心待ちにしたのであつた、沼津行は向うの家の都合で急にはゆけない、二三日うち一寸僕行つてよく樣子を見て來る、そしたらよく解るだらうと思ふ、いづれにせよ八月中頃までは動けまい。昨日か柊花から君は上京してゐるかなど、尋ねて來たよ、身體がそこ此處とわるく、僕もいま小石川病院に一月あまり通つてゐる、不景氣だ。雜誌は今日持つて來るわけなんだが、あてにはならない。暑いけれど僕はこの季節がすきだから弱いながらに樂しんでゐる。

三十一日　牧水

一五

八月六日、東京府巢鴨町より、靜岡縣沼津、神部孝樣宛（手紙）

神部君、

一昨日は實に何とも云へない幸福な日でした、何から何までまつたく豫想も及ばないよろこびごとばかりで、ほんとに何とお禮を云つていゝか解らないのです、どうぞお察し下さい、ことに阿父樣にお目にかゝれたことは單に事件の進捗といふ事以外に私にとつて難有いことでした、この十年餘り、自分より年長の人よりあゝした親切を受けた經驗がないものですから、一層その難有さが身にしみました、あとの方では何だか子供心になつて可笑しい位ゐ我儘を働いた樣です、面目ありません、何卒君より阿父樣によろしく〳〵申上げておいて下さい、

異樣な感奮に固くなりながらあれから裾野を登ります頃、恐ろしい大雨がやつて來ました、その雨を仰ぎながら次第に私の昂奮と空想とは向上してゆくの

でした、側の人にさぞ變に見えたことゝ氣まりわるくも思ひ出されます、家には十一時半に歸りつきました、妻の喜びは私の考へてゐたよりもつとひどうございました、夫婦して二時頃まで何彼とひそ〳〵語り興じました、わけのわからぬ子供にまでそれが通ずるのですか初めいやだ〳〵と云つてゐた旅人までが昨日今日、「いつ田舍にゆくの」と云つて期待する樣になりました、

それこれを見てゐますと何といふことなく私の心は故のない寂寥に沈むのを感じます、何しろ殘り半生（といふよりも私自身にとつてはこれからの一生といふ氣がしますが）を賭けての事件ですからいろ〳〵心の動くのも無理はないとお察し下さい、決して單なる移轉ではないのです、昨日は一日丁度或る田舍から訪ねて來た人を相手に終に一日飲み暮してしまひました、戰場にでも臨む者の感慨を覺ゆるといつた形なのです、笑はずに下さい、

それこれと考へ出すとなか〳〵準備がありさうですが、とにかく大馬力で十五日までには片附けたいと力んでゐます、なほ樣子をばその時々お知らせ申します、

草をむしつてゐた老人の事がひよい〳〵頭に上りますが、どうか無事に――彼のために我等のために――退散の出來る事を祈つてをります、

こまゝ〳〵の御禮など、ほんとに何と申しあげていゝかわかりません、どうか君より吳々よろしき樣阿父樣初め皆々樣にお傳へおき下さいまし、沼津での私の爲事の出來具合を私よりのお禮心だといふ風に阿父樣たちに見てゐて頂きたくも思つて居ります、とにかく勉强はします、あの櫻の木の中の家で、

甚だ意をつくしませんが、とりあへず以上申上げて筆をおきます、妻よりも吳々よろしく申しあげました、

八月六日　若山牧水

神部孝樣

兄さんの神田の下宿屋のことはどうなりました、

行く方がよければすぐゆきますからその旨御知らせ下さい、

一六

八月十六日、沼津町在上香貫より、東京、郡山幸男樣宛（葉書）

こほりやまさん
わたしはあなたからおくられた
ほしぶどうのはこを
こどもたちにもかくして
つくえのひきだしにしまひこみ
ひみつのたのしみをあぢはふやうに
ぽつりぽつりとやつてゐます
けさもいま
ドストイエフスキーのでんきをよみながら
ぽつりぽつりとやつてゐます
うすいろのあさひは
ほんのりとにはのこけをそめ
そこをちひさなかにが
なんびきとなくはしつてゐます
おゝ
なんといふすばしこさ
なんといふあいらしさ
ほんとにちひさなひかりのやうに
あをごけのうへをはしつてゐます
それをうつとりみつめながら
わたしはまなこをとぢました
ウイスキイがすこしのみたくなつたのです

八月十六日　若山牧水

一七

九月四日、沼津在楊原村上香貫より、東京市、佐藤綠葉樣宛（繪葉書）

どうだネ、この中ころ、出かけられさうか知ら、急に秋めいていゝ氣持だ、門前の稻田がすつかり穗になつた、

まだ新聞が來ないがナ、淋しくていけない、何とかしてくれたまへ、

僕の前から見る沼津の町がこの通りだ、（註、御成橋附近より富士を望む繪葉書）こんな美しい横顔を持つた町は先づ無いと思ふがどうだネ、

九月四日　　牧　水

一八

九月十一日、靜岡縣沼津在上香貫より、茨城縣綿引惣吾樣宛（手紙）

いろ〳〵御心配、ありがたう、同封の樣に、恰度君のと同じ配達で今朝水戸からも云つて來た。（註、いばらぎ新聞選歌のこと）出來るなら毎月の方がよいとも思つたが、年末のが一つ位ゐあつた方がよいとも思ふ、とにかく、これで一段落ついたわけだ、金額はわからないが、それも向う任せのほかはあるまい、それこれに係らず、これから一つ氣を入れて選の方にかゝります、批評なども書いてみたいと思ふ、なにしろ、まだ落ちつかない、それにそれ學期初めで東海道往來の諸君が飛込んで來るので、この頃ことに不穩で居る、今月すぎればどんなにかよくなるだらうと樂しんでゐる、場所はいゝ場所だ、山水の景色も先づ申分なし、たゞ貧乏が東京と違つて心をおびやかすが、これもそろ〳〵何とか安定の方法を考へなくてはなるまいと思ふ、一種、人生の秋が深いネ、

冬といつてももう近い、ほんとにやつて來給へ、遠い樣でも汽車の線路が飽きない所だからナーニすぐだ、家は實にひろいのだから、ゆつくり寢てゆくことにして呉給へ、

とにかく勉强します、樂しんで見てゐてくれ、

十一日　　牧　水

惣吾樣

みんな達者、細君も僕より此處をよろこんでゐる、けふは田舍流の固いだんごなどこさへて子供たちと大騒ぎをしてゐる樣だ、

一九

九月十五日、沼津在より、千葉縣、細野春翠樣

宛（繪葉書）

さびしい雨の日
いつも空想する
野の中の君の村に
君を置いて
君のことを思ふと
君も同じく
ぼんやりと淋しがつてゐる樣だ
君のさびしさと
僕のさびしさとは
勿論違ふだらう
が何かしら
むやみに淋しい

十五日　　牧　水

二〇

九月十七日、沼津在上香貫より、東京市、佐藤綠葉樣宛（繪葉書）

さうか、やつぱり來られなかつたか、何だか、毎日この二三日の間心待ちせられて苦しかつた、神部君も待つてゐた、なか〳〵君も忙しいんだネ、いつか何とか法を立てゝやつて來給へ、佐治君のこと、初耳だ、逢ひ度し、

田舍も甚だ樂でないが、（いかにも宿無き者の感が深くてネ、東京の樣におちつけない）これも一つの苦行だと信じてひたすらに自分の心の爲事に力を向けようと努めてゐる、それは何と云つても東京より出來る、それだけが感謝だ、夜なかにも起きてやつてゐる、寂しさが一通りでない、

御家族、みな達者かネ、こちらみな元氣だ、

九月十七日　　牧　水

向うに見える樣な家、そんな一つにいま居るのだ、山もこのまゝに見える、（千本濱公園附近の富士の繪葉書畫面に）

二一

九月二十日、沼津町在楊原村折坂より、長野縣

中村端様宛（封緘葉書）

十月上旬おみこしを上ぐるの擧、甚だ善し、そこで僕一つ勸むることがある、君もかなり忙しい人であつた、さうした時間を多分まだ持つたことがあるまいと思はるゝのでこの沼津の家に來て二階にこもつて十日ばかりぐつすり寢込んで見たらどうかといふのだ、二階に甚だ古めかしいが殆ど隔離された一室がある、そこを君のために解放といふか閉鎖といふかとにかく治外法權の室としておくからそこにゐて寢るなり讀むなり書くなり全然さうした時間を十日なり二週間なり過して見給へといふのだ、君が來てゐても僕は毎日午前中は稼がねばならぬ、午後はまア君も一緒になつて散歩なり馬鹿話なりするがいゝだらう、二日や三日逢つてゐたのではどうも不消化でいけない、少し酸化してイヤ氣のさすまで一緒暮しをして見ようではないか、此處から伊豆の方に渡つて海なり溫泉なりに中の二三日をつぶすのもわるくないだらう、とにかくさうした世離れのした氣で事を計畫して來ることを勸告したい、何も一生の思ひ出だ、多少の犧牲と果斷とを要するは安んじて承知すべきだらうと思ふ、日にちだが、僕はイヤな用事でこの廿五六日に東京に出ねばならぬ、廿六日に東京在住の重立つた二十人ほどが舊創作社、いまの菊池君宅に寄ることになつてる、それにも出たいのだ、若し都合出來たらそれに間に合せる樣にあちらに出て來られないかネ、それが不能でどうしても十月の聲をきかねばといふなら四日や五日は東京で君を待つてゝもいゝ、これはみな東京經由の君を想像しての事だが、例の身延詣もわるくないと思ふ、いづれにするか右すべての返事を大急ぎで知らして吳給へ、妻も頻りに待つてゐる、

越前君は東京に歸つたか（君の手紙に歸鄕とあつたが、靑森に行つたのぢアあるまい）それはよかつた、ちつとは違つた繪がかけたか知ら、

彌次さんからたえて便りがないが、何かまたいやな病氣でもしてゐるのではあるまいネ、可哀相な困つた息子だ、素山老、終にいゝおぢさんになり終つたかナ、それがいゝのだ、それで落ちつききるとかな

り味のある人間が出來るだらう、

けふは野分といつた風が吹いて、寒い、

九月二十日あさ　　牧　水

柊花兄

二二

九月廿八日、上野より、京都、芹川弘吉樣宛（繪葉書）

田舍に引込んでるものですから、今年は止さうかと思ひましたが、やはり氣になつて繪を見に出て來ました、

そして、君のいつもの靜かな繪を見て、お目にかゝつた樣におもひました、御元氣ですか、

いつまでも獨りでじいつとかいてゐて下さい、

若山牧水

（大村木馬とのよせ書）

二三

十月二十七日、沼津在楊原村より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

重田君、

どうせさうだらうが、豫想以上にも校長その他から叱りつけられて完全にへいそくしてゐるのではあるまいかと二人して心配してゐた所へ昨夜甲州よりのお葉書により、とにかく呼吸してるだけは確實なることを知り大に安堵した、早くその詳しき消息に接したいものである、一別以來、兩人とも少々油の拔けた形で、毎日味氣なきつらをつき合せながら、大に味氣ありげに振舞つてゐるといつた傾向がある樣だ、歸つて何日目かに茨木猪之吉先生來り、數日中に二人して彼を富士川の川口に訪はうといふことになつてゐる、香貫山の茸狩、濱の黑鯛釣、川口の沙魚釣など、天氣さへよければ何か彼か遊ぶに事は缺かぬ樣だ、たゞ、困るのは時々二人して世の無常を感ずることで、ことに今日などこの寒い初時雨を見たり聞いたりしてゐると靈肉一致の無常感を覺えて、ほんたうによき枝ぶりなど探さむ氣にもなる、そして多分同じ思ひで居るであらうところの足下を思ひ出

すといつた形だ、欠の湯の景氣如何、二三日うち、舟で江の浦灣を渡り伊豆の溫泉を訪はむなどゝ空想して居る、廿七日夕方無常感に浸りつゝ　牧

（中村柊花の手紙同封）

二四

十月三十一日、沼津在楊原村より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

「もう何處でせうね」「さうさ、丁度身延に着いたころだらうよ」「もう何處らでせう、富士の向う側を歩いてゞせうね、お天氣でようござんすわねエ」と云つた調子で、けふは終日この家は哀愁情緒だ、ふわり〳〵と歩いて行つた人がなか〳〵に美しい、欠の湯など、目に浮んで困る、どんな風でどんな話をしてゐるか、あり〳〵と見える樣で、よくわからない、その邊の氣持がなか〳〵に苦しいものだ、机と長火鉢の間をあつちこつちと無限に往復してみるが、一向心がおちつかない、斯んな風ならいつそ釣にでも行けばよかつたのだが、もうそれにも遲い、あれを出したりこれを出したり、出しつ引つこめつ、爲事が更らに手につかない、いま文章世界の選にかゝつてみたが、これなどは割にこの際やりよい爲事だ、幸に今朝停車場から歸つたら名古屋からエヂプト卷の古めかしい一箱が屆いてゐて、胸の焦げ臭くなるまで吸つてゐる所だ、昨日來てくれゝばネ、一緒に吸へたものを、三本と五本は欠の湯にも持たしてやれたものを、

逢ふごとにお互ひの心がお第に練れて來る樣だネ、これはどの位ゐいゝことだかわからない、知らず〳〵人間が上等になつてゆく樣だ、生きてゐたいと思ふよ、

彌次さん、君も一つ早くよめさんを見つけろ、寂しさうで見てゐられない、早く見つけて早くいゝおだんなさんになつてしまへ、そしてもすこし垢のつかない着物でも着て沼津のさかなを喰ひに來い、ねエ中村君、昨日の天ぷらも魚田もなか〳〵うまかつたネ、アーア、また何だか靈肉一致で喰ひたくなつた、

欠の湯の明日よ、どうか天氣であつて呉れ、明後日もお天氣であつて呉れ、そして勞れた樣な若者二人の上にその清らかな光を存分に振りかけて呉れ、その人たちは立派な人たちなんだ、そして何だか氣の毒な人たちなんだ、お前はそれをよく知つてるだろ、だからよく晴れて存分に彼たちに手足を伸ばして話し込まして呉れ、

書いてゐて涙ぐましき日和かな　左樣なら、

三十一日午後二時　牧　水

中　兄

重　兄

中村君が立つたあとに屆いたらこのまゝあちらへ君から廻して呉れ、

二五

十一月二日、沼津在上香貫より、長野縣、中村端樣宛（手紙）

いま、鰍澤からのお葉書着、何となく遙かなる思ひにうたれつゝあり、皿井君にも逢へてよかつた、然し旅程の變更を生じはしなかつたかネ、身延山はどうだつたネ、青葉の頃あたり僕もまた一寸行つてみたいなどゝ思ひつゝあるが、そこから鰍澤まで矢張り歩くのだらうか、風景その他君の印象記承りたし、

昨夜の欠の湯はどんなだつたか、欠の湯といへば昨日の午後の便で彌次さんより君に宛てゝ書留郵便到着、普通なら早速東條村あて廻送すべきであるが、大抵内容の覗はるゝ種類のものだし、折も折、完全に涸渇してまアちやん（註、次女眞木子）の氷代に苦しんでゐた場合だつたので先づ天の助け（今にして思ふ、お祖師樣のお授けか）と雀躍して、早速開封、萩村を局に走らして氷を買はせたといふ始末であつた、君宛の手紙をも讀んでやゝ心を寒うするものがあつたが、或は君が受取らんなどゝいひはせぬかとも思はれたが、とにかくそれはなほ君の自由に屬することゝして金正に六圓なりをば僕は君から受

取つたといふことになる、よろしく君の方で差引勘定しておいて呉給へ、私信開封の罪をも併せてお詫びする、

一昨日昨日あたり、すつかりぼかーんとして、何一つ手につかなかつた、昨夜はまた例の如く起きて四角な罫を埋めてゆく筋肉勞働を六七時間續けた、おかげでけふも一日ぼかんとしてゐる、普通ならまた釣にでもゆく所だが、まアちやんがまた一方の耳から膿を出しだして痛がつてゐるので、行くわけにも行かず、實に苦しいわびしい思ひをして一日すごしてしまつた、何だか、急につき離された樣なよりどころのないわびしさが急に身に迫つて來て何とも手がつけられぬ、斯ういふ時例の天ぷら屋にでも出かけて大に飲んだら氣が晴れるだらうが、さういふわけにもゆかぬ、五尺の身體置く所なし、永く續くと本當に大本敎になりさうだネ、

君の方は如何、疊にすりつけた甲斐がありさうかね、とにかくもう少しすりつけること〳〵、例の干物、意地惡いもので出入の魚屋に賴んでも丁度いゝのがないさうだ、もう二三日待つて呉給へ、

御家族に呉々よろしく、妻よりもよろしく申上げて呉れとのことであつた、

折角來て呉れたに、といふ氣がいろ〳〵な形で出て來て、泣きたくなることが折々ある、便所に入つててなどことにさうだ、一體どういふ風に一緒に暮してゐたら滿足するのだらうね、

信州の秋のたよりを待ちます、

十一月二日午後五時　　牧　水

柊花兄

二六

十一月三日、沼津在楊原村より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

中村君が立つた翌日に君の書留が屆いた、甚だ濟まぬとは思うたが、大抵内容が伺はれたので、こちらで開封した、そして君からの六圓をも使つてしまつた、そのわけはもう中村君と逢つた時聞いたことゝ思ふ、中村君には君よりの手紙に添へ、その申譯

をば直ぐその時出しておいた、また、中村君からも君にそのことにつき何等かの消息があると思ふ、非常に手順が狂つて自然そんな無理をせねばならぬ破目に陷ちてゐたのでもあつたのだ、惡しからず許して呉給へ、中村君あての君の手紙をも讀んだが、隨分ひどい生活だね、それでは到底もてないよ、實に甲斐なき生活法だと思ふ、何とか法をたてねばいけないね、日常生活法について僕が說法するのはちと異なものではあるが、とにかくそれでは立つ瀨がある まい、無限の穴を埋めむとする努力はもう大抵でやめたがいゝと思ふ、敢て申すよ、

こちらあてにいろ〳〵の送り物のことにつき細々と、難有う、どうも然し氣の毒だ、で、芋の子とそば粉とを送つてくれたまへ、小鳥は謹んで辭退するよ、御親切はほんとに難有う、僕からは何を送らう、干物かね、沙魚を釣つてるので溜つたらとは思ふが、一日に五六疋の程度でいつ溜るやら覺束ない、何か然し考へておく、君の方で註文あらば聞いておきたし、

中村君とうまく逢へたか知ら、あの人にも氣の毒だつた、折角來て貰つたに丁度細君と子供（マアチヤン）とがわるくて、毎日いやな泣聲ばかり聞かせ通した、そして、あゝも斯うもと計劃してゐた事がすべて都合よく行かなんで（此處行歌調）別れてみるといよ〳〵氣の毒やら殘念なやらだ、可哀相に、今ころ彼はオヤヂ、オフクロ、オカミサン三角同盟にうん〳〵とつちめられてゐるだらう、南無阿彌陀佛だよ、ほんとに、

斯んな時がいつか來ると思つてゐたが、移住以來、最大の貧乏がいまやつて來た、豫定が二つ三つうまくくづれてこの四五日來一錢の金なしにゐる、（そんなで、開封罪だよ）明日あたり少しは何とかならうと思ふが、ならぬとなると干物だネ、これも矢張り夫婦がいけないのだ、いつになつたら性根をため直し得るのだか、考へてゆくと暗然たるものさ、

苦しみに苦しみぬけど貧乏に懲るゝ心のなほ足らぬかも